甘オホ × おねショタ
ダウナー褐色エルフ聖女様と、
甘々性教育からのドスケベセックス♥
CV：分倍河原シホ

目次

プロローグ　伝説のパーティーの聖女様　002
第一章　聖女様は教育熱心　005
第二章　聖女様への依頼　050
第三章　音楽の都　108
第四章　平穏な日常の幸せ　169
エピローグ　これからも続く幸せな日々　185

プロローグ　伝説のパーティーの聖女様

神歴三百八十二年――今から十年前。

人類と魔族の戦争が終結した。

魔族の長たる魔王の討伐――それを成し遂げた冒険者パーティーがいたのだ。

彼らはギルドにすら所属しない野良の冒険者だったらしい。

そして今では――勇者や英雄、救世主と崇められ、今では伝説のパーティーと言われる存在となっていた。

勇者メイル――伝説のパーティーのリーダーにして雷魔術のスペシャリスト。

闘神アムナム――女性でありながら魔王とすらも渡り合う最強の戦士。

破邪ウォル――無数の魔術を扱う大賢者であり、パーティーの参謀。

そして――救世の女神ルティアの生まれ変わりと民に称されたエルフの聖女。

彼女は魔王を討伐した直後、戦争で傷付いた人々を救う為に旅へ出たとされている。

多くの人々が彼女に救われたという話が伝えられており、今では吟遊詩人の奏でる歌の一つとして定番のものになっていた。

人々を救う癒しの聖女。その名は――サリア。

※

魔族の統率者たる魔王が倒された。
だが、世界は完全に安寧を取り戻したわけではない。
今も尚、魔族の残した傷跡はあらゆる場所に深く刻まれている。
「これは、あまりにも……」
私が訪れたこの村もその一つだ。
建物は焼け落ち、地面は抉れ、人が住んでいた痕跡すらも消えようとしている。
言葉を失うほどの蹂躙の限りを尽くされていた。
（……襲撃を受けて、数日というところかしら？）
まだ一部地域では、魔族残党の破壊活動が起こっているとも聞いている。
事態の収束に向かっているはずなのに、争いは消えることはない。
人と魔物の戦いはこれから未来永劫、続いていくのだろうか。
「……生き残った者は……」
周囲を見て回るが、生き残りは絶望のように思えた。
そう思った時――声が聞こえた。
赤ん坊の泣き声だ。
「っ――」
私は声の方向に走り出す。
まだ救える命があるかもしれない。
（……お願い、間に合って）

声がはっきりと聞こえてくる。

どうか女神ルティアよ、この赤子の命をお救いください。

願いながら向かった先。

村から少し離れた大樹の中心に、小さな穴が開いていた。

その中には、

「ああ……女神ルティアよ。あなたに感謝します」

白い布に包まれた赤ん坊が見えた。

弱々しくも、確かに生きたいと訴えている。

「直ぐに出してあげますからね」

私は大樹の中に手を伸ばして、その赤ん坊を優しく抱きしめる。

すると私の顔を見て安心したのか、赤ちゃんはきゃっきゃと笑った。

「よかった……命に別条はなさそうですね」

この子の親の姿は見えない。

恐らく、自分の子供を救う為に自らが囮となったのだろう。

「……どなたかはわかりません。でも、あなたの想いは私が引き継ぎます」

魔族の手を逃れ、救うことの出来た命。

私がこの子を、立派な子に育てます。

この赤ん坊のご両親の無念を晴らせればと、私は祈りと誓いを捧げたのだった。

第一章　聖女様は教育熱心

王都から遥かに東。

辺境とまでは行かずとも、それに近い人口も少ない村。

その教会で今、私は司祭を務めていた。

既に魔王の討伐から暫くの時が流れ、あの時に比べれば世界は平穏を取り戻したように思う。

「救世の女神ルティア――我らが大地母神よ。どうか今日も人々に安寧をお与えください」

礼拝堂での祈りを終えた。

これは早朝の日課だ。

そしてもう一つ、私には朝のルーティンがある。

「もう……いい時間になりましたね」

礼拝堂から移動する。

そして、ある一室の前で足を止めた。

扉を開くと、安らかな顔で眠る少年が見えた。

（……ふふっ、今日も気持ちよさそうですね。このまま眠らせておいてあげたいくらい）

でも、あまり甘やかしてはいけません。

この子を立派な人に育てると、私はあの日――誓ったのですから。

それに優しくするばかりが愛情ではありません。

今日も心を鬼にして、

「……リオくん……起きてください」

なるべく優しく、リオに声を掛ける。

あまり大きな声を出しては、びっくりさせてしまうから。

「……朝ですよ。朝ご飯、食べましょう」

「ぅ……ぅ〜ん……」

もう一度声を掛けると、お寝坊さんが眠そうな声をあげました。

「ほぉら……起きてください。このまま眠ったらお昼になってしまいますよ？」

「……ぅぅ……もうちょっとぉ……」

可愛い顔で、おねだりするみたいに言われてしまいました。

なんだか起こすのが可哀そうになってしまいますが、

「ダメです。このままじゃ、朝ご飯を食べる時間がなくなってしまいますから」

ゆさゆさと、リオくんの身体を揺らす。

「ぅ〜……わかったけど……ぅぅ……サリアお姉ちゃん……起こして」

甘えん坊さんが手を伸ばしました。

引っ張って起こしてほしいということみたいです。

「……仕方ありませんね。それじゃ、いきますよ。せ〜の……」

ぐっと手を引っ張って、身体を起こしてあげました。

「はい。しっかり起きられましたね」

「ぅぅ……まだ、寝たいよぉ」

目を擦りながら、リオくんが眠そうにうつらうつらとしています。
「また眠っちゃダメですよ。いいですね？」
「うん。サリアお姉ちゃん、いつもありがと」
眠そうな顔で笑うリオくんは、天使のように可愛かった。
ちゃんと素直に感謝もできて、真っ直ぐに、純粋に、彼が育ってくれていると感じます。
ですが、
「……リオくんも、そろそろ一人で起きられるようにならないとダメですからね？」
甘やかし気味だからこそ、言うべきことはちゃんと言っておかないとですよね。
「うん。……ぼくもがんばってるんだけど……朝、つらくて……ごめんね、サリアお姉ちゃん」
「いいえ。少しずつでいいんです。今日も一生懸命、起きられて偉いですよ」
日々、成長するリオくんを褒める為に、よしよしと頭を撫でました。
リオくんを引き取ってからは、私は子供は褒めて伸ばす方針にしています。
甘やかしていると思われるかもしれませんが、人は怒られるよりも、褒められるから頑張れるものだと思っています。
「お着替えは一人でもできますか？」
「……うん、がんばる……」
「いい子ですね……それでは私は先に戻ってスープを温めておきますね」
「うん……ボクも直ぐに行くね」
そして私は一足先に部屋を出た。

居間に戻り台所へ。

そして鍋を火にかけて朝食用のスープを温める。

少しするとぐつぐつ、ことこと、と煮えてきた。

「う～ん……おはよう」

ちょうどいいタイミングで、まだ眠そうなリオくんが部屋に入ってくる。

「おはようございます。直ぐにパンとスープを出しますから」

「ボクも、お手伝いするね」

「あら？　じゃあパンを置く木皿をテーブルに置いてくださいますか？」

「わかった」

リオくんが木皿をテーブルに並べてくれる間に、私はスープを掬いカップに注ぎました。

「準備できたよ～」

「はい。こちらも直ぐに持っていきますね」

テーブルにスープと、木皿にパンを置いた。

そして椅子に座って、私は食前の祈りを捧げます。

「女神ルティア――日々の豊穣に感謝いたします」

私に習いリオくんも手を合わせた。

二人で祈りを捧げ終えて、

「では、いただきましょうか」

「うん！　いただきます」

食事を始める。

お腹が空いていたのか、リオくんはパクパクとパンにかぶりつた。

「しっかり噛んで食べるんですよ。あ、スープは熱いですから気を付けて」

「うん」

リオくんはいつも美味しそうに食べてくれるので、料理をするのに張り合いがあります。

「もう一つ、パンはいかがですか？」

「食べる！」

買ってあるパンを一つ、リオくんの木皿におきました。

食べ盛りの彼の為に、パンは多く買ってあります。

それもあっという間に食べてしまって、満足顔のリオくん。

満面の笑みがとても可愛らしくて癒されます。

「ご馳走様でした」

私よりも先に食事を終えて、リオくんは手を合わせました。

「はい。お粗末様でした」

食べ終えたお皿をリオくんは台所に片付けてくれました。

当然のようにお片付けもできて、よしよししてあげたくなってしまいます。

「お昼は、何か食べたい物はありますか？」

「う～ん……お姉ちゃんが作ってくれたものなら、なんでも」

その言葉に、私の胸はリオくんへの愛しさで満たされました。

（……本当に、なんていい子なの。女神ルティアよ、リオくんはなぜこれほど天使なのでしょうか？
この天使に健やかな未来をお与えください）
純粋な天使の笑みで、そんなことを言われては、料理の腕を振るうしかありません。
「わかりました。美味しいの作りますから」
「うん！　楽しみにしてるね」
「はい。リオくん……この後はお勉強の時間ですからね」
この小さな村に学校はありません。
なので私が、リオくんにお勉強を教えています。
「ぁぅ……やらないと、ダメ？」
そんな可愛い顔で言われたら、「お勉強なんてしなくていいです」と口にしてしまいそうです。
でも、それはリオくんの為になりません。
彼を立派な大人にする為にも、必要なことをしっかりと学ばせてあげないと。
「ダメです。お勉強は日々の積み重ねですよ」
「……うぅ……わかった。でも、がんばったら……ご褒美、ほしいなぁ」
「ご褒美ですか？」
「うん……今日はお姉ちゃんと一緒のベッドで寝たい」
「まぁ……リオくんたら、甘えん坊さんですね」
最近は一人でも眠れるようになってきたリオくんでしたが、やはりまだまだ子供のようです。
でも、そのくらいの我儘なら叶えてあげなくてはいけませんね。

「では、しっかりとお勉強できたら、今日はい～っぱいご褒美をあげます」
私がそう伝えると、リオくんは嬉しそうに目を輝かせました。
「わかった！　ボク、がんばるから！」
「はい。では先にお部屋へ戻って、お勉強していてください」
「うん！」
元気に返事をして、リオくんはお部屋へ戻っていった。
私は台所にあるお皿を洗い居間を軽く掃除してから、彼の待つ部屋と向かいました。
リオくんの邪魔をしないように、大きな音を立てないように扉を開きます。
すると、しっかりと机に向かいお勉強をするリオくんが見えました。
（……集中して、お勉強しているみたいですね）
ちゃんと約束を守れるのはいいことです。
ゆっくりと近付いて、リオくんの後ろからノートを覗いてみると、
（……しっかりと解けていますね）
答えも合っていました。
毎日、お勉強を頑張っている成果がしっかりと見れます。
（……どうしましょう？　集中できていますし、今は声を掛けないほうがいいでしょうか？）
悩んでいると、
「ぁ……サリアお姉ちゃん」
リオくんが私に気付き、声を掛けてくれました。

「すみません。集中していたので、声を掛けていいものかと思って。……今のところ、わからない問題はありませんか？」

「大丈夫！　もしわからなくなったら聞いてもいい？」

「はい。何かあったらいつでも聞いてください」

そう伝えて私は部屋の椅子に腰を下ろしました。

それから暫くの間、ペンを走らせる音が部屋に響いていました。

ですが、その音が突然、止まりました。

何か難しい問題があったのでしょうか？

（……直ぐに声を掛けないほうが、いいですよね？）

今、リオくんは一生懸命考えているのですから。

様子を窺っていると、う～ん……と、唸る声が聞こえてきました。

どうやら、かなり苦戦しているようです。

私は椅子から立って、リオくんに近付いていきました。

「大丈夫ですか？」

「ぁ……考えてたんだけど、この問題がわからなくて……」

「ちょっと見せてくださいね」

問題を確認する為に、リオくんに近付く。

「う……ぁ……」

「うん？　リオくん、どうかしましたか？」

「あぅ……いや、あの……」
「うん？」
「顔が赤いような……？」
熱でもあるのでしょうか？
そう思い彼の額に手を当てます。
「熱は……ない、みたいですね」
「あ、だ、大丈夫、だから……」
リオくんが顔を逸らしてしまいました。
こんな反応をするのは珍しいです。
「リオくん……何かあったのですか？　もし悩みがあるなら話してください」
「な、悩みとかじゃ……」
明らかに様子がおかしくて、なんだか心配になってしまいます。
少しでも元気付けたくて、私はリオくんをぎゅっ……と、抱きしめました。
「ぅぅ……や、やめて、お姉ちゃん」
「どうしてですか？　昔は良く、こうやってぎゅ〜〜ってしてたじゃないですか」
「そ、そう……だけど……や、なの」
「リオくん……？」
それは明らかな拒絶でした。
一体、リオくんはどうしたのでしょうか？

「本当に……どうしたのですか？」

不安になる私を見て、リオくんがはっとした顔をしました。

そして、

「……お、お姉ちゃんにぎゅっ……って、されると、身体が変になっちゃうの」

戸惑いながら、彼がそんなことを言いました。

「身体が……？」

椅子に座るリオくんの身体を見る。

すると、

「っ――」

思わず息を飲んでしまった。

リオくんのあそこ……股間の部分が明らかに膨らんでいたから。

（……あぁ……そういうこと、だったんですね）

お勉強を教えようと近寄った時、私の身体がリオくんに触れていました。

椅子に座るリオくんを、ぎゅっ……とした時も同じです。

（……ど、どうしましょう。あ、だ、ダメ……私が動揺してしまっては……）

こういう時こそ、冷静に。

そうでないと、リオくんが不安になってしまいます。

成長する自分の身体に戸惑いがあるのは当然です。

「リオくん……大丈夫ですよ。これは男性の生理現象なのですから」

「生理現象？」

「はい。大人の男性なら……お、おちんちん……が、大きくなってしまうのは、当然のことなのですよ」

「……そう、なの？」

「はい。リオくんは……初めて、こういう風になったのは、いつくらいからですか？」

「わかんない……でも、お姉ちゃんを見てたり、触られたりすると、こうなっちゃう時があって……ボク、これが悪いことなのかなって思って……」

リオくんの目に涙がたまっていきました。

誰にも相談できなくて、ずっと辛かったんですね。

「リオくん、ごめんなさい。気付いてあげられなくて」

私は優しく、リオくんを抱きしめました。

「ぁ……ダメ、お姉ちゃん。また、おちんちん、おかしく……」

「大丈夫です。リオくん……今日はいつもとは違うお勉強をしましょう」

「え……？」

これは教えなくてはいけないこと。

だから、決して不埒なことではありません。

「リオくん……失礼します」

「ぇ……」

彼のズボンと下着をずらす。

すると勃起したおちんちんが直ぐに顔を出した。

（……あぁ……こんなに膨らんで……）

リオくんが、いつの間にかこんな立派に成長しているなんて。

でも、おちんちんは皮を被っていました。

「……お、お姉ちゃん、見ちゃダメぇ……恥ずかしいよ」

「大丈夫ですよ、リオくん。私を信じてください」

「ぅ～……で、でもぉ……」

「聞いてください。これは勃起という現象です」

「ぼ、ぼっき？」

「はい。男の子は成長すると、興奮した時におちんちんが大きくなるんです」

「成長すると？　これは、変なことじゃないの？」

「はい。男性なら自然なことです」

「で、でも……お姉ちゃんを見たり、触れられたりした時だけ……こうなっちゃうの」

「そ、それは……」

どう答えればいいのでしょうか？

リオくんが私に興奮しているということで……一人の女として見ている。

そういうことになるんですが……。

「女性を見てこうなってしまうのは、種を繁栄する上でも当然のことなのです。リオくんにはまだ早い話なので、その辺りは徐々にお勉強していきましょう」

「う、うん……」

「今はそれよりも……こうなってしまった時の対処法に付いて教えますね」

「？」

「リオくん、触りますよ」

「ぁ……うぅ……」

熱く硬くなったリオくんのおちんちんに、私は優しく触れた。

「まずは皮をむきむきしましょう」

「皮を？」

私は先っぽの皮を掴んで、グイッ、グイッと、ゆっくりと剥いていきます。

「あっ……おねえ、ちゃん……それ、なんか、先っぽ、キツい」

「大丈夫です。ちゃんと剥けますからね」

ここで、しっかりと剥いておいてあげないと。

おちんちんを清潔に保つには、早めに剥いたほうがいいと聞いたことがあります。

もっとリオくんが子供の時に、ちゃんと教えておくべきことでした。

（……保護者、失格ですね）

でも、だからこそ今……しっかりと剥いてあげないと。

グイグイと、先っぽの皮を竿のほうに引っ張って……。

「おちんちんの赤い先っぽ――お顔が見えてきましたよ。もう少しですからね」

「あっ……あぁ……おねえ、ちゃん……おちんちん、苦しいよぉ」

「もう少し、もう少しですから……がんばって、リオくん」

むきむきと……亀頭が顔を出して――ズルズルッと、最後は一気に皮が剥けました。

「あぁ……これでちゃ～んと剥けましたよ。リオくんのおちんちんも、これで大人になりました」

亀頭がしっかりと露出しています。

カリ首が高い、逞しいおちんちんに変わりました。

「これで……ボクも、大人になったの？」

「はい。これもリオくんが成長した証です」

皮が剥けたことで、リオくんのおちんちんはさらに膨らんで、すごく苦しそうです。

「リオくん。おちんちんは勃起してしまうと……射精をさせなければいけません」

「しゃ、せい？」

「はい……そうすることで、男性は昂りを抑えることができるんです」

「ど、どうしたら、それできるの？」

「それは……こうして……手でおちんちんを上下に……」

シコシコ――と、私はリオくんのおちんちんを扱き始めました。

その瞬間、リオくんがビクンと震えました。

快感が強かったのか、おちんちんも手の中で暴れています。

「ぁ……お姉ちゃん、それ、なんか変……」

「大丈夫ですよ。これは気持ちいいってことなんです。この快感に身を任せてください」

出来る限り優しく伝えて、私は緩い力でおちんちんを扱いていきます。

シコシコというエッチな音と、リオくんのこそばゆい息遣いが耳に入って。

（……なんだか、私も変な気分に……）

って、ダメ、です。

私は何を考えているの。

これはリオくんの為、あくまで性教育なのですから。

「リオくん……どうですか？　おちんちん、気持ちいいのわかりますか？」

「ぁ……う……ぅぅ……お姉ちゃん、これぇ……すごい、頭、ぼっとしてきちゃう」

「いいんですよ。もっともっと気持ちよくなってください。ほら……見えますか？　おちんちんから、ヌルヌルしたのが出ているの」

私に言われて、リオくんは自信の亀頭の鈴口を見ました。

「な、なに、これ……」

「これはカウパーです。男性は気持ちよくなると射精の前にこれが出るんですよ。射精の前準備のようなものです」

「じゃ、じゃあ……ボク、もう射精するの？」

「それは、わかりません。直ぐかもしれませんし、まだ出来ないかもしれません」

「ぅ……で、でも、さっきから、おちんちん、熱くて……」

「では……もし何かきそうになったら、教えてください。多分、それが射精の前兆なので」

「き、きそう……？」

絶頂の感覚を、リオくんはまだ知らないのだろう。

こういった事も、一つ一つ教えてあげないと。

身体の成長に伴う戸惑いを少しでも減らしてあげなくては。

「リオくん、少しだけ強くしますね」

扱いていた手に少し力を加える。

そしてさらに速く、シュッシュッシュッ――と、おちんちんを扱きました。

「んっ……お、お姉ちゃん、それ……ダメぇ」

「大丈夫、大丈夫です。怖くないんですよ。今、リオくんが感じているのは、気持ちいいってことなんです」

「き、気持ち、いい？　あ、熱い。お姉ちゃん、おちんちんが、熱い、よぉ」

「射精、しちゃいそうですか？」

「わかんない。わかんない、けどぉ……何か、おちんちんが爆発しちゃうみたいな熱いのが、上がってきてて……」

あぁ……リオくんの顔、真っ赤になってる。

おちんちんもさらに硬くなって、私の手までカウパーが垂れてドロドロになっています。

それがローションのようになって、おちんちんの滑りがよくなって、より強い快感をリオくんに与えていきます。

（……あぁ……あぁ……リオくん、逞しい。いつの間にか、こんな男の子になっていたんですね）

リオくんの大人おちんちんを見て、私の身体も昂りを覚えていました。

（……ああ、保護者の私が……こんな興奮をしてしまうなんて……女神よ、お許しください）

気を抜けば、自然と手が自身の股へ伸びてしまいまそうになってしまう。

でも、それはダメ。

私が気持ちよくなるんじゃなくて、これはリオくんのお勉強なんだから。

昂りを抑えながら、私はリオくんの耳元に唇を近付けました。

「いつでもいいですよ、リオくん。でも、射精しちゃう時はイくって、言ってくださいね。突然、出てしまうと、相手の人がびっくりしちゃいますから」

「え？　イく？　わかんない、お姉ちゃん、わかんないよぉ」

「少しずつ覚えていきましょう。さぁ、リオくん――イってください」

優しく耳に囁きながら、私はリオくんのおちんちんから、精子を搾り出すように亀頭から竿まで激しく扱きあげた。

瞬間、

「お、お姉ちゃん、ダメ、何かきちゃう、これ、イちゃう、イっちゃうよ、んんっ」

ビュウ――ビュルルルルルウぅぅぅう！

驚くくらいの勢いと量の真っ白い精子が、リオくんのおちんちんから噴き上がった。

「あっ……んっ、んあああああっ」

それは私の顔にまで掛かる

手は真っ白に染められていた。

（……ああ、すごい匂い）

確かな雄の香り。

まだまだ子供だと思っていたリオくんが、こんな女を発情させる雄になっていたなんて。
「あっ……お姉ちゃん、まだ出るぅ……イくぅぅ」
「いいですよ、リオくん、全部、出し――ふあっ、んんんんんんっ」
ビュウ――ビュルルルルルルウ、ビュルルルルルウぅぅぅう！
二度目の射精。
私は今度こそ全部を搾り出す為に、射精をするリオくんのおちんちんを扱き続けた。
すると、リオくんは腰を跳ね上げて全身を震えさせた。
異常なほど勃起していたおちんちんが、やっと鎮まっていく。
（……あぁ……すごい量。これをもし……膣内（なか）で出されたら……）
一発で孕んでしまうかもしれない。
床にリオくんの出した精子が零れ落ちる。
（……ああ、もったいない）
手に付いたリオくんの精子を、自然とぺろぺろと舐めてしまう。
（……ああぁ……ダメぇ、こんなはしたない姿をリオくんに見せちゃ）
私は慌てて正気に戻り、リオくんに目を向ける。
でも、
「……ぁ……ぁぁ……すごい……これが射精……イくって、こと……なんだぁ」
初めての射精の快感に酔いしれるように、リオくんは顔を赤くしてぼんやりしていた。
「少し休んだらお風呂に入ってください。部屋のお片付けは私がしておきますから」

「う……う、ん……で、でもぉ……今はまだ、動けなさ、そう」

「大丈夫ですよ。落ち着くまで、お姉ちゃんがリオくんの傍にいますから」

彼の身体を支えるように抱きしめる。

（……でも、よかった。ちゃんと射精させてあげられて……）

性教育は得意分野ではありませんが、最低限のことは教えてあげられた。

今後もリオくんが大人になる為に、教えてあげないといけないことが沢山ある。

そんなことを考えながら、リオくんが初めての射精の快感から覚めるまで、私はずっと寄り添い続けるのだった。

※

リオくんはお風呂を済ませると、何事もなかったように勉強に戻りました。

先程よりも明らかに集中力が上がったのか、リオくんはどんどん問題を解いていきます。

それが、射精させたことと関係があるのかはわかりませんが、身体が昂り過ぎてしまうと、落ち着いて集中できないというのはあるかもしれません。

そして夕飯も終わり、汗を流した後、就寝の時間になりました。

――コンコンコン。

私の部屋にノックの音が響きました。

「どうぞ」

ガチャ――と、扉が開き、枕を持ったリオくんが部屋に入ってきました。

「お姉ちゃん……」

「はい。一緒に眠る約束でしたよね」

「うん。……いい？」

「勿論です。リオくんは今日、い～っぱいお勉強をがんばりましたから」

約束を守ること。

そして、その分のご褒美を上げるのは当然のことです。

リオくんには、ちゃんと約束を守る人であってほしいからこそ、私も約束は必ず守ることにしていました。

「……リオくん、こちらへ」

私はベッドに入り毛布を広げると、彼に手招きします。

「う、うん」

そして、導かれるままに、リオくんはベッドへ入ってきました。

「……？　リオくん、どうしてそんなに離れているのですか？　それに背を向けていますし」

折角一緒に寝るのに彼は遠慮しているみたいでした。

「だ、だって……」

「それほど大きくないベッドなのですから、もっと寄り添うように眠りましょう」

言って私はリオくんを振り向かせて、ぎゅっと抱きしめた。

「リオくん……温かいです。昔はこうして、よく一緒に眠りましたね」

「う、うん……」

「あの頃のリオくんは少し泣き虫で、甘えん坊でしたよね」

「は、恥ずかしいから、そんなこと言わないでよ」

「ふふっ……ごめんなさい。でも、本当に最近は成長して……どんどん立派な大人になっていると感じていますよ」

「……お、姉ちゃんの為にも、ボク……いっぱいがんばるから」

「ふふっ……ありがとうございます」

リオくんの優しい想いに、私は胸がいっぱいになってしまいました。

「そんな優しいリオくんには、ぎゅうううう〜〜〜〜〜」

愛情をたっぷり伝える為に、私の天使を抱きしめました。

「んっ……お、お姉ちゃん、ダメ。そんな胸を押し付けられたら……」

「え？　……あっ……リオくん……」

悶えるようなリオくんの声が聞こえたかと思うと、彼の股間が私のお腹の辺りに当たるほど、硬く大きく勃起していました。

それは服の上からでも、確かに感じられるほどです。

（……朝、あれほど出したのに……）

内心、驚きが止まりません。

でも、これが若い精力ということなのでしょう。

もっと、しっかりと精を解放してあげなければ。

「……ご、ごめんなさい」

「いいのですよ。リオくんは……また、出したい、ですか？」

私が尋ねると、顔を真っ赤にしながら小さく頷きました。

「わかりました。……では、また手で……」

「ぁ……あの……おねえ、ちゃん」

「うん？」

「あ、あのね……お願いが、あるの」

迷いながらも、でも自分の意志を伝えるように、リオくんが私の目を見ました。

「なんですか？」

「……お姉ちゃんの、おっぱい……ほしい」

「え……おっぱい、ですか？」

「……だ、ダメ？」

「あのリオくん……私、お乳は出ませんが……？」

「い、いいの……お姉ちゃんのおっぱい……安心する、から……」

「ふふっ……大人になったようで、リオくんはまだまだ甘えん坊なんですね」

顔を真っ赤にするリオくんを見ていると、愛おしい気持ちが溢れてきて。

甘やかし過ぎるのはダメと思って、なんでもしてあげたくなってしまいます。

「いいですよ。お姉ちゃんのおっぱいで、い～っぱい甘えてください」
私は身体を起こして、ベッドの上で膝を折りました。
そして修道服を脱ぎ、胸を包む下着も外しました。
「リオくん、ここに頭を置いてください」
私が自分の膝をポンポンと叩き、リオくんを導きました。
それに従って、リオくんは頭を置いて、膝枕をさせてくれました。
「痛くないですか？」
「うん……お姉ちゃんも大丈夫？　ボク、重くない？」
「……大丈夫ですよ。リオくんに膝枕できて、私は嬉しいですから」
「ボクも……お姉ちゃんの膝、柔らかくて……あったかくて……気持ちいい」
言いながら、リオくんの視線が私のおっぱいに向いているのがわかりました。
早くおっぱいが欲しいみたいです。
「リオくんは本当におっぱいが好きですね。小さい頃から、今も……どこかで乳離れをしないといけませんよ？」
「ぅ……だって……サリアお姉ちゃんのおっぱい……安心するんだもん」
「でも、少しずつでいいから頑張るんですよ。甘えてばかりでは、お友達にも笑われてしまいますから」
「わ、笑われたっていいもん……お姉ちゃんが傍にいてくれたらいいの」
「めっ……ですよ。みんなと仲良くです。それが出来るなら、大人になっても、たまにはお姉ちゃ

んに甘えてもいいですから」

「ほんと？」

「はい……私はリオくんに嘘は言いませんから」

「じゃあ……がんばる」

「はい……いい子ですね」

なでなでと、優しくリオくんの頭を撫でた。

心地よさそうにリオくんが目を細めます。

「リオくん……はい。おっぱい……自由にしていいですから」

「ぁ……サリアお姉ちゃんの、おっぱい。んっ……ちゅ、ちゅうぅ……ちゅうぅぅ」

「んっ……ふふっ、そんなに強く吸って……ぁ……よっぽどおっぱいが恋しかったのですね」

乳首に口を付けて、リオくんが一生懸命吸いついてきました。

母乳を飲む赤ちゃんみたいで、とても可愛いです。

「ちゅうっ……ちゅうううぅぅぅう……ちゅうっ、ちゅうぅ……ちゅうううっ…」

「あっ……んあっ……り、リオくん……ちょっと強く吸い過ぎです、からぁ……」

リオくんにおっぱいを吸われて、思わず甘い声が出てしまいます。

これは、子供におっぱいを与えているようなもの。

決してイヤらしいことをしてるわけじゃないのですから……声、出しちゃ。

「お姉ちゃんの……おっぱい、好きぃ。もっと、吸いたい。ちゅうううぅぅぅ、ちゅうううううう

うぅぅぅう、ちゅうううううううっ」

「んっ……んああっ……ふぅ……はぁ……んあああっ、あんっ、んあああああっ」

乳首をしゃぶるように吸われてしまい、強い喘ぎ声をいっぱい上げてしまいました。

これじゃ私が感じてるのが、リオくんにバレてしまいます。

なんとか声、我慢しなくちゃ。

「お姉ちゃん……なんだか、気持ちよさそう？　なら、もっと強く吸ってあげる」

「っ……やっ、だ、ダメでっ――」

リオくんが、ちゅうううううううっ……と、激しい音が出るほどに、乳首を舐めしゃぶりました。

「んおっ……ああっ、だ、だめぇ……リオくん、じょ、女性の乳首を、そんなしゃぶるように吸っては……んっ、んおおっ❤　あっ、んあああっ……ふぅ……ふぅぅぅぅ……」

下品な喘ぎ声が出てしまう。

それを隠すように、私は自分の手で口を押さえました。

これで少しは声も、抑えられるはずです。

「お姉ちゃんの、もっと可愛くて、エッチな声、聞きたい」

「り、リオくん？　ど、どうしたのですか？」

いつもの彼と違う。

可愛いリオくんのはずなのに、何かいつもの感じと違っていて。

何か……そう、女を堕とそうとする男の顔に見えてしまいました。

「お姉ちゃん……女の人は、射精……できないの？」

「ぁ……じょ、女性にはおちんちんはないので……射精はできません」
「じゃあ……イくのもできない？」
「そ、それは……」
答えるべき、だろうか？
でもリオくんに性に対する教育が出来るのは私だけです。
なら、これはきちんと教えないと。
「女性もイくことができますよ」
「じゃあ……女の人は、どうしたらイっちゃうの？」
「そ、それは……その……胸を刺激したり、その……女性器……男性のおちんちんが付いている場所を刺激すると、オーガズム――イくことができます」
「じゃあ……やっぱりおっぱい、気持ちいいんだ」
「それは……」
「あっ……んああっ……リオくん、そ、そんなっ……乳首、抓っちゃ……んんっ❤」
リオくんが右のおっぱいを吸いながら、左の乳首を揉みながら抓ってきました。
甘えるだけじゃなく、明らかに女性を感じさせる行為。
「お姉ちゃん……ボク、お姉ちゃんをいっぱい気持ちよくさせたい。それで……お姉ちゃんのイくところ……みたいよ」
「だ、ダメです。リオくん、そ、そんなはしたないことを……女性に言っては……」
「どうして？　だってお姉ちゃんは、ボクのイくところ、見たよ」

「っ……そ、それは……あ、あれは性教育の一環で……」

「ボクがイっちゃうの見たなら、お姉ちゃんも見せてくれないとずるい」

「あっ……んんっ……あっ……んああっ❤」

乳首をしゃぶりながらリオくんが、かじっ！　と私の乳首を甘噛みしました。

瞬間――

「んおおおっ❤　はぁ…ふぅぅぅ……はぁ……はぁ……んああっ❤」

乳首から電流が流れるみたいに、背中が仰け反ってしまうほどの快感が全身に走りました。

なんとか快感を逃がそうと身体を捻ろうとしたのですが、リオくんの手がさらに反対の乳首を責めてきました。

「お姉ちゃん……今、すっごい声出てた。それに、エッチな顔してるよ」

「そ、そんな……ことは……んっ、あっ……んあっ……んあああああっ」

甘噛みした乳首を、今度はちろちろと舐めてきて。

教えてもいないのに、緩急を付けた刺激を与えられていました。

これは男性の――女を堕とす為の本能なのでしょうか？

「はぁ……あぁ……」

このままでは、本当にイかされてしまいます。

私たちは、快感を貪り合う為にこんなことをしているわけではない。

だからリオくんに落ち着いてもらわないと。

呼吸を繰り返しながら、私はリオくんのあそこに目を向けました。

寝巻の上からでも、おちんちんが……辛そうなくらい……膨らんでいるのがわかります。
「私のことを感じさせようとする、悪いリオくんには……お仕置き、です」
下着の中からリオくんのおちんちんを取り出しました。
「ぁ……お、お姉ちゃん……おちんちん、触っちゃ、ダメだよ。今はボクがお姉ちゃんのおっぱい、感じさせてあげる番だから」
「ダメです。リオくん、私の手で、いっぱい感じさせちゃいますから」
朝した時よりも、ぎゅっとリオくんのおちんちんを握って、強い刺激を与えていきます。
シコシコシコシコシコシコ――と、激しく扱きました。
すると、リオくんの腰がビクンビクンと震えて、ガタガタとベッドを揺らしました。
「あっ……だ、だめぇ……お姉ちゃん、それつらいぃ……」
「リオくんもさっき、お姉ちゃんダメだと言っても、やめてくれませんでしたよね？」
少し反省してもらう意味も込めて、これは少し意地悪です。
「やっ、あっ、ああっ……お姉ちゃん、それダメぇ」
「覚えておいてください。リオくん、男性はこの亀頭の部分がとても敏感なんですよ。だから……」
手で亀頭を掴んで指で掻き回すように刺激しました。
「こうやって先っぽを刺激してあげると、すっごく気持ちいいでしょ？」
「すごい……すごいよぉ……で、出ちゃい、そう」
「だ～め……まだ、イかせてあげません」
私はリオくんを刺激していた手を止めました。

「な、なんで……お姉ちゃん……どうしてイジワルするの？」

「リオくんが、私を無理やりイかせようとしてからです。女性の乳房はとても大切な場所なんです。赤ちゃんを育てる為の母乳が出る場所なのですから」

「でも……おっぱい吸ってもいいって言ったから……」

「それは構いません。でも抓ったり、噛んだりしてはダメです」

「ぼ、ボクもお姉ちゃんのこと……気持ちよくしてあげたいのに……」

「……その気持ちは嬉しいですが……」

悲しそうなリオくんの顔を見ると、胸が締め付けられるほど苦しくなってしまいます。

ですが、もし彼に大切な人ができた時……男性だけが一方的に快感を得てしまうような、やり方ばかりするようになってはいけません。

好きな人とまぐわう時は、互いを慈しみあいながら、愛情をたっぷりに注がなければならないのですから。

でも、もし……性行為についてもしっかりと教えるなら……私が指導をしてあげないと、なのでしょうか？

無責任に叱りつけるだけでは、リオくんの為になりません。

「……わかりました。それでは、今度は二人で一緒に気持ちよくなりましょう」

「いいの？」

「はい。リオくんも、しっかりした性教育を受けてもいいと思いますから。私の身体を使って、これから少しずつ、エッチなことを教えてあげますね」

「エッチな、こと……」

「はい。愛し合う男女はエッチ――性交――セックスとも言いますが、男女のまぐあいをするのです」

「まぐ、あい？」

「とにかく……少しずつ、覚えていけばいいですから。リオくん、今日は女性のおっぱいの触り方を教えてあげますね。乳房は、さっきみたいに乱暴に扱ってはいけません。女性の身体は繊細ですから……優しく、愛情たっぷりに触れてください」

「う、うん……」

リオくんの手を掴んで、そのまま私の乳房に導きました。

「おっぱいを優しく揉んでみてください」

もみもみ……と、彼の指が私の乳房に沈み込みました。

「ぁ……お姉ちゃんのおっぱい、柔らかい……」

「女性の乳房は……愛する人を包み込む為にあるのです。だから柔らかいのですよ」

「これだけでも、気持ちいいの？」

「はい。愛する人に触れられるだけで、女性はいっぱい気持ちよくなれるんです。身体が気持ちよくなるだけでなく、触れ合うことで心の満足感を得られる。それがまぐわうということなんですよ」

快感を求めるだけがセックスではない。

それを、リオくんにしっかりと知ってもらわなくてはいけません。

「リオくん……私もおちんちんに触りますね」

「う、うん……ぁ……」

シコシコとおちんちんを扱いていく。

「リオくん……おっぱい、欲しいですよね？　いいですよ。でも、優しくしてください」

「ちゅうっ……ちゅうっ……ちゅうっ……」

「あっ……んっ……気持ちいい、ですよ……私も、もっとリオくんを気持ちよく……」

手コキを続けながら、鈴口から漏れ出るカウパーを亀頭に塗りたくります。

そして、人差し指と中指でカリ首を擦りました。

「お、お姉ちゃん、そこ……気持ち、いい」

「亀頭の中でも、この部分……カリ首は男性が一番気持ちよくなれるところです」

カウパーで濡れて滑りがよくなっているので、気持ちよく刺激してあげられます。

「リオくん……私のことも、気持ちよくしてくれるんですよね？　カリ首の刺激に堪えながら、私のことも気持ちよく出来るように、がんばってみてください」

「ぁ……う、うん。ボク、お姉ちゃんの為に、がんばる、から」

ちゅうっ、ちゅうっ……と、リオくんが乳首を吸う。

「気持ちいいです。リオくん……おっぱいの乳首も優しく触ってください」

ちゅうっ、ちゅうっ、ちゅうっ……と乳首を吸いながら、リオくんが乳首に優しく触れる。

「乳首は抓るだけじゃなくて、押したり、こね回したり、弾いたり……色々なことをすることで、気持ちよくできるんです」

私に言われたことを、リオくんは頑張って実践してくれようとしました。

緩急を付けた快楽に、私の身体は昂ってきました。

「んっ……あっ、んああっ❤　リオくん、上手です。それに……とっても優しい」

「サリアお姉ちゃん、気持ちよくなってくれてるの？」

「はい……とっても気持ちいですよ。リオくんのおっぱいを触る手も、乳首を吸う唇も、全部優しくて……リオくんの愛情をいっぱい感じられます❤」

口に出すことはできませんが、さっきから下着が濡れています。

このままだと間違いなく染みになってしまいそうなくらい。

「リオくんが頑張ってくれた分も……私がいっぱい気持ちよくしてあげますから」

彼を絶頂に導く為に、私はカリ責めをしながら、竿まで長いストロークで手コキを繰り返していきました。

――シコシコシコシコシコシコ――と、おちんちんに刺激を与えていくと、カウパーが噴き出しました。

もうそろそろ、限界が近付いているのがわかります。

「そろそろイってしまいそうなんですね？」

「わ、わかんない……でも、また熱いの、が……駆け上がって、くるぅ」

「いいんですよ。その感覚に身を任せながら、イってください」

「お、お姉ちゃん、も……気持ちよく、なって……ボク、お姉ちゃんにも、イってほしい、から」

優しく、ちゅうっ、ちゅうっ……と、乳首を吸う力が、徐々に強くなっていきました。

「ふぅ……んんっ……あんっ……リオくん、また、ちょっと乱暴に……」

自身の絶頂の昂りに合わせて、私のことをイかせる強い刺激を与えようとしているみたいです。

「だ、ダメぇ？　お姉ちゃんに、感じてほしくて……んっ……ちゅうううううう」

「あっ……んああっ❤　ダメでは、ないですよ。互いに想い合って、愛情を伝えているなら……相手をイかせたいと思うのは当然のことですから」

私がそう言うと、リオくんは昂りを抑えられなくなったみたいに、激しく乳首をしゃぶって……

もう片方のおっぱいの乳首も、指で抓って刺激してきます。

「んおっ❤　はぁ……ああっ……リオ、くん……私も、昂って、きてますぅ❤　はぁ……ああっ、一緒に、イきましょう❤　リオくん、リオくん❤」

「あっ……ぼ、ボクも……もう、で、出ちゃう、お姉ちゃんイっちゃいそう、だよぉ」

ラストスパート――亀頭を中心におちんちんを擦り上げて。

リオくんは私の乳首を甘噛みしながら、じゅうううううっと、母乳が出ないおっぱいから、お乳を吸い上げるようにしゃぶってきました。

お腹の奥が熱くなって、おまんこの膣内からジュクジュクと愛液が溢れ出しました。

「イく❤　リオくん、私も、イくぅ❤　イき、ますぅ❤」

「お姉ちゃん、ボクも……い、くぅ」

その声と同時に、ビュルルルルルルルぅぅぅう。

「んあああああっ、んっ……んっぐぅぅぅぅぅ❤」

彼の熱い白濁液が、私の顔やおっぱいを真っ白に染めて。

咽返るような雄の匂いと、乳首責めで昂った私の身体も、軽イキしていました。

「あぁ……朝、あれだけ出したのに……もう、こんなに……」

「ぁ……ぅぅ……」

疲れ切ったように息を吐くリオくんの頭を、私は優しく撫でました。

「リオくん、ちゃんと射精できましたね。……それに、私を気持ちよくしてくれてありがとうございます」

「ぅ……お姉ちゃんも、ちゃんとイけた？」

「リオくん、女性にそういうことを聞いてはいけません」

「そう、なの？」

「そうです。女性は性的なことに関して、男性よりも抵抗感がある人が多いですから。……でも、リオくんのお陰で気持ちよくなれましたよ」

言いながら、私は再びリオくんの頭を撫でた。

「リオくん、お風呂……入りませんか？　いっぱい汚れちゃいましたよね？」

「お姉ちゃんも、一緒？」

「ふふっ……また甘えん坊ですか？」

「ダメ……？」

甘えるような上目遣いを向けられて、胸がくすぐったくなる。

可愛いらしいリオくんを見ていたら、ダメなんて言えなくなってしまいます。

「そうですね。私もいっぱい汚れてしまいましたから……今日は一緒に入りましょうか」

ついでにベッドのシーツも変えてしまいましょう。

それで明日、ちゃんと洗濯しないとですね。

「それでは、お湯を張ってきますね」

「うん！」

私はお湯を沸かしに浴室へと向かったのでした。

※

浴槽に水を溜めて火の魔術でお湯を沸かす。

時間にして数分も経たずに湯舟が完成した。

（……これでよし）

私はリオくんを呼びに部屋へと戻る。

「リオくん、お湯が沸きましたよ。浴室へ行きましょう」

「は～い」

脱衣所で服を脱ぎ、二人で浴室へ入った。

浴槽に溜めたお湯を手桶で掬う。

念の為、手でお湯に触れて温度を確認した。

これならリオくんが入っても、熱すぎないくらいだろう。

「リオくん……そこに座ってください。お湯を掛けますよ」

「お、お姉ちゃん……そのくらい、もう自分でできるよ」

彼が小さな時から、何度も繰り返してきたことでしたが、最近では一緒にお風呂へ入ることも少なくなっていました。

「遠慮はせずに。一緒にお風呂に入るのは久しぶりですから、たまにはリオくんのお背中を流させてください」

「ぅ〜……じゃあお願いします」

「じゃあお湯を掛けますよ」

ゆっくりとお湯をリオくんの背中に流す。

それを何度か繰り返してから、私は石鹸を泡立てました。

「それでは綺麗にしていきますね」

「あ、洗うのもお姉ちゃんがするの？」

「もちろんです。一人では洗いにくいところも含めて、私がしっかりと綺麗にしてあげますから」

まずは、背中を洗っていく。

肌を傷付けないように、手で優しく、ごしごし、ごしごしと繰り返した。

石鹸のいい香りが浴室に広がっていく。

「リオくん……バンザイしてもらっていいですか？」

「な、なんで？」

「腋の下も綺麗にしないといけませんから」

「そ、そんなところ洗われるの、恥ずかしいよ」

「恥ずかしいことなんてありませんよ。昔は全身、洗ってあげていたじゃないですか？　それにい

っぱい汗をかいてしまいそうな場所は、しっかりと綺麗にしておかないとですよ？」

「ぅ〜〜〜……っ……」

照れながらもリオくんはバンザイしてくれました。

「よくできましたね。偉いですよ。それじゃ失礼して……」

彼の手の先から、腋にかけて洗っていき、泡でいっぱいにしていきました。

「お姉ちゃん、なんだか、くすぐったいよ」

「あら……ごめんなさい。自分で洗うのと、人に洗ってもらうのとでは、少し感覚が違うかもしれませんね。でも、もう少しですから我慢してください。ごしごし、ごしごし❤」

背中のほうはこれで、かなり綺麗になってきました。

「ぁ……耳の裏も忘れてはいけませんね」

「お耳？」

「はい……ここもしっかりと洗わないとですからね」

耳の裏を軽く洗っていきます。

「リオくんのお耳は柔らかいですね」

「そう、かな？」

「ええ、耳たぶなんて特に。それに肌もきめ細かくて女の子みたい」

背中を洗っている時から感じていましたが、リオくんの身体はとてもすべすべでした。

ずっと触っていたくなってしまうような天使の肌です。

「ぼ、ボク、女の子じゃないから」

「わかっています。リオくんはちゃんと男の子ですよね」
「むぅ……本当に、そう思ってる？」
「はい。でも、もっと立派な男性になる為に、いっぱいお勉強しましょうね」
「……お、お勉強は……あまり好きじゃないけど……お姉ちゃんは、ボクが立派な男になったら、嬉しい？」
「それはもちろんですが、一番嬉しいのは、リオくんが健やかに……元気に成長してくれることですよ」
「元気に？　それだけでもいいの？」
「はい。それが一番嬉しいことです。あとは……そうですね。立派な男性とは言いましたが、リオくんがなりたい自分になってくれたなら、私は嬉しいです」
「……なりたい自分……」
私の言った言葉をリオくんは口に出して反芻しました。
そして、背中を向けていたリオくんが振り返り、真剣な表情で私の顔を見つめてきました。
「なら、ボクは……お姉ちゃんを守れるくらい、強い男になりたい――ううん、なってみせるから」
「……リオくん」
心の底から生じたリオくんの純粋な言葉。
その想いを受けて、私の胸は愛おしさでいっぱいになっていました。
エルフという種族は感情の機微が人間よりも薄い傾向にあります。
理由はわかりませんが、長命であり感情の起伏が徐々に失われていることが関係しているのかも

しれません。

でも、リオくんを想う度に、私の胸は感じたことのないような強い感情に揺れるのです。

これが愛情なのだと感じられるほどに。

（……本当に、立派に成長していますね）

いつか、リオくんに大切な人が出来た時、同じ想いで守ってあげてほしい。

そして私は、彼がここを離れる日が来たとしても、今日の言葉を忘れないでおこう。

「それが目標じゃ、ダメかな？」

何も言わない私を見て、リオくんは不安そうに尋ねてきました。

「そんなことはありません。とても嬉しかったですよ」

「ほ、ほんと？」

「はい。立派な強い男性になってください。その日を私は楽しみにしていますから」

「うん！　約束する！　絶対、強くなるからね！」

満面の笑みを浮かべるリオくんを見て、私の心はさらに期待に溢れてしまうのでした。

「ぁ……」

感動の余韻に浸る中で、気付いてしまいました。

「リオくん、また……」

「え……あっ……」

反り立つように勃起したモノを両手で隠して、リオくんは背を向けました。

今日はもう二回もしているのに、またあんなにも膨らんでしまったようです。

「……恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ。それは男性なら自然なことなのですから」

「ぅ……ごめんなさい、お姉ちゃん……ボク、お姉ちゃんを守るなんて言って……こんな……」

「気にしなくていいのです。強い気持ちを持ったからこそ、昂ってしまったのですよね。私は気にしていませんよ？」

こんなことで、リオくんを傷付けたくはありません。

それに英雄は色を好むとも言います。

女性を守る為に、己を昂らせることが出来るというなら、リオくんには強くなる為の資質があるのだと、私は思います。

「まだ……前は洗っていませんでしたね。……リオくん、こちらを向いてください」

「で、でも……」

「大丈夫です。リオくんが昂ってしまったのは私のせいですから……これからは、私が射精管理をしてあげますからね」

リオくんの肩に手を掛けて、私は彼を優しく振り向かせた。

「女性の身体は男性を気持ちよくさせる為の機能が沢山備わっているんです。たとえば……このおっぱいで……リオくんのおちんちんを包んで……こうして揺らしてあげると――」

胸の間でリオくんの剛直を包み、上下に揺さぶりました。

「んっ……❤　んんっ……❤　ふぅ……んんっ……❤　これはパイズリ、という行為です」

「ぱ、ぱいず、り……あぁ……」

「はい。女性の乳房を使って、男性にこうやって奉仕をすることを言うのですよ」

「あっ……あああぁ……すごい、お姉ちゃん、これぇ……おっぱい柔らかくて、温かくて……」

「ふっ、あっ❤　気持ちいいの、ですね。だらしない、蕩けてしまいそうな顔をしていますよ」

おっぱいを下に動かすと、リオくんのおちんちんから赤い先っぽが顔を出しました。

「あっ……ふっ……んんっ……リオくん、いいですか？　女性は誰にでも……んっ……こうして奉仕をするものでは……んんっ……ないのです。強い愛情を持った相手にだけ……こうして尽くすものなのですよ」

「あい、じょう……？」

甘い嬌声と、淫靡な音、熱い吐息。それらが浴室で反響する中で、私は説明を続けました。

これは快感を貪るセックスではなく、性教育の一環なのですから。

「はい。相手を好きだと、誰よりも……んあっ❤　愛おしいと想う感情のこと、です。ふぅ……んんっ❤　特別な人になら、なんでもしてあげたいと、あっ❤　尽くしたいと、守ってあげたいと、人が生きる上で知っていなければならない、んあっ❤　そんな、何よりも強い気持ちが愛情、です」

まだリオくんには難しいかもしれない。

でも、知っておいてもらわなくてはなりません。

こういった身体を重ねる行為が特別であるということを。

リオくんに限って、そんな酷いをことをするわけがないとは思いますが……もし、これが当たり前のことであると考えてしまったら——他の女性にも淫らなことをしてしまうかもしれません。

そんな間違いだけは決して、リオくんに犯させてはならないのです。

「じゃ、じゃあ……サリアお姉ちゃんは……ぼ、ボクのこと……好きでいてくれてるの？」

「んっ……ああっ❤　当たり前、じゃ、ないですかぁ❤　リオくんよりも、大事なものなんて……んんっ❤　私にはありません、からぁ❤」

口だけではなく行動で愛情を伝える為に、さらに激しくパイズリをしていく。

「お姉ちゃん……ぼ、ボクも……お姉ちゃんが――あっ……す、すごいっ……❤　お姉ちゃん、これ……すごいよぉ」

リオくんの亀頭がさらに膨らみ、鈴口からは溢れた大量の我慢汁が胸の谷間に流れた。

それは、さらに強烈な快感を与える潤滑油になっていく。

「んっ❤　んっ❤　ンンッ❤　もっと、もっと感じていいんですよ、リオくん❤　いっぱい気持ちよくなってください❤　ンッ❤　ンッ❤」

射精を必死に堪えているのか、ぎゅっ！　と、リオくんは強く目を閉じた。

「リオくん、いつ出してもいいんですよ？　ほぉら……ビュッビュッってしてください❤」

「で、でもぉ……もっとこれ、してほしいから……お姉ちゃんに気持ちよく、してほしいから……」

「だから射精しないように我慢してるんですか？」

辛そうに熱い息を漏らしながら、リオくんが頷いた。

その仕草が愛おしくて、可愛いくて。

だからこそ我慢できないほど感じさせてあげたくなってしまう。

私は勃起したおちんちんを強く挟み――胸を激しく上下に揺らした。

亀頭が胸の中から顔を出す度に、おちんちんの雄臭い匂いがむわっと広がっていく。

「リオくんがしてほしいなら、いつだって、何度だってパイズリしてあげますから❤」

「ほ、ほん……と？」

「はい❤　だから……出しちゃえ❤　出しちゃえ❤」

「ぁ……ぅ……も、もう……イっちゃう。このままじゃ、お姉ちゃんの顔に掛かっちゃうよぉ」

「そんなこと気にしないで……いっぱい掛けていいんですよ❤　リオくんの全部を受け入れますから❤　ほぉら❤　ほぉら❤　上手に射精、いっぱい――ビュッビュッしなさい❤」

「ぁあああああっ」

堪えきれない叫びと共に――ビュルルルルルルウウウウウウウゥゥッ！

おちんちんからミルクみたいに濃い精子が噴き上げた。

「あっ、んんっ❤　すっごい量、ですよぉ❤　こんなにいっぱい出して……んんっ❤」

濃厚なリオくんのちんぽ汁が、私の顔と胸を真っ白に染め上げ、雄臭い香りが浴室を満たした。

この香り嗅いでいるだけで、雌として発情してしまいそうになる。

でも彼の保護者として、その一線だけは守らないといけない。

昂る身体を抑える為に、私は何度か深呼吸を繰り返した。

「リオくん……とても上手に射精、できましたね❤　偉いですよ❤」

射精の快感が凄すぎたのか、リオくんは恍惚とした表情でぐったりしている。

驚くほどに雄だった剛直も、ようやく落ち着きを取り戻したようだ。

（……お風呂に入っているのに、逆に汚れてしまいました）

身体は洗い直しになりましたが、リオくんにしっかりと性教育もできたので、まずはよしとしておこうと思います。

そして――互いにお湯と石鹸で身を清め……。

「はぁ……気持ちいいですね」

やっと人心地ついた私たちは温かな湯舟に浸かりました。

小さな浴槽なので、後ろからリオくんを包み込むように抱きしめているのですが、なぜか彼は身を硬くしています。

「どうしました？　緊張しているのですか？」

「……え、えっと……」

私が尋ねると、リオくんは口ごもってしまった。

エッチな行為のあとだから、照れているのかもしれません。

「リオくん……気にしなくていいんですよ。これからも、姉ちゃんに甘えたい時があれば、いつでも言っていいですからね」

優しくリオくんを抱きしめる。

「……ありがとう、お姉ちゃん」

くるっと身体を回転させて、リオくんがこちらに振り向く。

何か言いたそうにもじもじとしながらも……リオくんが私の胸に顔を埋めてきた。

「あら？　また甘えん坊ですか？」

言われてリオくんは顔を上げて、窺うようにこちらを見る。

そして意を決したように、

「あのね……ボクもお姉ちゃんのこと、大好きだよ」

真っ直ぐな目で私に告げた。

「だからね。……もしお姉ちゃんがしてほしいことがあったら……ボクもなんでもしてあげるね。お姉ちゃんになら、なんでもしてあげたいって、ボクも思ってるから」

「あら……ふふっ……ありがとう、リオくん」

先程、私が伝えたことを、覚えていてくれたのでしょう。

相手の気持ちを汲み取って、こうして応えてくれる。

身体だけではなくて、リオくんは心も立派に成長していると感じられました。

私はその想いが嬉しくて、沢山の愛情を伝えたくて、リオくんを包み込むように抱き締めて――

身体がしっかり暖まるまで、私たちはゆっくりと湯舟に浸かるのでした。

第二章　聖女様への依頼

私たちが住むこのポロン村の周辺は、魔族との傷跡が薄い穏やかな村です。

魔族の住処である南方の大陸ダクイアから大きく離れている為だと思うのですが……安らかな村であっても、魔物が一切出ないというわけではありませんでした。

「リオくん……少し出掛けてきますね」

「どうしたの？」

「この辺りで魔物を見たという報告がありました。なので周辺の調査に行こうと思います」

本来であればギルドの冒険者であったり、王都の騎士団が魔物の危険に対応するのですが、ここは田舎の小村で人手が不足しています。

若い男手も少なく、戦える人材はほとんどいない為、村人たちから魔物の討伐を依頼される時があるのです。

「お姉ちゃん、一人で行くの？」

不安そうな眼差しで、リオくんが私を見つめました。

「心配してくれているのですね。でも、大丈夫ですよ。この辺りには強い魔物がいるわけではありませんから」

優しい少年の頭を撫でながら、私は感謝の想いを伝えた。

それでも、リオくんは不安が拭えないようで、私を引き留めたいのか、服の裾を掴みました。

（……困りましたね……どうしましょう）

戸惑う私に気付いたのか、リオくんはぐっと閉じていた口を開きました。

「ぼ、ボクも……行っちゃダメ？」

「それは……そのお願いは流石に聞けません。強い魔物はいないと言いましたが……それでも危険はあります」

「……ぼ、ボクも少しは戦えるよ？　お姉ちゃんに魔術だって教わってるし……前にお兄ちゃんが来た時に剣だって教わって、少しは使えるようになってるから」

お兄ちゃん――というのは、昔の冒険者仲間のことだ。

以前、一度だけこの村に来て、私に会いに教会へと立ち寄ったのだ。

その時、剣の指南をしてくれて、筋がいいと褒めてくれていました。

確かにリオくんは類稀な才能を持っており、同世代の子とは比較できないほどの実力者だ。

並の大人では、この子には勝てない。

（……でも、魔物との戦いは実戦……万一があれば怪我では済まないかもしれない）

そんな危険な場所に、リオくんを連れて行きたくはありません。

「リオくんの気持ちはとても嬉しいですが……いい子にしてお留守番していてください。直ぐに戻ってきますから」

「……」

いつもなら素直にお返事してくれるのに、下を向いて黙ったまま何も答えてくれません。

そんなリオくんを、私は優しく抱き締めました。

「約束します。私はリオくんを一人にはしませんよ」

「本当……？」

「はい。私がリオくんに嘘を吐いたことがありますか？」

「……ないけど……ボク、お姉ちゃんが心配で……」

話せばリオくんはわかってくれる。

そう信じているからこそ、突き放すようなことはせず、誠意を持って説明していきます。

「不安にさせてしまってごめんなさい。……でも、もし魔物の侵入を許せば、この村は大きな被害が出てしまうかもしれないんです。だから、今直ぐに誰かが動かなくてはいけません」

私の話を真剣に聞きながら、リオくんは自分の不安を飲み込んで頷いてくれました。

「ありがとう。行ってきますね、リオくん」

もう一度リオくんを抱き締めてから、私は魔物の調査へと出発するのでした。

※

村の周囲を警戒しながら、私は調査現場を探索していた。

「この辺りに何かいるのは間違いなさそうですね」

直ぐに異変を感じたのは、森の中に動物の死骸が見えたからだ。

「……大型の魔物ではなさそうですね。ゴブリン……それともワーウルフでしょうか？」

魔物は『邪素』から生まれる。

邪素というのは、古の時代――神と邪神が衝突したことによって生まれた元素の一つと言われて

いる。
邪素も含め、元素は世界中に流れている。
邪神の力が強く残るダクリアは最も邪素に溢れた大陸と言われていた。
反対にダクリアから離れれば離れるほど、邪素は少ない為、魔物の数も減るというのが学者たちの考察だ。
「……女神ルティアよ――力をお貸しください」
邪悪を探知する魔術を使用した。
すると、直ぐにモンスターの気配を感じる。
探知に引っ掛かったモンスターの数は三体。
しかも密集しているようだ。
幸いにも村からは離れた場所にいる。
これなら今のうちに対処してしまえば大きな被害が出ることはないだろう。
（……定期的に警戒はしていたのに、こんなにモンスターがいるなんて）
仮に小型のモンスターだとしても知能がある敵であれば厄介だ。
（……今日動いたのは正解だったかもしれませんね）
森の中を進み私はモンスターの住処へと近付いて行く。
奥に進めば進むほど、森の木々が陽を遮り、道が暗くなっていく。
（……陽が沈む前に終わらせたいのですが……）
さらに進んだ先で山を掘ったような洞窟が見つかった。

（……こんな場所、今までなかったはず……）

葉を踏みしめる音が響かぬように、慎重に足を進めた。

この中にモンスターがいるのは間違いない。

入口の前で洞窟を覗き込むが、中は闇を纏ったように何も見えない。

（……何か罠が仕掛けられている可能性もあるでしょうか？）

この洞窟を自身の巣にしているのなら、それなりに知能の高い魔物だと考えられる。

身を隠して様子を窺う。

モンスターが出てくる気配はない。

だが変化はあった。

何か、音が聞こえる。

（……なに？）

集中して、私は耳を済ませた。

「あ……ぅぅ……ぁあっ……」

人の声だ。

それも苦しそうな、呻くような声。

（……まさかモンスターが人を攫ってここに!?）

だとすれば、直ぐに助けに向かわなくては――今ならまだ救えるかもしれない。

「――光よ」

小さな光の球体が闇に包まれた洞窟内に光をもたらす。

危険は承知で私はモンスターの巣へ足を踏み入れた。

罠を探りながらも、出来る限り足早に先に進んでいく。

すると、先程の声の主だろう。

今度は、その声がはっきりと聞こえてきた。

「んおっ……おごおおおっ……し、死ぬぅ……これぇ、死んじゃうぅ……んおおおっ！」

それは、叫びにも似た雌の嬌声だった。

この先で何が行われているのかを、私は嫌でも想像してしまう。

視界の先に松明のゆらめきが見えて、私はこちらの位置を知られる前に急ぎ明かりを消す。

「おっ、おおおっ❤　おっごぉぉおおっ❤　イグぅ❤　ま、またぁ……イっじゃう❤　魔物ちんぽの快感で、狂い死にさせられるぅぅぅう❤　おっ、んっごおおおっ❤」

「っ……」

思わず私は息を飲んだ。

人としての尊厳を犯されるほどの蹂躙を受け、一匹の雌が獣のように叫んでいた。

本来であれば可憐な女性だったのだろう。

その面影だけは感じられるが、今は涙や鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしていた。

だが、その顔は快楽に酔いしれているようにも見える。

（……探知の通り、敵は三体。オークが一、ゴブリンが二……）

周辺は獣臭で満たされていた。

その三体に、どれほどの時間犯されていたのだろうか。

お腹は妊娠したかのように膨れ上がり、豊満な胸には歯形がしっかり付いている。

遠目からでも、犯されていない場所はないのではないかと思うほどの異常な光景に、私は吐き気を覚えた。

（……相手はこちらに気付いていない）

あの女性を犯すことに夢中なのだろう。

（……なら――）

私は杖を両手で持ち、腕を前に突き出す。

杖は魔術師にとっての補助具のような物で、物によってはその効果を何倍にも増幅させてくれたり、特殊な効果が封じられている。

私の持つこの杖は女神の杖と言われ、ルティア教団の至宝の一つだ。

魔王討伐の旅へ出る際に、私はこの杖を最高司祭様から受け賜っていた。

（――一撃で、仕留めてみせる）

そして、私は悪しき魔物を裁く意志を込めて――魔術を発動した。

杖の先端に光が集まり、そこから閃光が迸る。

優しく包み込まれるような、温かい光。

それはまるで希望を思わせるような輝きを放っていた。

その聖なる光を前にして、魔物たちは私の存在に気付くが、その時には既に遅く――

「消えなさい」

邪悪を清浄する聖なる光の束が魔物たちを一斉に覆い、叫び声すら上げる間もなく魔を焼き払っ

ていく――そして跡形も残さずに浄化された。

そこに残ったのは、魔物に強姦されていた女性のみだった。

「ぁ……ぁ……ぅ……」

凌辱の限りを尽くされた女性は、力なく項垂れる。

もう返事を返す気力もないのだろう。

近くで見ると、女性の身体には壮絶な凌辱の跡が見えた。

全身の至る場所に傷跡が刻まれ、地面には血が滴っている。

だが、今ならまだ命を救うことはできそうだ。

「……直ぐに治療しますからね。女神ルティアよ――どうかこの者を癒す聖なる加護を」

女神ルティアの力を借り、癒しの奇跡を行使する。

倒れ伏す女性の身体が淡く優しい光に包まれていった。

傷は徐々に癒されていく。

「……ぁ……っ……」

苦悶に歪んでいた女性の顔は少しだけ安らかさを取り戻した。

「身体の傷はなんとか癒すことができましたね。……問題は……」

心の傷、だろう。

強姦は心を殺す。

しかも魔物が相手となれば、その苦しみは想像を絶するはずだ。

以前、救った少女と再開した時、話してくれたことがある。

犯されたトラウマ――魔物に犯されながらも、快楽を覚えてしまった負い目。
心に痛みを抱えながらも、身体が疼いてしまうのだと。
人が魔物に犯されるというのは、想像以上の最悪なのだ。
これから彼女が生きていく上で、魔物に犯され続けた記憶は消えることはないだろう。
だが一つだけ、処置をする手段がある。
それは――被害者の記憶を消してしまうことだ。
女神ルティアの力をお借りすれば、それを可能にする奇跡を行使できる。
しかしこの奇跡には問題も多い。
消去したい記憶だけを選択することができないのだ。
人格を崩壊させるようなことにはならないが、直近の記憶は消えてしまうかもしれない。
（……本当なら、この女性の意志を聞き……選ばせるべきのこと……）
だが次に意識を取り戻した時、彼女の精神が耐えられるか？
その保障はない。
最悪は精神崩壊を起こして、廃人も同然となってしまうかもしれない。
完全に壊れた人の心は、女神の奇跡をもってしても治すことはできない。
人の心を癒す奇跡は、これほど魔術が発展した現代に置いても存在はしないのだから。
「……ごめんなさい。本当にごめんなさい」
彼女の意志を無視することになる。
それでも、私はこの人を助けたい。

魔族との戦争で渡井社、何人、何十人、何百人――目の前で魔族に蹂躙された罪のない命を見てきた。最後の瞬間まで生きたいと願う人々を救うことができなかった。

救える命が目の前にあるのなら、無駄にはしてほしくない。

これは私の独善的な、どうしようもないほど身勝手な判断。

だからこそ、彼女に対する責任は負う。

その覚悟を持って、私は彼女の記憶を消す決断をした。

手を合わせ、指を重ね、偉大なる母なる神に祈りを捧げる。

「――女神ルティアよ――」

光の粒子が洞窟の中に溢れていく。

その粒子はさらに煌めき、輝いていく。

全てを怒りを、憎しみを、悲しみを、あらゆる負の感情を癒し浄化する輝きが、女性の中に入り込んでいった。

「……女神ルティアよ、感謝いたします」。

優しい光が消えて、静寂を取り戻した洞窟内で、私の言葉が反響した。

全身を震わせ、脅えていた女性が、安堵の中で眠りにつく。

微かな寝息と共に、穏やかな微笑を見せてくれた。

この様子なら窮地は脱しただろう。

（……後悔はある。それでも私は為すべきことを為そう）

まずは彼女を連れて一度村へ戻る――が、その前に、

「……何か彼女の身元を証明できるようなものは？」

光の魔術で周囲を照らす。

周囲を見回すと、いくつか動物の死骸が転がっていた。

魔物たちが食べた餌だろう。

不幸中の幸いと言うべきか……死者はいないようだ。

（……魔物が現れてからそれほど時間は立っていないようですね）

さらによく探索をすると、鉄の剣が落ちているのが見えた。

（……これは彼女の武器？　そうなると、もしかして……）

彼女は冒険者かもしれない。

なら、ライセンスがどこかにあるのではないだろうか？

ギルドに所属する冒険者なら、ライセンスは必ず持っているはずだ。

さらに注意深く、辺りを散策していくと……。

「……これは？」

力任せに切り裂かれたような鞄が置かれていた。

「……何か……手掛かりがあれば……」

鞄の中を探っていく。

割れたポーションの瓶が入っている。

これが彼女の私物なら、やはり冒険者の可能性が高い。

だが、やはりライセンスは見つからなかった。

「……これ以上は、何も見つからなさそうですね」

ですが、冒険者ギルドに行けば何か手掛かりはあるでしょう。

「帰りましょう」

一通りの探索を終えて、私は眠る女性を抱えて洞窟を出た。

※

村へ戻り村長に魔物の討伐が済んだことを伝える。

村人たちはその報告を聞き、安堵の表情と私への感謝を伝えてくれた。

これでまた、安心して日常へと戻ることができるだろう。

合わせて、村長にこの女性を教会で一時的に預かることを伝え許可を貰った。

そして、

「ただいま帰りました」

「お姉ちゃん、お帰り！」

教会へ入ると直ぐに、リオくんが私を迎えてくれた。

満面の笑みを見せて、バタバタと嬉しそうに私に駆け寄ってくる。

もしかして、ずっと待っていたのだろうか？

「ぁ……お姉ちゃん、その人は？」

「……少しの間だけ、一緒に住むことになります。相談もせずに決めてしまって申し訳なかったの

ですが……」

「ううん、大丈夫だよ。ボクも、できることがあったら、何かお手伝いするね！」

何か事情があることを、リオくんは直ぐに察してくれました。

「ありがとう。リオくんが優しい子で、お姉ちゃんは嬉しいです。ところで……ずっと聖堂内で待っていたのですか？」

疑問に思って私が尋ねると、リオくんははっとしながら私から目を逸らした。

「ぁ……ご、ごめんなさい。お部屋でお勉強、しなくちゃって思ってたんだけど……」

「仕方ありませんね。リオくんは……でも、私を心配してくれてありがとうございます」

申し訳なさそうな顔をする彼に、私は微笑を浮かべて感謝を伝えました。

私が怒っていないとわかって、リオくんは照れくさそうな、むずがゆそうな笑みを浮かべました。

そんな可愛い顔をされたら、いっぱい頭を撫でてあげたくなってしまいますが……今はそれは我慢して、

「さて……私は彼女をベッドへ運びますね。リオくんはお湯とタオルを用意してくれますか？」

「わかった！　直ぐに持ってくるね！」

踵を返して意気揚々とお手伝いをしてくれるリオくん。

そんな彼の小さな背中を見ながら、私は傷付き眠る女性を空き部屋のベッドへ運んだ。

ベッドに女性を寝かせる。

かなり疲弊しているのか、まだ意識を取り戻しそうにない。

どれほどの間、魔物に弄ばれていたのかを考えれば、その苦しみは想像を絶する。

だから、身体が休憩を欲しているのかもしれません。

眠りは身体だけではなく、精神を整える万病の薬であるというのは、いつの時代も変わらないのですから。

「お姉ちゃん！　……ぁ……も、持ってきたよ」

女性が眠っているのを見て、リオくんは慌てて小声になりました。

そして、ベッドの傍の机に桶に入れたお湯とタオルを置いてくれた。

「ありがとう、リオくん。……あとは私がやりますから、リオくんはお部屋へ戻っていてください」

「ぼ、ボクも何かお手伝いするよ？」

「今は大丈夫ですよ。それよりも、今日遅れてしまった分のお勉強をしてください」

「でも……」

「それが、終わったら食事にしましょう」

「……わかった。お姉ちゃんも無理しないでね」

「はい」

そう約束をすると、リオくんは私を心配しながらも、ちゃんと言うことを聞いてくれました。

部屋で二人きりになった後……私はお湯にタオルを入れ、よく絞ってから女性の身体を拭いていきました。

（……少しでも綺麗しておいてあげないと）

魔物に犯された記憶は消えているからこそ、身を清めておく必要があります。

浄化の魔法を掛けた為、魔物の子種で孕む心配もありません。

ゴブリンという魔物の恐ろしいところは、人を孕み袋にして種を増やすという点。

だからこそ、あの魔物たちは人間の女を攫うのです。

繁殖力も高く人にとっての天敵と言ってもいい魔物でしょう。

今回は無事に救えたからよかったですが……最悪、孕み袋のまま生涯を終えてしまう女性もいるのですから。

（……あとは無事、目を覚ましてくれれば……）

何度か身体を拭き、匂いも多少は取れたと思います。

後は香水で誤魔化して……。

（……彼女が目を覚ました後は、食事と……落ち着いた頃に、湯あみをしてもらいましょう）

一通り対応を終えて、私は眠る彼女の元を離れた。

続いて食事の準備を始める。

（……リオくんにも心配を掛けてしまいましたから、今日は少し奮発して美味しい料理を作りましょう。……あの方が起きた時の為に、消化にいい物も用意しておかないと）

買ってある食材から献立を考えて、私は調理を始めた。

※

調理を一通り終えて、私はリオくんの部屋へ向かった。

彼の部屋へ入ると、サボることなく、彼は机に向かっている。

「リオくん……お勉強はどうですか？」
「がんばって進めてるよ」
ノートを確認すると、全ての問題が解かれていた。
「全部、正解です。流石ですねリオくん」
いい子、いい子と、何度も彼の頭を撫でた。
「今日はサボっちゃったから……少しでも取り戻さないと思って……」
「……沢山、心配を掛けてしまいましたね。……本当にごめんなさい」
言って私はリオくんを抱き締めた。
強く抱き締めると、私の胸の中に彼の顔が埋まる。
「わっ……く、苦しいよ、お姉ちゃん」
「ごめんなさい。でも、リオくんが愛おしくて……ぎゅってしたくなっちゃいました」
こうして身を寄せ合うことで、しっかりとリオくんの温もりを感じる。
戦いの後だからだろうか？
いつもよりも、それは私に安心感を与えてくれた。
（……少し緊張していたのでしょうか）
どんなに弱いとされる魔物との戦いでも、命が掛かっていることに変わりはない。
人と魔物の戦いは命の取り合いなのだから。
（……油断は死を招く。私は絶対に死ぬわけにはいかない）
少なくとも、リオくんが立派に独り立ちするまで。

暫く彼を抱き締めてから、私から身を離した。

「ありがとう、リオくん」

「ううん。……お姉ちゃん、平気？」

リオくんも私の様子がおかしいことを察してくれたようです。

「お姉ちゃん……よし、よし……がんばったね」

いつもは甘えん坊なリオくんが、今日は私を甘やかすみたいに、頭を撫でてくれました。

「まぁ……リオくんたら……でも、嬉しいです」

これからも、私に出来ることを頑張ろう。

リオくんの優しさに触れて、改めてそんなことを思ったのでした。

※

食事を終えて、私は再び救助した女性の部屋へ向かいました。

ベッドの傍に椅子を置き、彼女の様子を窺います。

（……急に目覚めて驚かないように、部屋にメモを残しておいたほうがいいかもですね）

そんなことを考えた時でした。

「っぅ……ん……」

「ぁ……き、気付きましたか？」

眠っていた女性の意識が覚めて、ゆっくりと目が開いたのです。

「っ……こ、ここって……あ、あんたは……誰だ？　あれ？　あたし……は……？」

記憶がはっきりしないのは、ルティアの奇跡の影響だろう。

そして、目覚めたばかりでま脳内の記憶が安定しないようだが、消えた記憶との辻褄を脳は徐々に合わせていくことになるはずだ。

「一ずつ説明させていただきます。ここ王都の遥か東にあるポロンという小村です」

「ポロン……？　聞いたことが、あるような……？」

「あなたはこの村の付近で倒れていたのですよ」

「あたし……が？　っ……ダメ、思い出せない」

「無理に思い出そうとしなくていいんです。少しずつで構いませんから」

「……あんたは？」

金髪の女性の瞳がしっかりと私を捉える。

まだ混乱の中にいるはずなのに、冒険者をしていただけあって、彼女の目は力強い。

「私はサリアといいます。ルティア教団の司祭を務めています」

「ルティアの司祭……サリア……っ!?　癒しの聖女サリアか!?」

私の名を聞き、驚愕したようにガタッとベッドを揺らして、女性は上半身を起き上がらせた。

「っ……つぅ……」

「急に起き上がっては……今は安静にしていてください」

痛みが走ったのか、女性は頭を抱えた。

私は彼女の身体を支えて、ゆっくりとベッドに寝かせる。

「す、すまない……まさか魔王討伐の英雄と会えるなんて思っていなかったから……」

どうやら、私のことは記憶しているらしい。

やはりルティアの奇跡の影響があるのは、短期記憶のみのようだ。

これなら、人格にまでは影響はないだろう。

「英雄なんて、そんな……あれは私たちだけの力で為したことではありませんから」

「そ、それでも……あの時代を知る人なら、みんな、あなたたちに感謝してる。あたしも同じだ……新米冒険者だった頃から、伝説のパーティーは憧れだった」

語りながら、彼女は少女のように目を輝かせた。

どこか面映ゆい気持ちを感じる。

「魔王討伐は、あの時代を生きた人々の想いが、力があったからこそ為せた奇跡です。勿論、それはあなたも含めて……だから、我々だけが称えられることではないのです」

戦いの中で多くの犠牲者が生まれた。

道を切り開いてくださった方々がいた。

だからこそ、私たちは奇跡を為せたのだ。

「……サリア様ってほんとに、聖女様みたいな人ですね……」

「そうでしょうか？」

「はい。……なんであたしがこの村で倒れてたのかはわかりませんけど……でも、サリア様に出会えたなら、よかったって思えちゃいました」

そう言って、彼女は私に少女のような笑顔を向けた。

そんな純粋な笑みを、私は向けられる資格はないというのに。

「……名前は、思い出せそうですか？」

「あっ……名乗るのが遅れました。あたしは冒険者のウィスです。冒険者ライセンスはC級で……最近だと、そこそこ名が知れてきてるんですよ。……って、サリア様ほどの方に言うことじゃないですけど……」

冒険者のランクは一番下がF級

そこから、E、D、C、B、A、Sというランク分けとなっている。

C級なら十分な活躍を期待される冒険者に与えられる等級だ。

「十分、誇りを持つべきことだと思います。ウィスさんの活躍が認められてきた証拠ですから」

「ありがとうございます。聖女サリアにそう言われると、なんか照れますね」

ウィスさんは照れくさそうに鼻をかく。

だが、これまで冒険者を続けてきた自信もあるのか、浮かべる笑みは誇らしそうだった。

しかしここまで話した感じだと、記憶はかなり安定している。

これなら直ぐに元の生活に戻れそうだ。

「ウィスさん、私のことはサリアと呼び捨てで構いませんよ」

「えっ⁉　魔王を倒した英雄に対して……それは……せ、せめて……サリアさんじゃダメですかね？」

「その方が呼びやすければそれで」

「わかりました。サリアさん……えっと……ちなみにあたし、どれくらい寝てましたか？」

魔物に捕らえられていた期間を含めて推測するなら、数日程度だろうか？

恐らく、彼女はその間ほとんどの休憩も与えられぬままだったはずだ。

魔術で治療しているとはいえ、それを考えれウィスさんの回復力は驚くべきことだろう。

「……ここに運ばれてから、まだ数時間程度だと思います」

「そう……ですか。あたし、なんで一人で倒れていたんだろう。ご迷惑掛けちゃってすみません」

「いえ……暫くの間はここでゆっくりなさってください」

「でも……」

「ここはルティア教団の教会なんです。空き部屋だった場所なので、本当に気兼ねせずに」

「……わかりました。本当にありがとうございます」

申し訳なさそうな顔をするウィスさんでしたが、私の説得に応じてくださいました。

彼女がここで過ごす間に、冒険者ギルドにウィスさんの身元確認対応もお願いしておきましょう。

もし冒険者として復帰したいと言うなら、それなりの支援も必要になるはず。

「……食事は食べられそうですか？」

「ぁ……は、はい。起きたばかりなんですけど、凄くお腹は空いてるみたいです」

「わかりました。とりあえずスープと……あと、パンも用意しますね。もう少し食べられそうなら、シチュ―も用意できますので」

「あ、あの……何から何までありがとうございます」

照れ笑いするルティアだったが、私は元気な彼女の様子を見られたことが本当に嬉しかった。

※

食事の準備を済ませたところで、台所にリオくんが顔を見せました。

「お姉ちゃん！　あの人、目を覚ましたの？」

リオくんも心配だったのでしょう。

そわそわした様子で私に尋ねてきました。

「はい。先程目を覚ましました」

「大丈夫？　つらそうにしてない？」

「思っていた以上に元気で私も安心したところです」

「そっか……よかったぁ」

リオくんは、ほっと息を撫で下ろしました。

「そうだ。リオくんもあのお姉さん――ウィスさんにご挨拶しますか？」

「う、うん！　でも、いいのかな？」

「勿論です。これから少しの間、共に過ごすことになるのですから」

「わかった……じゃあ、ご挨拶するね」

そして彼と一緒にウィスさんの部屋へと向かいました。

扉のまでで数度ノックをして、

「ウィスさん……失礼します」

「は、はい！」

許可を得てから部屋に入ると、リオくんが私の後ろにピタッと付いてきました。
そして、少し緊張するみたいに私の背中から顔を出します。
「あれ？　その子は……」
リオくんを見て、ウィスさんは戸惑うように私に尋ねました。
弟なのか、息子なのか、でもエルフの私と人間のリオくんでは種族が違う為、ウィスさんは困惑しているのだと思います。
「リオくん、ご挨拶できる？」
「うん！　リオ・フラネルです。お姉ちゃんと一緒に、ここに住んでます！」
リオくんが言ったフラネルは私と同じファミリーネームです。
彼を引き取ると決めた時に与えた名前です。
今の自己紹介でウィスさんは私たちの関係をなんとなく察したのでしょう。
ルティア教団の司祭が、親を亡くした子を引き取ることは決して珍しくはないのです。
「あたしはウィス。リオって呼んでいかな？」
「はい！」
「じゃあリオ……これからよろしくね」
「よろしくお願いします！」
元気なリオくんの返事を聞いて、優しい笑みを浮かべるウィスさん。
彼女も子供は苦手ではないようです。
そんなウィスさんに、リオくんはハニカムような笑顔を返した。

「これから何かあればリオくんにも頼ってくださいね。ここでは彼が先輩ですから」
「はい。その時はよろしくね、リオくん」
「うん！」
こうして二人は自己紹介を終えました。
少しの間の共同生活になると思いますが、きっとリオくんにとってもいい経験になるでしょう。

※

食事もしっかり終えて、ウィスさんの体調は間違いなく復調に向かっているようでした。
身体が資本の冒険者ということもあって、しっかりと鍛えてきたのでしょう。
現時点でも身体に問題は見られません。
あとは精神的に問題が出なければいいのですが……そんな私の懸念を余所に問題なく時間は過ぎていきました。
ですが翌日のことです。
「サリアお姉ちゃん……」
「どうしたのですか？」
リオくんは困惑するような表情をしていました。
何かあったことが窺えます。
「……あのね、昨日の夜……ウィスさんの部屋から……変な声が聞こえて……」

「変な声……？」

「獣、みたいな……苦しそうな声が聞こえて……もしかして、どこか痛いのかも」

今朝、様子を見掛けた時のウィスさんはとても元気そうでした。

（……夜中に何かがあったのでしょうか？）

まさか記憶が一時的に戻っている？

それとも、魔物に犯された後遺症が出たのだろうか？

（……最悪なケースを想定するなら――）

もしかしたら、魔物化が起こっている可能性がある。

魔物化というのは、人が魔物に変化する現象のことだ。

見た目だけではなく、心までも魔物となり、人を襲い始める。

魔物化する条件は今も完全には判明していないが、そのうちの一つは女性の場合は魔物の体液を膣内に取り入れること。

そして魔物化した人間は決して元には戻らない為、現代で最も恐ろしい病気の一つとされていた。

「リオくん……少しの間、ウィスさんの部屋には近付かないようにしてください。万一ですが、もし悪い病気だったとしたら、それがリオくんに移ったら大変ですからね。……約束できますか？」

「……わかった」

ウィスさんのことを心配していたのでしょう。

少しの逡巡のあと、リオくんは素直に頷いてくれました。

（……女神ルティアよ……どうかウィスさんをお守りください）

心の中で神に祈りながら、私はウィスさんの様子を確かめに向かったのでした。

※

そんな私の心配を余所に、ウィスさんはいつもと変わらず元気そうでした。

『今直ぐ、剣の鍛錬をしたいくらいですよ！』

なんて意気揚々とおっしゃっていたくらいです。

一見、病魔に蝕まれているようには見えませんでした。

念の為、何か心配事があれば相談してほしいとも伝えたのですが、今のところは何もないということでした。

ですが、リオくんが嘘を言っているとも思えません。

私は暫く様子を窺うことにしました。

そして……その日の夜のことです。

私がウィスさんの部屋に伺う為に足を運んでいる途中、

「っ……ううっ……ああぁ……」

声が聞こえました。

辛そうな声――部屋の中で何かが起こっているのは間違いありません。

私は様子を窺う為、音を立てぬようにウィスさんの部屋を少しだけ開きました。

すると、

「あっ……んんっ……はぁ……ああっ……ダメ、これぇ……ダメなのにぃ……んぐぅっ❤」

「っ……」

驚愕に声を上げそうになり、慌てて自分の口を手で押さえました。

扉の隙間から見えたのは、ベッドの上で自身を慰めるウィスさんの姿だったのです。

「ああっ❤　なんでぇ……全然、治まらない❤　どんどん、おまんこ濡れてきてぇ……ああっ……指、止まんない❤」

グチュグチュと響く淫猥な音が、どんどん激しくなっていきます。

大きな乳房をぷるんと揺らしながら、快感に酔うように甘い声を上げるウィスさんの姿はあまりにも卑猥で……普段の明るい彼女からは考えられない淫乱な姿でした。

「あっ……んんっ❤　ふぅ……ど、どうして……こ、こんなぁ❤　い、今まで、お、オナニーなんて……したことなかった、のにぃ……んっぐぅぅぅぅ❤」

熟れた花園を掻き乱しながら、ウィスさんはもう片方の手でぷっくりと膨らんだ乳首を抓り始めました。鋭い刺激が走ったのか腰を跳ねさせて、蜜壺からは溢れ切った雫が飛び散ってベッドを濡らし、お漏らしをするみたいな染みを作っています。

（……異常なほどの昂り……これはもしかして……）

いえ、間違いなく――魔物に犯されたことによる後遺症。

モンスターの体液は媚薬のような効果を与えると聞いたことがあります。

浄化の魔術を施しても、何度も犯された肢体にはその効果が染み渡ってしまったのかもしれません。そして今も、身体はその快楽を忘れることができず、刺激を求めてしまう。

しかも、彼女は記憶を消されている為、自身の身体の変化に大きな戸惑いを感じているはず。

（……ウィスさんの昂りを、なんとか鎮めなければ……）

私にも責任の一端がある。

だから、今も嬌声が聞こえるその部屋に、私は踏み込みました。

「あっ……んあああっ……んっ❤　……ぁ……ぇ……ああっ、さ、サリア、さまぁ❤」

突然、部屋に入ってきた私に驚きながらも、ウィスさんは陰裂を擦るその指を止めようとはしませんでした。

寧ろ見られることを興奮剤にするように、さらに激しく自身を慰め高い嬌声を上げました。

「あっ……ああああっ❤　サリア様が見てるぅ❤　見られちゃってるぅ❤　こ、これじゃ、あたしぃ、変態だって思われ、ちゃう、のにぃ❤　だ、ダメぇ❤　手が、止まんないぃ❤」

甘い嬌声は消えて、下品で蠱惑的な喘ぎ声がウィスさんの口から上がっていきました。

「んおおっ❤　おっ、おおおおっ❤　イグぅ❤　これぇもう止められない❤　聖女様に見られながら、あ、あたしぃ――オナニーでアクメ決めるぅ❤　んおおおっ❤　おっ、おっほおおおおっ……んっおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉっ❤」

私の姿を見つめながら、ウィスさんはさらに快感を貪るように蜜壺を犯す指の数を増やし――一気に掻き回すと、潮を噴き上げるように最初の絶頂を迎えたのです。

「ぁ……ぁっ……イってるぅ❤　昨日よりもすっごいの、キちゃってるぅ❤　ンッ……ンッオ❤」

ウィスさんは全身を痙攣させながら、声を震わせ悦んでいました。

ですが、快感の余韻に浸ることもないまま、彼女は再び花弁を弄り始めました。

「んおおっ❤　と、止まんない❤　今イったばっかりなのにぃ、オナニーやめられないのぉ❤　絶頂まんこイジメるのやっべぇ❤　おっ、おおおぉぉ❤　痺れるような快感が全身に走って、んおおおっ❤　これぇ❤　イき狂いオナニー癖になっちゃってるのぉぉぉぉぉ❤」

絶頂しながら、さらに絶頂を迎えるウィスさんですが、それで自慰を止めようとしません。

何度絶頂しようと、昂りが治まらずそんな自分自身に戸惑っているのでしょう。

なら私に出来ることは二つ。

一つは、より強い快感を与えて、彼女の昂りを解消すること。

そしてもう一つは――この昂りの原因を取り除く手段を考えることです。

「ウィスさん……失礼します」

私はウィスさんの乳首に唇を近付け、そして――

「ぺろっ……れろっ……ぺろっ……❤」

丁寧に乳輪の周りを舐めていきます。

「んおっ❤　さ、サリア様ぁ❤　な、なんで……なにを……おおおっ❤」

私が責めてくることなど、予想もしていなかったのでしょう。

戸惑いながらも、ウィスさんは喘ぎ声を上げ、唐突な快感から逃げるように身体を捻りました。

「ウィスさん……安心してください。私もあなたの昂りを解消できるように、お手伝いしますから」

そして私はねっとりと、焦らすように乳輪を舐める。

「せ、聖女様が……あ、あたしの胸を……おっぱい舐めて……ぁ……んっ……❤」

中央の突起だけは決して刺激しないもどかしい快感に、乱れ狂う一人の雌が辛そうな声を上げた。

「あぁ❤　お、お願いしますぅ❤　乳首ぃ、もっと強く刺激してください❤　そ、それじゃ、そんな弱い刺激じゃ、イけないからぁ……だからお願いしますぅ……聖女さまぁ❤」

「ダメです。今はまだこれ以上のことはしてあげません。その代わり、もう片方のおっぱいも……」

悶えるウィスさんに囁きながら、私はもう片方の胸に手を伸ばしました。

指先で乳輪の周りをくすぐるように刺激していきます。

「んっ……はぁ……ああっ……そ、そっちの胸もぉ……さ、触ってくれないん、ですかぁ❤　こ、こんなに焦らされたら、あ、あたしぃ……く、苦しすぎてぇ……狂うぅ」

乳輪の周りだけを責められる弱い快感に震えながら、ウィスさんは得られぬ快感のもどかしさに堪えきれぬように、自身の花弁に手を伸ばしました。

ですが、私はその手を押さえつけました。

「ぁ……な、なんで？　さ、サリア様ぁ……ど、どうして止めるんですか？　おまんこ、おまんこ狂いそうなくらいつらいんですぅ。オナニー！　オナニーさせてください」

「ダメですよ。自慰は行為は禁止です」

「あっ、あああぁ❤　なんでそんなイジワルするんですか❤　だめぇ❤　さ、サリア様に言われたって、あ、あたしは――する、からぁ❤　おまんこグチュグチュ指で犯しまくるからぁ❤」

押さえられていない方の手で、秘部に触れようとする彼女は、性欲に支配された獣のようでした。

「ウィスさん……申し訳ありません。――光輪よ。この者の動きを封じる枷を与えよ」

謝罪を口にしながらも、私は魔術の詠唱を開始しました。

ウィスさんの両手首に光の枷が嵌められた瞬間――秘部に伸ばされていた彼女の手が、ベッドに

向かって垂直に落ちていきました。

「なっ……なんで……腕が、重くて……」

「この光の枷に縛れている間は、あなたは自由に動くことはできません」

「そんな……じゃあ、あたし……オナニー……おまんこを、ぐちゅぐちゅにできない！」

「暫く……我慢していてください」

言いながら私はウィスさんのお腹を左手で撫でました。

同時に乳輪を舐めながら、右手ではおっぱいを優しく揉みしだきます。

でも、強い刺激を与えられる女の弱点は一切刺激しません。

「ぁ……はぁ……あぁ……んっ……ああっ……」

吐息が快感で漏れているのか、それとも辛さから出てしまうのか。

いや、その両方なのかもしれない。

「ウィスさんの肌……とてもきめ細かくて……柔らかいですね。でも、引き締まるところは、しっかりと引き締まっていて……とても魅力的ですよ」

お腹を撫でていた手を動かして、少し下の子宮のある辺りを軽く押してあげます。

すると、彼女の花弁はおちんちんを迎えるみたいにくぱぁ……と、蜜を滴らせながら開きました。

もっと気持ちよくなりたくて、おねだりしているみたいです。

（……女性の性器をこれほどまじまじと見ることになるなんて……）

自分のすらまともに見たことがないので、正直戸惑ってしまいます。

だけど、今はそんなこと気にしてはいられません。

ウィスさんの為に、今はこの昂りを少しでも解消してあげないと。

「……気付いていますか？　さっきから、乳首がすごく勃起していますよ」

「やっ……そ、そんな恥ずかしいこと、言わないで……くだっ……んっ❤」

触らなくても、彼女の乳首が硬く太く勃起しているのがわかりました。

生理反応は勿論あると思いますが、これはかなり敏感になっている証拠でしょう。

私が何もしなくても、彼女は蜜壺から愛液を滴らせて、切なそうに太股を擦り付けていました。

ここまで焦らしたことで、身体が今まで以上に敏感になってきているのでしょう。

「ウィスさん……」

私は彼女の乳首を唇で啄んで、

「ちゅうううっ、ちゅうううううぅぅぅう、ぢゅうううううううう❤」

快感を与える為に乳首を吸いながら、もう片方の突起を手で抓り、捻り上げました。

「んおおっ❤　おっ、おおおおぉぉっ❤　おっほおおおおおおおぉぉ❤」

少し痛いくらいのはずなのに、快感を持て余した彼女は嬉しそうに悲鳴を上げていました。

さらに、かじっ――と、吸っていた乳首の先を齧りました。

「っ――おっごおおおおおおおおおおおおぉぉおおぉ❤」

女性の喉からは出るとは思えない獣の絶叫を上げながら、身体を仰け反らせました。

同時に、おまんこも悲鳴を上げるみたいに潮を噴いています。

「いっぱい感じてくれたんですね。なら……もう片方も……かじっ❤」

「んっ……ぐうううううぅぅぅう❤」

唇を噛み締めながらも、おまんこは堪えきれず、もう一度潮が噴き上がりました。
ベッドは既にぐしゃぐしゃで、このままでは水たまりが出来てしまいそうでした。
「こんなにイってるのに、まだまだお潮が止まらないんですね」
「あぁ……んあっ❤　おまんこ、壊れちゃってる、みたいですぅ❤」
「ウィスさん……まだまだ、イきたいですか？」
「は、はい❤　イきたい、です、身体、昂っちゃって……おかしくなってて……サリア様ぁ……あたし、怖い、ですぅ」
今も表情は快楽に蕩けていますが、絶頂によって少し冷静さを取り戻したのかもしれない。
ウィスさんは自身の身体の異常さに対する恐怖を感じているようでした。
「大丈夫ですよ。……私があなたを必ず癒して差し上げますから」
言いながら、噛まれて敏感になっている双胸の突起を同時に抓りました。
「んおおおっ❤　おっ、おおおおぉぉ❤　ち、乳首ぃ、ダメぇ❤　あ、あたし乳首ぃ本気で弱いんですぅ❤」
「いいんですよ。いっぱいイってください」
続けて私は抓った乳首を上下に扱くように、擦るように刺激を与えていく。
ウィスさんが快感に悶える度に乳房がぷるぷると揺れるた。
「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、んっおおおっ❤」
刺激に合わせて喘ぎながら、絶頂の瞬間に激しく乱れる。
（……そろそろいいかもしれませんね）

私は乳首を扱いていた右手を止めてゆっくりと太股へ下ろしていく。
そして――左手で乳首を扱きながら、滴る蜜で濡れた花弁は擦った。
「んっ❤　あぁ……んおおっ❤　乳首されながら、おまんこ擦られたら……おっほぉ❤」
さらに蜜が溢れ出し、軽く触れただけで指先に愛液が滴っていく。
「少し、激しくしますね」
指先でさらに激しく花弁を掻き乱しました。
「おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　んおっ❤　おっほぉ❤」
ウィスさんは小刻みに身体を震わせていました。
軽イキを何度も繰り返しているのでしょう。
おまんこが先程から開きっぱなしで、おちんちんを欲しているようでした。
もっと強い快感が欲しいのでしょう。
それに……女性の一番感じる場所――クリトリスが真っ赤になり、ぷっくりと膨らんでいました。
「今からい～っぱい、感じさせてあげますからね」
花弁を擦っていた指先を二本膣内に入れて、ぐちゅぐちゅと掻き回すように刺激していきます。
驚くくらいウィスさんの膣内は熱くなり、指を締め付けてきました。
そのまま指を激しく前後させながら、乳首を責めていたもう片方の手で――花弁の中心にあるぷっくりと膨らんだ突起を嬲るように擦り始めました。
「んおっ❤　やっ、べぇ……おっ、おおっ❤　んっほおおおっ❤　それぇ……クリ、は、マジだめぇ❤　さ、サリア様に手マンされながらのクリ責め、イクぅ❤　イくぅ、からぁ❤」

ウィスさんのクリトリスがさらに硬くなっていく。

触ってもいないのに、乳首もさらに勃起していた。

「我慢しなくていいのですよ。快感に身を任せて、そのままイってください」

私は僅かに残った彼女の羞恥心を取り除く為に、蕾の突起を抓り、引っ張り上げた。

「んおおおっ❤　おっ、おっごおおおおぉぉぉぉ❤　んおおおおぉぉぉぉ❤　クリィ……引っ張られるの、マジ、やっべぇ❤　イくの止まらなくなっちゃうぅ❤　おまんこ、おかしくなるぅ❤」

強烈な快感で、ウィスさんは反射的に腰を跳ねさせてしまったのだろう。

その瞬間、弧を描くように潮が噴き上がった。

彼女の絶頂を見つめながらも、私はさらに強い快感を与える為に肉芽を弄りながら、勃起した乳首も同時に吸い上げる。

「やっ、やべぇ❤　勃起クリと勃起乳首の同時責めぇぇぇっつ❤　んおおおおおおおおっ❤　おっ、んおおおおおっ❤　死ぬぅ❤　イきながら弱いとこ責められたらぁ、い、イキ死ぬぅぅぅ❤　んおおっ❤　おおおっ❤　サリア様ぁ❤　もっとぉ❤　もっと、あたしを狂わせてぇ❤」

幸せすらも感じさせるような恍惚とした顔を見せながら、彼女はガクガクと全身を震わせていた。

これだけの絶頂を繰り返せば体力を失って気絶してもおかしくはないだろう。

だが、荒い呼吸を繰り返しながらも、彼女の瞳はまだ快感が欲しいと訴えている。

（……絶頂と共に媚薬効果も薄まっていくのではないか。そんな風に考えていましたが、ウィスさんの昂りは治まりそうにありませんね）

完全にこの昂りを鎮めるには、彼女を犯している魔物の体液――媚薬効果を根本から取り除かな

ければならない。

そして、ここまで彼女の身体を調査した結果、気付いたことがあった。

本来、人の身体に流れる魔力は血液のように全身に循環している。

だが、彼女の魔力はほとんど流れることなく胸の中心に溜まってしまっていたのだ。

これも魔物に犯された後遺症の一環なのか。

魔物の体液が身体に流れ込んだことで、魔力の循環を阻害しているのかもしれません。

胸の中心に溜まったこの魔力を全て吸い出すことが出来れば、同時に媚薬効果を取り除けるかもしれない。

（……なら――）

一つだけアイディアが浮かびました。

吸収（ドレイン）という、対象者の体力や魔力を吸収する魔術があります。

「ウィスさん、少しの間だけ……我慢してくださいね」

私は彼女の胸に中心に触れて、

「女神ルティアよ――どうか、奇跡を――この者をお救いください」

魔術を行使しました。

「んっ……んあああああっ……さ、サリア様ぁ……な、なに、を……んんっ❤」

魔力を吸われる苦しさがあるのか、ウィスさんは切なそうな声を上げました。

「で、でもぉ❤　か、身体が、熱くなってぇ……さ、サリア様ぁ❤　こ、これぇ……ダメぇ❤　お、おっぱいが、なんだかおかしくぅぅぅ……んおおおおぉぉぉぉぉっ❤」

淫らな嬌声と共に――ぷしゅうううううううううう――と、おっぱいから母乳のようなものが噴き上がった。

「あっ……んっ……」

その噴き上がった大量の白濁液が私に掛かり、顔や服を濡らしていきます。

（……まさか、こんな風に吸収の効果が現れるなんて）

本来、魔力とは目に見えないものだ。

（……なら吸収されたことで、噴き上がったこれはなんなのか？）

循環の障害となっていた物は純粋な魔力ではなく、彼女の身体の中で魔物の体液と組み合わさった、特殊な何か――媚薬効果の原因なのだろう。

（……魔物の体液と人の魔力が組み合わさることで、媚薬効果が生まれるということなの？）

この辺りは直ぐに解明できることではないかもしれませんが、私は一つの推論として、そのようなことを考えてしまいました。

「あっ……んおおおっ❤　な、なんでおっぱいがぁ❤　あ、あたし、あ、赤ちゃんなんて、生んだこと、ない、のにぃ❤」

「大丈夫ですよ。あなたは孕んではいません。これは治療の一環なのです。昂りの原因が、おっぱい――あなたの乳首から母乳のようになって噴き出しているのだと思います」

「こ、これが……昂りの、原因？　んおおっ❤　んおおおっ❤　ぼ、母乳、噴くの、やっべぇ❤　ぎんもぢいいいいぃぃ❤　こんな快感、知らない❤　サリアさまぁ❤　もっとこれぇ、してぇ❤　んぐごおおぉぉ❤　おっぱい射精させてぇ❤」

「もっと搾り出して上げますからね」

私は吸収の魔術を使いながら、彼女の大きな双胸を思い切り搾りました。

すると、ぷしゅうううううううううううぅぅぅ――と、勢いを増して、天井に届くかのような勢いで母乳のようなものが噴き上がりました。

「おっ、んっごおおおおぉぉ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　イクぅぅぅう❤　さっきから、まんこイきまくってるぅ❤　おっぱい搾られながら、潮吹きするの、やっべぇえええええっ❤　これぇ❤　雌しか感じられない幸せ――んっぐうううううううぅぅぅ❤」

それは雨のようになって私に降り注いでいきます。

「いいですかウィスさん……この噴き上がったものを口に含んではいけません。これがあなたを狂わせている原因ですから」

「あっ……んっんんんっ❤」

最後に残った理性を振り絞るように、彼女は下唇を噛み締めながら口を塞ぎました。

狂ってしまいそうなほどの快感と戦う彼女の意志を見て、私もさらに強く責める覚悟を決め――さらに強く柔らかな二つの果実を搾り上げたのです。

「んっ、んごおお❤　んっ、ぐうううううううううううううぅぅぅう❤」

室内に快楽の嬌声が響いた。

必死に堪えるウィスさんの表情が、これまでにないほどの多幸感に染まっていく。

次第に噴き上がっていた白濁液は勢いを失っていく。

「最後の、仕上げ、です」

ウィスさんのおっぱいを搾りながら、

「ちゅうううっ、ちゅうううううううううぅぅぅぅ」

私は乳首を吸い上げました。

「んおおっ❤　おっ❤　おっ❤　で、出てるぅ❤　さ、最後の一滴まで、搾り出されちゃってるよおおぉぉお❤」

一切、彼女の身体の中に昂りの原因を残さぬようにと。

私はハンカチを取り出して、吸い上げた液体は吐き出しました。

そしてもう片方の乳首も口に含み、搾りながら思い切り吸い上げた。

「おっ❤　んごおおおっ❤　おおおっ❤　あっ、あああっ、んおおおおっ❤」

ぷしゅうううううぅぅぅ――と、何かが噴く音が聞こえました。

それは乳首から噴き上げたのではなく、彼女の蕾が再び潮を噴いた音でした。

「んおおお❤　おっ❤　おっほおおおおぉぉ❤」

直後、乳首からも真っ白な液体を噴き上がり、私の口の中から溢れ零れてしまいます。

ですがそれに構うことなく、彼女の身体に残った元凶を全て排出させる為に、私は乳首を吸い上げました。　もう一切、何も出なくなるまで。

「おっ❤　おおぉぉぉっ❤　身体の力、抜けてぇ……んおおおっ❤　んっぐぅぅぅぅ❤」

悶える彼女の身体に触れながら、私は魔力の流れを調べていきます。

循環を阻害していたものが吸い上げられたことで、彼女の魔力の流れは正常に戻っていました。

（……あとは、ウィスさんの身体の昂りが治まるといいのですが……）

彼女の様子を窺っていると、

「……はぁ……あぁ……はぁ……あぁ……」

声を震わせながら、ウィスさんは熱い吐息を漏らしました。

全身の熱が消えたわけではないようですが、随分と落ち着きを取り戻していました。

「ウィスさん……大丈夫ですか？」

「あぁ……は、はい……かなり楽に、なって……きました」

「よかった……これでもう、大丈夫ですよ」

やはり魔力の流れを阻害していた原因を取り除いたことで、彼女の昂りを鎮めることができた。

（……推測でしかありませんでしたが、とりあえず上手くいってよかった）

ほっと胸を撫で下ろす私に、

「はぁ……あぁ……サリア、さまぁ……本当に……すみま……せ……」

ウィスさんは謝罪を口にしながら、疲れ切ってしまったのか、気絶するように意識を落としてしまいました。

（……かなり体力を消耗していたのでしょうね）

あれだけの絶頂を繰り返したのだから当然でしょう。

それが魔物によって強制的に与えられた望まぬ快楽であるなら、余計につらかったに違いありません。

（……ウィスさん……直ぐに気付いてあげられなくてごめんなさい）

心の中で謝罪しながら、私は彼女を抱きかかえて自分の部屋へと連れて行き、ベッドで休ませた

のでした。

※

翌日。

ウィスさんはすっかり調子を取り戻していました。

「サリア様……昨日は本当にすみません。あたし、なんであんな風になっちゃったのか……」

ですが昨日の記憶はしっかり残っているようで、彼女は顔を真っ赤にしながら気まずそうな顔をしていました。

「あまりお気になさらずに……女性にも……その、性欲はありますからね」

「っぅ……ほんと、すみません」

羞恥心からか、ウィスさんは顔を伏せました。

「あの……サリア様。もう何日か休ませてもらったら、この村を出ようと思います」

気まずさを感じて、私に遠慮しているのでしょうか？

ウィスさんがそんなことを言いました。

「もし昨日のことを気にしているなら――」

「あ、それは違うんです。いや、昨日のことは気になってるんですけど……体調もかなり良くなってるので！　それに……家族や友達も心配してるかなって」

「わかりました。もう暫く様子を見て問題がないようなら、私も一緒に冒険者ギルドのある街まで

足を運んでみようと思うのですが、いかがでしょうか？」
「えっ⁉　さ、サリア様も、ですか？」
「はい。ダメ、でしょうか？」
「……だ、ダメではありませんが……流石にこれ以上、ご迷惑を掛けるわけには……」
「迷惑ではありませんよ。私がしたいからするのですから。それに……一人で送り出すほうが心配で気になってしまいます」
私の言葉を聞いて、ウィスさんは目頭を潤ませました。
「……サリア様……まだ出会ったばかりのあたしのことを、そこまで気にしてくださるなんて……本当にありがとうございます！　それじゃ……もう少しの間、よろしくお願いします」
ベッドの上で正座をして頭を下げながら、ウィスさんは私に感謝を伝えました。
こうして、もう数日は先の話になると思いますが、少しばかりの遠出が決まったのでした。

※

しかし、そうなると問題なのは、
（……リオくんは、どうしましょう？）
お留守番……してもらうとしたら、万が一ですが私がその日に帰って来れなかった時が心配です。
なので、リオくんにも今後の予定について相談したところ、
「ボクも一緒に行きたい！」

そう言われるかと思っていましたが、予想通りになりました。

（……街に行くだけなら、それほどの危険があるわけではありませんが……）

魔物は勿論ですが、盗賊に襲われる危険がないわけではありません。

ですが、リオくんを一人にするよりも、私の傍にいてもらうほうが安全だとも思えます。

（……危険だとわかっている場所へ連れて行くことはできませんが……少し遠くの街へ行く程度なら、旅行のようなものですよね）

リオくんにとっても社会見学になる。

なら、

「わかりました。リオくんも一緒に行きましょう。でも、何か問題が起こったら、必ず私の指示に従ってくださいね」

「うん。お姉ちゃんの言う通りにするから！」

素直に頷くリオくんが可愛くて、私は彼の頭を優しく撫でたのでした。

※

そして、さらに一日時間が過ぎました。

ウィスさんの回復は想像以上に早く、明日には村を出ようということで話が決まりました。

その日の夜、なぜか眠りに付けない私は、聖堂へと足を運びました。

（……まさか、眠れないなんて……）

ただ、街へ行くだけの短い旅で、本来ならそんな緊張するようなことではありません。
なのに私は、不思議と全身が熱くなっていくような感覚に襲われていました。
しかし、祭壇の前に膝を付けば、身が引き締まる想いに変わります。
静寂に包まれた聖堂内は、その神聖さも相まって、不思議と心を落ち着かせてくれる。
「女神ルティアよ――どうか我らに大地母神の加護を――」
いつもなら、そうだったのですが……。
（……なんだか、おかしい、です……）
身体がおかしなほど、熱に浮かされていくのを感じました。
「はぁ……あぁ……はぁ……あぁ……んっ……うぅ……」
呼吸が乱れて、全身が昂るような感覚が止まりません。
「これ……は……ぁ……」
自然と自分の手が、股へと伸びてしまいそうになりました。
「し、神聖な祭壇の……前で……わ、私は……何を……」
意図的にしているのではなく、熱を帯びた身体が勝手に動いてしまう。
明らかに発情している。
その原因として思い当たるのは――
（……ウィスさんを治療をした時に浴びた、あの母乳のような液体……）
あれを浴びたせい、だろうか？
体内に取り込まないように注意は払っていたのだけれど、僅かに吸収してしまったのかもしれな

い。

「っ……んあっ❤」

我慢できず、手が下着の上から秘所に触れる。

それだけで、甘美な贅沢であるような快感が全身に走った。

「んっ、んああっ❤」

こんなものを知ってしまったら、もう手は止まらない。

さらに快感を求めるように、私は下着をずらして濡れそぼった花弁に触れた。

意識しているわけではないのに、指の動きがいっそう淫らになっていく。

「ふぅ……あっ❤　んっ❤　んっ❤　はぁ……ああっ❤」

それに合わせるように、私の口からも甘い嬌声が漏れてしまった。

ただ、あの母乳のような白濁液を浴びただけで、これほど身体を狂わせるなんて。

（……ウィスさんは、こんな快楽と戦っていたのですね）

魔物の体液――その媚薬効果がどれほど恐ろしいものかを再認識する。

とてもじゃないが、まともではいられない。

快感に狂う雌になってしまいたいと、私の全身が訴えていました。

「んっ❤　あっ、んあああっ❤　あぁ……いいっ❤　すごい❤　自慰行為が、こんな気持ちいい、なんて……んあっ❤　だめぇ、出ちゃう❤　夜の聖堂で、下品な声、出ちゃいますぅ❤　んぐぅ❤」

我慢しなくてはいけない。

そうでなければ、ウィスさんや――それにリオくんに一人で自身を慰めているところを見られて

しまう。

でも、それが嫌だと思っていても、辞めることなんてできない。

それほどまでに、身体が快感を欲していました。

花弁はすっかり濡れていき、静かな聖堂にはクチュクチュと熱い蜜が絡み合う音が響きました。

「あっ❤　んんっ❤　教会で――女神の祭壇の前で、こんな……絶対、してはいけない、のにぃ❤　だ、ダメぇ……全然、指が、止まりません❤　あっ❤　あっ❤　あんっ❤　あぁぁぁっ❤」

より強い快感を求め、蕾を擦る指にさらに力が入っていきます。

「あっ……❤　どんどん、あそこ熱く、なって❤　んあぁっ❤　ふぅ……ふぅ……んんっ❤　も、もう……イっちゃ、う❤　んっ❤　んんっ❤　んっあぁぁぁぁぁぁっ❤」

絶頂の嬌声が教会内に響きました。

（……こんなに声を上げては、リオくんにもウィスさんにも気付かれてしまう）

そんな不安に襲われながらも、私は蕾を弄る手を止められませんでした。

花弁からだらだらと蜜が零れ落ち、神聖な聖堂を汚していきます。

（……ルティア教団の司祭である私が、女神様を祀る祭壇の前でこんな淫らなことをしては……）

必死に手を止めようとしました。

でも、

「んっ❤　んぐっ❤　んんっ❤　ふぅ……ふぅ……んんっ❤」

僅かに理性は残っていても、身体は快楽を求めて続けて――私は何度も軽イキを繰り返しました。

それでも身体の熱は一切引くことはありませんでした。

（……なんとか、しなくては……）

ウィスさんと違い、私は体内に多くあの液体を取り込んでしまったわけではない。

なら何度か絶頂を繰り返せば、この昂りは抑えられるはず。

（……女神ルティアよ――お許しください）

まだ理性が残っているうちに、心の中で女神へ謝罪する。

そして――私は祭壇の前で修道服を脱ぎ捨てた。

「あっ❤　ああっ❤　ンあっ❤　んぐっ❤　んんっ❤　ふぅ……んあああっ❤」

蕾をさらに強く掻き回しながら、手で胸を揉みしだいていく。

女性の弱い部分を同時に刺激することで、より強い快楽が私の身体に流れた。

快感を欲した雌のように、自然と腰を前に突き出してしまう。

「んあっ❤　ああっ❤　もっと、気持ちよくなりたい❤　まだ、足りない❤　あっ、んんっ❤　あっ、ふぅ……ああっ、んっぐうううぅ❤」

軽イキはできても、求めている絶頂には届かない。

そんなもどかしさを感じていた。

もっと、もっと強い快感が欲しい。

胸を揉みしだいていた手を乳首に添えて、思い切り抓りあげる。

「おっ❤　んおおおおおおっ❤」

下品な嬌声を上げながら、少量の潮がぷしゅっと漏れ出す。

でも、求めている絶頂にはまだ足りなくて、私は開いた花弁の中でぷっくり膨らむ肉芽を擦った。

「んおおおっ❤　ここっ、やっぱり、きっくううぅぅぅっ❤」

女の弱点を自ら責めて貪欲に快感を貪っていく。

擦ったクリトリスがさらに硬く膨らんだところで、その真っ赤な肉芽を摘まみ、抓りながら引っ張り上げた。

「んっ❤　おっ、おおおっ❤　全身に電気が走るみたいになってぇ……イクぅぅ❤　やっとイけるぅ❤　すごいのくるぅ❤　きちゃってるぅ❤　おっ、んおっほほおおぉぉぉぉぉぉ❤　んっぐううううぅぅぅぅう❤」

花弁の奥から、お小水のように潮が噴き上がり、祭壇を汚してしまう。

でも、求めていた強い絶頂に私は獣のような喘ぎ声を上げていた。

「はぁ……あぁ……んっ……あぁぁ……んあっ❤」

絶頂の余韻を味わいながら、熱い吐息が漏れる。

これで、やっと終われると思っていた。

でもその考えは甘かった。

強烈な快感に微睡ながらも、快楽を貪る手は止まることなく、今も肉芽を指で掻き乱していく。

「あっ……んああっ❤　な、なんでぇ……イ、ったのに……手が止まりま、せん❤　おっ、おおおおっ❤　イきたてまんこ、グチュグチュする快感、やっべぇ❤　おっ、おっほおおぉ❤」

軽イキする度に、ぷしゅっ、ぷしゅっ、と祭壇に潮を撒き散らしてしまう。

女神ルティアを穢すに等しいことの行為すらも、今の私には強い興奮をもたらしていた。

「ぁ……はぁ……んっ……」

私の撒き散らした淫猥な香りに聖堂が包まれる中で、
「ん……？」
僅かに雄の匂いを感じた。
同時に微かに声が聞こえる。
聞きなれた少年の――リオくんの声だ。
「はぁ……あぁ……」
切なそうな声が聞こえて、その方向に目を向けると扉が微かに開いていた。
まさか――
「……リオ、くん……いるの、ですか？」
私が呼び掛けた瞬間、ガタッ――と、扉が揺れた。
その衝撃で開いた扉の先には、下半身を露出したリオくんが立っていた。
多分、私が自身を慰めているのを見て、リオくんもオナニーをしていたのかもしれません。
彼は慌ててておちんちんを隠そうとしましたが、手で覆いきれないほど大きく反り立っていました。
申し訳なさそうに、リオくんは顔を背けました。
ですが気にする必要なんてありません。
寧ろ私の身体はリオくんに見られたことで、より昂っていました。
それに、あんなぶっといおちんちんを見てしまったら、欲しくて、欲しくて仕方なくなってしまいます。
「いいん……ですよ……来てください、リオくん」

私は羞恥心に震える彼に手招きました。

すると、リオくんは言われるままに、私の傍に寄ってきました。

「いい子、ですね……ああっ、リオ……くん……」

「お姉ちゃん……苦しい、の？」

「はい……今、私の身体は魔物の、せいで……発情して、しまっていて……」

熱に浮かされた頭では、上手く説明することもできませんでした。

「ぼ、ボクに……できること、ある、かな？」

「あぁ……はい❤　あります、よぉ❤　リオくん❤　お姉ちゃんを、いっぱい気持ちよくしてください❤」

「気持ち、よく？」

「はい❤　ここ……おまんこが、見えます、か？」

「う、うん……」

「今、とろとろに……なってます、よね？　この濡れそぼった蕾に――リオくんの逞しいおちんちんを、挿れてほしいんです」

「お、お姉ちゃんの……おまんこに……ボクの、を……」

「はい……そうですよ。この前の性教育の……続き、です❤　女性のおまんこに、男性のおちんぽを挿れることを、セックス……と、言うのですよ」

「せっく、す？」

「はい……その行いこそが、男女が愛し合うということなのです」

「ボクと、お姉ちゃん、が……愛し合う？」
「はい。リオくんは……私と愛し合うのは、イヤ……ですか？」
私がそう尋ねると、リオくんのおちんちんはビクンと大きく跳ねた。
まるで私と愛し合うことを歓迎するように。
「そんなことない！　したい――大好きなお姉ちゃんと、セックス、したいよ。お姉ちゃんも、ボクにして、ほしいの？」
「はい❤　勿論です。リオくんのおちんぽで、この発情まんこをいっぱい愛してください❤」
「……わかった。お姉ちゃんがしてほしいことなら、ボク……なんだってするから」
言いながら、リオくんが私に覆い被さってきました。
そして、狙いを定めるように私のおまんこに亀頭を当ててきました。
（……あぁ……ああ❤　リオくんの初物ちんぽ❤　童貞を私が貰っちゃいますぅ❤）
それが嬉しくて、私はお腹の奥がさらに熱くなって、おまんこから蜜が溢れ出てくるのを感じていました。
「いく、よ、お姉ちゃん」
「はい……リオくん、きてぇ❤」
待ちきれなくて、私は腰がグイグイと前に突き出てしまいました。
はしたない雌のように、彼のちんぽを求めてしまっています。
ゆっくりと、リオくんの極太ちんぽが私の膣内に入ってきました。
「ぁ……お姉ちゃん……すごいっ……よ。ヌルヌルして、おちんちんに……何か、絡み付いて……」

「あっ❤　んんっ❤　リオくん、がん、ばって❤　おちんちん、もっと奥に、ぐっ、ぐっ……って、挿れてください❤　ほぉら、がんばれ❤　がんばれ❤　リオくん、がんばれ❤」

荒い息を吐きながら、リオくんは私の応援に鼓舞するように、一生懸命に腰を突き出しました。

すると、ググッ――と、おちんぽの半分くらいが、膣内に入ってきました。

「はぁ……ああっ……❤　リオくん、もう少し、ですね❤　がんば、って❤」

「ぁ……ぅ……お、おねえ、ちゃん❤　ま、また……おちんちんから、白いの、出ちゃい、そう、だよぉ……ぁ……うぅ……」

「いいのですよ❤　はぁ……んんっ❤　もし出てしまいそうなら……んああっ❤　私の、膣内に出して……くだ、さい❤」

「で、でもぉ……お姉ちゃんのおまんこに、あんなの出すなんて、汚い、よぉ……」

「汚くなんて……ふぅ……❤　ない、の……ですよ❤　リオくん……あれは精子と言って……んあっ❤　本来はおまんこの膣内に、あっ❤　出すもの、なのです❤」

「ぇ……おまんこ、に？」

「はい❤　男女が交わり、女性の膣内に射精することで、はぁ……ああっ❤　赤ん坊を授かることが出来る。んんっ❤　セックス、というのは……あんっ❤　とても神聖な行為、なのですよ❤　んぐっ❤」

「あか、ちゃん？　ボクと、おねえちゃん、の？　赤ちゃん、できる、の？」

「心配しなくても、大丈夫、ですよ。わ、わたし、は……エルフ族、ですから……んっ❤　人間と比べると、孕みづらい、ので……いっぱい出しても、簡単には、赤ちゃんはできま、せん、から❤」

私がそう言うと、膣内でリオくんのおちんちんがさらに膨らんでいくのを感じました。

「んあっ❤　り、リオ、くん？　んああっ❤」

「ボクがお姉ちゃんを、孕ませる。膣内に射精すれば、赤ちゃん、できるん、だ」

興奮したリオくんが、思い切り腰をガンッと押し込んだ瞬間――

「ンオオオッ❤　おっ❤　んおおおおおっ❤」

グググググッと、おまんこの襞を抉りながら、子宮の奥まで一気に、リオくんの極太ちんぽが入ってきた。子宮を突かれた瞬間――脳に電気が走るような衝撃で、私の全身が震えてしまう。

挿れられただけで、あまりに驚くような快感。

その甘美に私が酔いしれていると、リオくんは堪えきれないとばかりに腰を強く打ち付けてピストンを開始しました。

「おっ❤　リオくんちんぽ、やっべぇ❤　こ、こんな、凶器みたいなちんぽぉぶち込まれたらぁ❤　く、狂うぅ❤　お、女なんて、簡単に雌になっちゃうぅぅぅ❤　おちんぽのことしか考えられない、完堕ちまんこになっちゃいますぅぅぅっ❤　おっ、んっおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉっ❤」

――グチュグチュグチュグチュ。

――パンパンパンパンパン。

リオくんがピストンする度に、卑猥な音が聖堂に響きました。

「んおおおっ❤　おおおっ❤　り、リオきゅん、す、少しぃ、ゆ、ゆっくりぃ……じゃないと、わ、私、おちんぽで頭、狂うぅぅぅぅっ❤　おっ❤　おっ❤　んおおっ❤」

嬌声と共に願いを口にする私のおまんこを、リオくんはさらに激しく突き掻き回しました。

「う……っ……お姉ちゃんが、すっごく、気持ちよさそうな顔、してる。ボクのおちんちんで、こんな顔、しちゃうんだ」

感じる私を見て、リオくんは嬉しそうに言いました。

そしてさらにピストンを加速させる彼は――雌を征服させる快感を知る、強い雄のようでした。

「んおおっ❤　やっ、やっべぇ❤　まだ、おちんぽ硬くなってぇぇっ……んおっ❤　おおっ❤　やべっ、イってるぅ❤　イキながら突かれまくの、癖になっちゃうぅぅぅっ❤　んおっおおおっ❤」

聖堂に響く私の嬌声。

それは教会の中だけなく、村の外にまで響き渡っているかもしれません。

「おっ❤　おっ❤　おっ❤　あぁ……このままじゃ、私ぃ……おっごおおおぉぉぉ❤　夜の聖堂で下品に喘ぐぅぅぅ、おおっ❤　へ、変態シスターだって思われちゃいますぅ❤　おっ、おっほぉ❤」

「そんなの気にしないで……お姉ちゃん、いっぱい……感じちゃ、え！」

もっと私を感じさせたいのか、リオくんはピストンを続けながら、手を私の胸に伸ばして――乳首を弄びました。

「んっほぉ❤　ち、乳首、押し込んじゃ、ダメぇ、ですぅ❤　り、リオくん……す、少しや、優しく……んんっ❤　ああ、つ、抓っちゃ、おっ❤　おおっ❤　おっごおおおおおおおおぉぉぉ❤」

乳首を押したり、抓ったり、引っ掻いたり、弾いたり、あらゆる刺激を私に与えてきました。

まるで、私がどんな反応をするのか、何をすると一番感じるのかを確かめているようでした。

「お姉ちゃん……乳首、弱いんだね。なら……ちゅうっ……ちゅうううぅぅぅぅ❤」

「おっほぉぉお❤　り、リオくん、い、今乳首吸われたらぁ……わ、私ぃ、やっ、やっべぇのくる

うううう❤　んっ❤　おっ❤　おおおっ❤　お腹、熱くなって……おおっ❤　おっほぉおおおおお❤　乳首吸われながら子宮グリグリされたらぁぁんおおおっ❤　いいいい、イキ死ぬうううう❤」

絶頂が止まらない。

頭が狂ってしまうほどの快感に、何度も意識を失いそうになる。

それでも、もっと快感を求めるみたいに、腰が勝手に動いてしまう。

「っ……お姉ちゃん、ボク……もう出ちゃい、そう、だよ」

「ぁ……ああっ❤　リオ、くん❤　いい、ですよ。ここまで、いっぱい、がんばってくれました、もん、ね❤　だから、いっぱい膣内に、出してくだ、さい❤　おっ❤　ンオオオオッ❤　オッゴオオオオッ❤」

リオくんを抱き締めながら、私もさらに激しく腰を動かしました。

互いの腰が激しくぶつかり合い、ぷしゅぷしゅと愛液が飛び散っていきます。

これほどリオくんに感じさせられてしまうなんて、少し前なら考えられませんでした。

「おっ❤　んおおっ❤　あの、甘えん坊だった……リオ、くんがぁ、こんなぁ……こんなに雌を悦ばせる雄に、なってるなんてぇ❤　んおおっ❤　知らな、かったぁ❤　おっ❤　おおおっ❤」

「ぁ……っ……出ちゃ、る……お姉ちゃん、もう、ボク……出ちゃうぅ……」

「おっ❤　おおっ❤　いい、ですよぉ❤　膣内でも、顔でも、おっぱい、でもぉ❤　リオくんの好きなところに、出して、くだ――んおおおおおっ❤」

ラストスパートとばかりに、リオくんのおちんちんはさらに硬く膨らむ。

そして子宮をガンガンと、おまんこが壊れてしまうほど激しく突いてきた。

でも、その乱暴なくらいなピストンが私により激しい快感を生み出していく。

「んおおっ❤　おっ❤　おおっ❤　んおおおっ❤　やっべぇ❤　リオくんの極太ちんぽのガン突きぃぃぃ❤　こんなのされたら、おまんこ屈服しちゃうぅぅぅ❤　おっ、んおおおおっ❤　やっべぇ、マジ、やっべぇ❤　このままじゃ、ちんぽに屈服するぅぅ❤　わ、私、リオくんの保護者なのに……お姉ちゃんなのにぃ……り、リオくんに、逆らえなくなっちゃ――おっ、ほおおおおぉぉぉぉぉぉぉ❤」

絶頂する私を見て、リオはさらに動きを加速させて、亀頭を子宮の奥――子宮口をこじ開けようとするみたいに、グリグリと押し付けてきた。

確実に雌を孕まそうとする雄のような行為に、私の発情しきったおまんこは、きゅんきゅんと熱くなって、リオくんの射精を待っているみたいだった。

そして、ビュル、ビュルルルルルルル、ビュルルルルウルルルゥゥゥゥゥ――と、私の一番奥に、熱い子種が発射された。

その熱さを感じながら、

「おっ、んっごぉ❤　おっ❤　い、イクぅぅぅ❤　膣内射精（なかだし）されて……おまんこ、快感で狂ってぇ――おっおおおっ❤　んっほおおおおおおおおおおおおぉぉぉ❤　やっべぇ❤　膣内射精、すっげぇきっくぅぅぅぅ❤　まんこ蕩けるみたいになってぇ❤　おっ、んぐぅぅぅぅぅ❤　気持ちよすぎてぇ、も、もう、私ぃ……イク、イクイクイクイク、イクイクイクイクイク――イッグぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ、んっおっ、おぉおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ❤」

私はこの日、生まれてから感じたことのないような絶頂と、幸せに包まれていた。

（……あぁ……女神ルティアよ。申し訳、ありませんでした）

こんな、はしたない姿を……神聖な聖堂で、祭壇の前で、晒してしまうなんて。

「あぁ……おねえ、ちゃん……っ……ぅ……」

へとへとになったリオくんが、私の胸元に倒れてきました。

そんな彼を優しく抱き締めながら、

「あぁ……リオ、くん……ありがとう、ございます」

お陰で昂りは完全に鎮まっていました。

「もう……身体は大丈夫？」

「はい❤　リオくんがいっぱい感じさせてくれたお陰です」

「よかった。ねえ……ボクたちの赤ちゃん、できるかな？」

「それは……直ぐにわかりませんね。神様からの授かりものですから。……リオくんは、欲しいの、ですか？」

「うん。お姉ちゃんとの赤ちゃん……欲しい。だって、そうしたら……もうお姉ちゃんは、絶対ボクのものだって、証明したってことでしょ？」

「も、もう……リオくんってば、まだまだ甘えん坊さんだと思っていたのに、今日は随分とおませさんなことを言いますね。それに、女性をもの扱いしてはいけませんよ？」

「ぁ……ご、ごめん、なさい……でも、お姉ちゃんは、ボクの……だから……ボクだけのお姉ちゃんでいて、ほしい、から……」

咎めるように言いましたが、私は本気で怒っているわけではありません。

一人前の男性のように、一人の女性を愛してして、自分の物にしたい。

リオくんもいつの間にか、そんなことを考える年齢になっていたのですね。

「リオくん……私はいつでも、あなただけのお姉ちゃんですよ❤　それに……もし赤ちゃんを授かるなら、リオくんとの赤ちゃんなら私も嬉しいです」

言いながら、愛情を伝えるように私は彼を抱き締めました。

そんな私をリオくんも抱き締め返してくれました。

淫欲に塗れながらも、確かな愛情を感じることができる。

それを実感することができた一夜になったのでした。

第三章　音楽の都

時間はあっという間に過ぎて――翌朝。

天気は快晴で正に旅日和。

今日の旅立ちを、女神ルティアが祝ってくれているようでした。

「女神ルティアよ。どうか我々をお守りください」

旅に出る前に、私は祭壇の前で祈りを捧げます。

そうしていると扉が開きウィスさんが聖堂に入ってきました。

「準備はもう大丈夫ですか？」

「はい……というか、装備まで貰っちゃって、よかったんでしょうか？　村の皆さんにも気を遣わせてしまったみたいで……」

魔物に捕らわれた結果、彼女は装備や道具のほとんどを失ってしまいました。

ですが、私が過去の冒険で得た装備や、村の人たちの好意で、最低限、旅に必要な道具や装備を揃えることができたのです。

「あまりお気になさらずに。冒険者であるあなたが日々、人々の為に奮闘してくださっていたことへのお礼だと思ってください」

「ぅ～……なんだかそう言われると、すごく照れてしまいますが……でも、期待に応えられるように、これからもがんばります！」

ウィスさんは、照れながらも力強く微笑みました。

「無理だけはしないでくださいね」

「はい！」

と、私たちが話しているところに、リオくんがやってきました。

「あ、遅れてごめんなさい」

「大丈夫ですよ。私たちも今来たばかりですから……忘れ物はありませんか？」

「うん、大丈夫だよ。お姉ちゃんに渡された物も、ちゃんと入ってる！」

リオくんには、念の為の保険として魔道具（マジックアイテム）を渡してあります。

「渡された物というのは？」

気になったのか、ウィスさんが私に尋ねました。

「転移石という魔道具です」

「えっ⁉　転移石ですか⁉」

目を見開き、ウィスさんは驚きを露わにしました。

「ご存知なんですね」

「し、知ってるも、何も……伝説（レジェンダリー）級の魔道具じゃないですか！　戻りたい場所を登録すると、使用した際に一瞬でその場所に戻れるっていう」

流石は現役の冒険者。

道具のレアリティや効果に関しても詳しいようだ。

「最近では中々見掛けなくなったと聞きますよね。私は運良く手に入ったのですが、もう冒険に出なくなって久しいので使う機会がなくなっていました」

「流石はサリア様……と、言えばいいのでしょうか。……まさか伝説級の魔道具をお持ちだなんて」
感心するウィスさんの後ろで、リオくんも戸惑いの表情を浮かべていました。
「お、お姉ちゃん、ボク……そんなすごいアイテムを借りてていいの？」
「勿論です。リオくんの為に渡したのですから。魔道具は壊れさえしなければ、魔力を再充填することで何度でも使用できるので、危険があったら迷わず使ってください。
どんなレアなアイテムであろうと、リオくんよりも大切な物などないのですから。
「あ、それと……使用する前に戻りたい場所の登録を忘れてはいけませんよ」
「う、うん……今のうちにしておくね」
言ってリオくんは、少し逡巡するような素振りを見せた後に、私を見ました。
それから直ぐに、転移石に戻りたい場所を登録したようでした。
「さて……それでは皆さんの準備が整ったようであれば……早速、出発しましょうか！」
私が言うと二人は頷き――こうして、三人の短い旅が始まったのでした。

※

ポロン村から最も近いのは、ウイーエと呼ばれる町だ。
商業施設も多く大陸の中でも主要都市の一つとして数えられるだろう。
中でも有名なのは吟遊詩人の学校があることだろう。
その為、様々な楽器が売られており、音楽の都などと称されるこの町は、演奏者の聖地としても

有名だ。

私も何度か足を運んだことがあるが、ウイーエの酒場は他と比べて吟遊詩人の詩で賑わっていた。

「ウイーエまでは徒歩でどれくらいでしょうか？」

久しぶりに行く音楽の都を想いながら、私はウィスさんにそんなことを尋ねてみる。

「普通に歩いて三日掛からないくらい……というところだと思います」

「わぁ……結構、遠いんだね」

リオくんはこれほどの遠出をする機会は、これまでなかった為少し驚いてしまったようだ。

でも、彼の足取りは軽かった。

初めての旅に心がウキウキと沸き立っているのでしょう。

「今日はどこかで野宿することになるかもしれませんね」

「ええ……陽が落ちてきたら、暖を取れるよう準備を始めましょう」

とは言っても、まだ出発して間もない。

太陽も出て散歩しながら、景色を見ているだけでも気持ちがよかった。

歩いていると、心地のいい涼しい風が髪を撫でる。

「……ぁ……サリアお姉ちゃん、あれ……見て！」

リオくんが足早に駆けていきました。

どうしたのかと彼の走る先に視線を向けると。

「あら……虹兎ですか」

虹兎は別名――幸運兎と呼ばれている。

かなりの希少種の為、見つけた者に幸せを運ぶと言われていた。
「珍しいですね。あ、あれ……売ったらいくらくらいになるんだろう？」
「多分……家が建つくらい、でしょうか？」
虹兎は一部のマニアの間で高値で取引されています。
ですが、人に懐かず動きもすばしっこいのでかなり捕獲は難しいとされていました。
「リオくん、あまり兎さんを驚かせてはいけませんよ」
「うん、わかってる。でも……触らせてくれないかな？」
リオくんが近付いていくと――ぴょんと虹兎が彼の肩に乗りました。
「あ……お、お姉ちゃん、見て！　兎さんがボクの肩に！」
「すごいですね。虹兎は懐きにくいと言われているはずなのですが……」
「もしかしたら、リオには動物に好かれる才能があるのかもね」
私が感心していると、ウィスさんがそんなことを言いました。
それを証明するように、虹兎はリオくんのスリスリと自分の頬を擦り寄せました。
「ぁ……も、もう、くすぐったいよぉ」
こそばゆそうに言いながらも、リオくんは優しい笑みを浮かべながら、肩に乗った虹兎を撫でていました。
（……な、なんて可愛いんでしょう）
その素晴らしい光景に、私の胸は幸せでいっぱいになってしまいます。
可愛いリオくんと、可愛い虹兎が組み合わさったら、当然すっごく可愛いに決まっている。

「あぁ……ウィスさん。私は女神にどう感謝を伝えればいいのでしょうか？」

「可愛いをありがとうで、いいと思います」

直ぐに同調してくれたウィスさんに感謝しながら、私たちはこの微笑ましい光景を暫く眺め、癒されていたのでした。

※

ぴょん、ぴょん、ぴょん――と、後ろから跳ねるような音が聞こえ続けています。

「サリア様……」

「わかっています」

気になって足を止めて振り返ると、後ろには先程の虹兎がいました。

再び歩き始めてからずっと、虹兎は私たち……正確にはリオくんを追ってきていたのです。

「……兎さん……ボクと一緒にいたいのかな？」

「リオくんを気に入ってしまったようですね」

どうしたものでしょう？

ルティア教団の教会では、一般的にペットの飼育は禁止されています。

しかし、これほど懐いている動物と、リオくんを引き離すというのも……可哀想な気がしてなりません。ですが、たとえペットにするとしても、命を育てるというのは簡単なことではないのです。

「お姉ちゃん、この兎さん……飼っちゃダメ？」

「……リオくん、生き物を飼うというのは、とても大変なことなのですよ？　毎日のお世話を、しっかりしてあげないといけません」

兎はお散歩が必要なのでしょうか？

餌はニンジンでいいのだと思いますが、他に何か必要なものは？

「ボク……ちゃんとこの子のお世話をするから、ダメかな？」

リオくんのウルウルとした目で懇願されたら、私は断れなくなってしまいます。

（……ああ、女神ルティアよ。どうか――お許しください）

意志薄弱な自分が恨めしい。

ですが、

「飼う以上は責任を持って……いいですね？」

「は、はい！」

ペットを育てること。

それもリオくんにとっての成長の一つとなると願って、私は虹兎を飼うことを認めたのでした。

「二人で大切に育ててあげましょうね」

「あ、ありがとう、お姉ちゃん！　ボク、この子を大切に育てるから！」

感謝するリオくんの周りを、虹兎も嬉しそうに駆け回りながら飛び跳ねていました。

まるで一緒に喜びを共有するようなその仕草は、こちらの言葉を理解しているようでした。

「サリア様は本当にお優しいのですね」

「……そんなことは……ただ、甘いだけだと思いますよ」

ウィスさんに言われ、苦笑しながら返事をしました。
「でも飼うとなったら、名前を決めないとですね」
「……う～ん……虹兎……ラビットだから――ラビィってどうかな？」
少しの逡巡の後、リオくんは虹兎の名前を口にした。
「私はいいと思います。あなたはどうですか？」
虹兎が言葉を理解しているかはわからないけど、自然とそんなことを聞いてしまった。
すると、嬉しそうにぴょんぴょんと飛び跳ねる。
「じゃあ、お前の名前は今日からラビィ！　よろしくね、ラビィ」
こうしてうちの新たな家族の名前が決まったのでした。

※

旅の仲間が一匹増えましたが、今日の道中は他に大きな変化はなく。
気付けば明かりが落ちる時間帯になっていました。
「今日はこの辺りで野宿にしましょうか」
「はい。サリア様、私は焚火を起こす為の薪や枝、葉っぱを集めてきますね」
「お願いします。私とリオくんは、テントの準備をしておきますので」
役割を分担して、私たちは野宿の準備を始めました。

※

暫く時間が過ぎて。

テントも張り、焚火の準備も終え――夜の帳が下りてきた頃。

「あら？」

視線の先に、こちらへ向かってくる数名の男女の姿が見えました。

「ボクたちと同じ、旅人さん……？」

「いえ、佇まいからするに冒険者……だと思うよ」

ウィスさんの言う通り、彼らの動きからは、熟練の冒険者に見られるような、力強さが感じられる気がします。

その集団が、焚火を目印にするように、こちらへ近付いてきました。

「ぁ――」

顔がわかるくらい、彼らが近付いて来た時、ウィスさんが息を飲み込みました。

そして、

「ルード！　ルードでしょ！」

彼女はこちらに近付いていた数名の集団に向かって、走っていきました。

「ウィス！　やっぱりウィスか！」

パーティの戦闘にいた壮年の逞しい男性が、いち早く彼女に駆け寄っていきました。

そしてウィスさんは、彼の胸の中に飛び込んでいきました。

（……もしかして彼らは……）

考えていると、ウィスさんが私たちに向かって手を振っています。

「サリア様ぁ～～～～～みんな、あたしの仲間です！」

満面の笑みを浮かべながら、ウィスさんが声を弾ませていました。

（……ああ、よかった）

予想を裏切らぬ結果に心から安堵して、私も頬が緩みました。

「ウィスさんのお友達？」

「ええ、そうみたいですね」

隣にいるリオくんの頭を撫でると、彼の肩には虹兎が乗っていました。

（……虹兎――幸運を呼ぶ兎、ですか）

もしかしたら、この噂は事実なのかもしれませんね。

それを証明するような出来事が、この日の夜に起こったのですから。

「ぁ……じゃあ、旅はここで終わり、なのかな？」

冒険者ギルドへ行って、ウィスさんを知る人物を探すという本来の目的は果たせた。

しかし、

「リオくんは、どうしたいですか？」

「ボク、は……」

少しの逡巡。

私に配慮しているのか、どう言うべきなのかを考えているみたいだった。

「あなたの素直な気持ちを、私は聞きたいです。決して無下にするような真似はしませんから」
頭を撫でながら、リオくんの目を見つめて優しく伝える。
すると、
「ボクは……お姉ちゃんと、もう少しだけ一緒に旅がしたい」
思い切るように、リオくんは自分の気持ちを私に伝えたのでした。
「わかりました。では……当初の予定通り、ウイーエまで行きましょうか。一緒に音の都を見て回りましょう」
旅の継続を伝えると、リオくんは嬉しそうに、甘えるように私を抱き締めたのでした。

※

ウィスさんの冒険者仲間――ルードさんたちは、彼女が姿を消してから、ずっと捜索をしていたようでした。
聞いたところによると、二週間ほど捜索が続いていたようです。
私がウィスさんを救出してからの日数から計算しても、恐らく一週間以上はウィスさんは魔物に捕らえられていたということになります。
（……改めて感じますが、本当によく無事で……）
彼女が助かったのは、正に女神の奇跡と言っていいことだと再確認できました。
「それで、途中で力尽きちゃったみたいで……気付いた時にはサリア様に助けてもらってたの」

これまでの事情を、ウィスさんはかいつまんで仲間たちに話しました。

一部、補足説明を私がする形で。

話を聞き終えたところで、リーダー格の戦士の男性が口を開きました。

「今後、お前は一人で依頼を受けるのは禁止だ」

「ええ⁉　過保護すぎるでしょ！」

「みんなに心配を掛けたんだから当然だろ。寧ろ命があったことを喜ぶべきだ」

反論するウィスさんを、リーダー格の男性が窘めました。

彼の表情からは、心から彼女を本当に心配していたことが窺えました。

仲間の皆さんも同じ心境なのか、うんうんと頷いています。

そして、

「サリア様……名乗るが遅くなり申し訳ありません。このパーティーリーダーのルードです。ウィスを――妹を救ってくださって本当にありがとうございます！」

ルードさんは深々と頭を下げて、私に感謝の言葉を伝えました。

「お二人は、ご兄妹だったのですね」

言われて見ると、そこはかとなく風貌が似ている感じがしました。

「はい……不肖の妹、です。昔から言うことを聞かないじゃじゃ馬で、気ばかりが強くて……」

これまでも、それなりの苦労があったのでしょう。

苦笑しながら答える彼の顔を見ていたら、それが想像できてしまいました。

「そんな……とても正義感のある素敵なお嬢さんだと思います」

「あまり褒めてやらないでください。調子に乗りますから」

真面目で冷静――でも、それ以上に優しいお兄さんなのでしょう。

ルードさんの目元に出来たクマを見れば、今日まで必死にウィスさんを捜索していたことが窺えます。

「ちなみにルードも伝説のパーティーのファンなんですよ！　ね？」

「余計なことは言わなくていい！」

ポンと、掌で軽く妹さんの頭を叩くお兄さん。

本当に仲の良いご兄妹のようです。

それを見て、私は少し悩んでいました。

（……彼女が魔物に犯されていたという事情。その記憶を消したことについて、ルードさんに伝えておくべきか？）

ウィスさんに記憶の混乱は見られない。

仲間たちとの記憶も明確に残っていて、失ったのは魔物に犯されていた直近の記憶のみ。

今のところはなんの支障もない。

（……ですがこの先、万一……何か起こるかもしれない。身近でウィスさんを支えられる家族にだけは、事実を伝えておくべき……でしょうか？）

悩んだ末に、私はルードさんに事実を伝えることに決めた。

※

深夜。

皆さんが寝静まった時間。

焚火の番を交代する時間に、私はルードさんに少し時間をいただきました。

そこでウィスさんに起こった事の顛末。

魔物に襲われ深い怪我と、消えることのない心の傷を負ったこと。

それに纏わる記憶を女神の奇跡により消し去ったことを伝えた。

「……直ぐに伝えられず申し訳ありません。そして、私の独断で記憶を消したことについても謝罪させてください」

私が頭を下げると、

「いえ……サリア様のお心遣いに感謝いたします」

話を黙って聞いていたルードさんが口を開いた。

「あなたがいなければウィスは命を失っていたでしょう。感謝することはあれど、謝られることなど何一つありませんよ」

戸惑いはあったのでしょう。

ですが、私の判断は正しかったと、ルードさんは背中を押してくださいました。

「聖女サリア……あなたの行動にその勇気に、俺は改めて感謝いたします。妹を救ってくださり、本当にありがとうございました。そして今後何が起ころうと、俺はあいつを守ります」

力強い眼差しを私に向け。

兄として家族として、ルードさんは強い誓いを立てたのでした。
この重荷を彼に背負わせてもいいのか。
私はずっと迷っていましたが、心の靄もすっかり晴れていました。
「何か困ったことがあれば、いつでも私を尋ねてください」
頷く彼を見てから、私はその場を立ち上がりました。
短い話の中で、家族の繋がり、強さ、愛情――その多くを実感させられる。
ルードさんとの会話は、そんな貴重な時間になったのでした。

※

ウィスさんたちとはここで別れることになる。
そう思っていたのですが、皆さんもウイーエまで同行してくださることになりました。
ウイーエにも大きな冒険者ギルドがある為、彼らは暫くそこを拠点に活動するということです。
道中が賑やかになったことで、リオくんは楽しそうでした。
この中では圧倒的に最年少ということで、皆さんに沢山可愛がってもらっていました。
休憩の時間には、ウィスさんやルードさんに剣術を習っていました。
二人に剣術の筋がいいと褒められて、リオくんは喜んでいました。
ですが、それもそのはずです。
リオくんは、勇者メイルと闘神アムナムの二人に剣術指南してもらっているのです。

そして魔術を教えているのは、破邪ウォルと私の二人。
勿論、常にではなく、期間限定ではありますが、伝説のパーティーの四人から師事を受けたことがあるのです。
将来、リオくんがどんな大人になるのか。
（……どんな形であろうと、きっと大活躍に違いありませんね）
私は親馬鹿ながら、そんなことを思ってしまうのでした。

※

さらに時間は過ぎて――
「この町に来るのは随分、久しぶりですね」
衛兵の立つ大門を通った先には、立ち並ぶ露店と賑わう多くの人々が見えた。
そして賑わう人々のその先にで、吟遊詩人たちの奏でる詩とメロディーが響く。
「……音楽が聞こえる」
「はい。ここは音の都ですからね」
初めてこの町へ来るリオくんは驚いたようですが、ここがウイーエが音の都と言われる所以です。
朝も昼も夜も吟遊詩人たちの詩で賑わう音楽の町。
大陸で唯一の吟遊詩人の大学もあることから、演奏者の聖地とも言われています。
「サリア様……俺たちは一度、ここで失礼しようと思います」

そう言ってルードさんが足を止めました。

「ギルドにも顔を出しておきたいので！　ルードが救助依頼を他の冒険者にしててくれたみたいで、助かったことも周辺のギルドに伝達してもらわないと」

ウィスさんの捜索を今も続けてくれている冒険者がいるかもしれない。

それを考えれば、確かに直ぐにでもギルドに足を運ぶべきでしょう。

「わかりました。私とリオくんは観光しつつ、今日泊まる宿を探そうと思います」

軽い挨拶をして、私たちは別れて行動することになったのでした。

※

リオくんと共に露店を見回っていると、不意に彼が足を止めました。

「どうしたのですか？」

リオくんの視線の先を追うと、その露店には煌びやかなアクセサリーが並んでいました。

もう、こういうのに興味を持つ年頃になったのでしょうか？

「どうしたの？　まだ少年くらいの年齢の子には、こういうのは、ちょっと早いと思うけど」

露天商の女性が、リオくんのことを気にして声を掛けてくれました。

ちょっとした小物とはいえ大人向けの商品ばかりです。

「……これ、ください」

「え……」

リオくんが指し示した物を見て、私は思わず声を漏らしました。
彼の隣に立つ私を見て、店員さんは微笑ましそうに笑いました。
「あ～……そういう……わかった。このまま渡しちゃっていい？」
尋ねられてリオくんは頷きました。
そして鞄からお金を取り出して支払いを済ませました。
「毎度あり。きっと、喜んでくれると思うよ」
そう言って、女性は私にウィンクをしてきました。
「行こ。お姉ちゃん」
「は、はい……」
促されて少し先を歩いていくと、広場の噴水前に到着しました。
そこで、
「……お姉ちゃん、これ……プレゼント」
リオくんが差し出してきたのは『指輪』でした。
「今は……お小遣いを貯めて買ったものになっちゃうけど……もう少ししたら、ボクが稼いだお金でお姉ちゃんに本物の指輪を渡すから」
本物の指輪――リオくんが言っているそれは、結婚指輪ということで。
「だからそれまでは、これを……嵌めててほしい」
「リオくん……」
指輪とはその相手が、自身の物であるという証明。

これは、この小さな少年なりの強がりで、私を他の男に渡したくないと意地なのだと思います。

（……こんな物なくたって……私はリオくんの傍にずっといるのに……）

でも、そんな彼の想いを、私はとても嬉しく感じていました。

（……もう、立派な男性なのですね）

女を自分の物にしたい――そんな想いを行動で伝えるなんて、男らしいです。

「ありがとう、リオくん。嵌めてくれますか？」

「うん」

彼に左手を差し出すと、私の指を取って、左手の薬指に指を嵌めてくれました。

その瞬間、噴水が噴き上がり、私たちを祝福するように、鳩が飛び立っていきました。

「ありがとう、リオくん」

宝石は入っていない、見る人が見れば、安物の指輪。

だけど私にとっては、何よりも嬉しい宝物一つになったのでした。

「私も……何かプレゼントを返さなくてはいけませんね」

「お姉ちゃんには、いつもいっぱい沢山の物を貰ってるから大丈夫だよ」

言いながら、甘えるようにリオくんが私を抱き締めてきました。

これがお礼でいいよと、私に伝えるみたいに。

ただでさえ可愛いリオくんが、そんな優しいことを言ったら、まるで天使そのものと言っても過言ではありません。

そんな彼が、私は愛おしくてたまらなくなっていくのでした。

※

宿に到着して部屋を取ると、私たちは酒場へ向かいました。

そろそろ夕食を取ってもいい時間です。

酒場というと冒険者の交流の場というイメージを持つかもしれませんが、普通に飲食店としても利用できます。

それに音の都の酒場は吟遊詩人の詩を聞く場所としては最適なので、町の名物としても一度足を運んでおくといい場所なのです。

酒場の前に着くとリオくんが足を止めました。

「どうしましたか？」

「うん……ちょっと緊張するなって……」

初めて酒場に入るリオくんは、難しい面持ちを浮かべていました。

酒場に少し怖いイメージがあるのかもしれません。

「大丈夫ですよ。冒険者といっても荒っぽい人は……まぁ、少しはいるかもしれませんが、何かあっても私が守りますから。それに、この酒場は料理も美味しいと評判なんです」

「こ、怖いわけじゃないから！　それに、何かあっても、ボクがお姉ちゃんを守るから」

「ふふっ……なら安心ですね。行きましょうか」

リオくんが先に酒場へ足を踏み入れ、私はその後に続きました。

これから陽が落ちる時間ということもあって、まだ酒場はそれほど混雑していません。
が、数名ほど食事をしている人たちがいます。
酒場の中心に吟遊詩人が立って、穏やかな詩を奏でていました。
「あ、お客様入りました～。こちらの席にどうぞ～」
ウエイトレスの女の子が、端っこの席へ案内してくれました。
「メニューはこちらです。お決まりになりましたら呼んでくださいね～」
テキパキと説明を終えて、ウエイトレスさんは去っていきました。
「何をいただきましょうか？」
「う～ん……どれがおススメなんだろう？」
リオくんが悩んでいると。
「当店のおススメは兎のシチューとなります」
聞きつけたウエイトレスさんがさっと現れて、ぱっと紹介して、さっと去りました。
その瞬間、リオくんの肩にいた虹兎がブルブルと震え出しました。
「だ、大丈夫だよ。食べないからね」
慌ててリオくんがラビィを宥めました。
（……やはり人の言葉がわかるのでしょうか？）
というか、わかっているとしか思えません。
「でも、色々あってやっぱり悩んじゃうね」
「ならいくつか頼んで、分けて食べましょうか。それとラビィ用のニンジンも頼みましょう」

「うん！　店員さ～ん！」
リオくんがウエイトレスさんを呼び、私たちは料理を注文しました。
「は～い、承知いたしました。飲み物は先にお持ちしてよろしいですか？」
「お願いします」
「は～い。しっかしお客様、随分と珍しいペットを飼われてるんですね」
ウエイトレスさんが、リオくんの肩に乗る虹兎を見ながら言いました。
希少種である上に人には懐かないことで有名なので、目を引いたのでしょう。
そして私たちに顔を近付けて、
「悪いことは言いませんので、あまり連れ歩かないほうがいいですよ。この町にはその……コレクターの方も多くいらっしゃいますから」
こっそりと、ウエイトレスさんがそんなことを言いました。
「コレクター？」
と、疑問を口にしたのはリオくんです。
「珍しい物を集めている人のことですよ」
簡単にリオくんに説明する。
「この町のコレクターはお金にものを言わせて、なんでも手に入れようとするので、評判最悪なんです」
「あ～……それは確かに、厄介そうですね」
希少な物と見れば、絶対に手に入れようとする。

強欲で業が深い。そんな人たちが世の中にはいるのです。

「ぼ、ボクたちの家族だから、お金で売れるものじゃないから！」

「そうですね。命はお金で売り買いできる物であってはいけませんから」

私はリオくんの頭を撫でた。

彼の優しい心を称えるように。

「お二人の気持ちはわかりましたが、本当に注意してくださいね。お金がダメなら力尽くでなんてことをしてくるような奴らですからね。……さて、お節介が過ぎましたね。直ぐにお料理をお持ちしますので」

失礼しますと一礼して、ウエイトレスさんは去っていった。

「リオくん、町の中ではラビィのことは隠しておきましょう」

「でも、どこに？」

「窮屈かもしれませんが、バッグの中……とかでしょうか？」

「苦しくない、かな？」

「……ギリギリ、ですかね？」

ラビィに目を向けると、どことなく不満そうな顔をしている気がしました。

ですがこれも、ラビィを守る為。

「少しの間だけですから、我慢してくださいね」

「ごめんね、ラビィ……」

苦しくないように鞄を広げて、リオくんはラビィを中に入れました。

賢いラビィは、ちゃんと大人しくしてくれています。
トラブルを避ける為ということを、ちゃんとわかってくれているのでしょう。
「サリア様ぁ～！」
そうこうしていると、ウィスさんたちが酒場にやってきました。
食事の時間ということもあって、一緒になるかと思っていましたが、彼女たちの用事もちょうど終わったところなのでしょう。
「皆さんも食事ですか？」
「はい。ギルドへの報告も終わったので」
私の質問にルードさんが答えました。
「良ければあたしたちも、一緒にいいですか？」
「勿論です」
ウィスさんたちとテーブルを共にすることになりました。

※

皆さんと一緒に食事をしながら、私はこの町のコレクターに関しての情報を、ウィスさんたちに確認していました。
「……多分、シミット家のこと、だろうな」
すると、ルードさんは思い当たる情報があったようです。

彼の仲間たちも「ああ、悪名高いのはシミットだよな」とか「あいつの依頼は金だけはいいが……」とか、厄介そうに口にしている。

「シミット？」

「最近、名を売っている商人なんです。希少品コレクターってのも有名ですけど、色々な悪い噂がある男のようで……」

その色々な部分が気になりますが、関わり合いになる必要がないなら、なるべく関わり合いたくはない人種ということなのでしょう。

「……音の都も少し来ない間に、物騒になっているのですね」

「そうなったのも、シミットが頭角を現してきたここ数年ですよ。行方不明者なんかも増えてますからね」

「行方不明者？」

思っていた以上に物騒な言葉が飛び出したので、私は思わず聞き返していました。

「ギルドにも依頼があったんです。行方不明者の捜索……しかも、それは女性ばかりで……」

「女性の誘拐事件、ですか？　まさかとは思いますが……」

「シミットの仕業……なんて噂があります。でも確証はありませんが……」

真偽はともかく、悪評高い商人……というだけでも、疑われてしまうのは仕方ないでしょう。

人身売買――とくに若い女性は、闇市場などで高値で取引されると聞いたことがあります。

当然、そういったものは見つけ次第、取り潰されているのですが……いたちごっこになっているのも現状です。

（……少し調べてみてもいいかもしれませんね）

そんなことを思っていると、

「――よろしいですかな？」

酒場では珍しい老年の執事が私たちに話し掛けてきました。

背後には用心棒でしょうか？

数名の冒険者を引き連れていました。

「シミット家で執事をしておりますナハトと申します」

私たちが様子を窺っていると、老年の男性は自ら名乗り、その場で一礼しました。

（……まさかこのタイミングで、噂のシミット家が接触してくるなんて）

わざわざ私たちに話し掛けてきたということは、何か目的があるのでしょう。

（……もしかして、虹兎――ラビィのことを見られていたのかもしれませんね）

商人なら多くの情報網を持っていてもおかしくはない。

同じことを思ったのか、リオくんが私に目を向けてきました。

そしてリオくんは、ラビィを隠したバッグを大事そうに抱えました。

「突然お声掛けしておいてなんですが、単刀直入に用件を伝えさせていただきます。うちの主人は希少価値の高い物が好きでして……是非、あなた方が飼っている虹兎を売ってはいただけませんかな？」

言って執事の老人は、リオくんの抱えるバッグに目を向けました。

「だ、ダメ！」

焦ったように声を上げるリオくんは、その視線からラビィを守るように背を向けました。
私もその想いは同じです。
「申し訳ありませんが、それはできません」
「どうしても、ですかな？　お望みなら金額を用意できるとしても？」
「はい。ラビィは私たちの家族なのです」
「……ふむ……」
お金は関係ないことを伝えると、老人は顎に手を当て考え込むような仕草を見せました。
売ってもらえないことが意外だったのかもしれません。
背後にいる冒険者たちは、今にも襲い掛かってきそうな苛立ったような顔をしています。
重い空気が酒場に流れる中で、ウィスさんたちは、いつ戦闘になってもいいように周囲を警戒していました。
しかし、
「家族……ですか。それでは仕方ありませんね」
執事の老人は好々爺のような笑みを浮かべた。
先程までの重い雰囲気が一気に飛んで、空気が弛緩していく。
「よろしいの、ですか？」
「ええ……家族であればお金に代えることなどできないのは当然ですから」
なんだか拍子抜けしてしまう。
他に何か狙いがあるのではないかと疑いたくなるくら――

「ぁ……れ？」

ガタッと椅子の倒れる音が聞こえたかと思うと、隣に座っていたリオくんがよろめいて、私にもたれ掛かるように倒れ込みました。

彼だけではありません。

「さ、りあ……さま……」

ウィスさんも、ルードさんも、この場で一緒に食事をしていた皆さんが、全身の力を無くしたように、その場で力を失うように崩れ落ちていきました。

「皆さん――今直ぐに治療を……っ……」

魔術を使おうとした瞬間、突然視界が揺らぎました。

「ふむ……やっとあなたにも利いてきましたか」

「食材に、何か……入れたの、です、ね」

この酒場とシミット商会は繋がっていた。

だが、今更それに気付いても遅く。

「ご心配なく。身体に危害はありませんから。大切な希少品を傷付けるような真似はいたしませんよ。我が主人は……」

私の意識は闇の底に落ちて行った。

※

「ま……な……か？」

「……で……ござ……す」

何か声が聞こえた。

「は……め……な……」

その声で私はゆっくりと意識を覚醒させていきました。

「ぅ……っ……」

目を開くと、まだ頭が重く、意識が微睡んでいます。

そんな中で、

（……リオ、くんは……？　皆さんは……？）

まず心配になったのはリオくんのことでした。

でも、姿は見当たりません。

それから、少しずつ自分の状況を確かめていきました。

（……ここ、は……？）

広い部屋の一室。

しかも私は服を脱がされ、ベッドに寝かされていたようでした。

「お……目が覚めたみたいだな」

「そのようですね」

身なりの良い男の傍に立っていたのは、先程の執事の男――ナハトだ。

「では……私は一度、失礼します」

私が目を覚ましたのを確認して、ナハトは立ち去っていきました。

「わ、私に……何かした、のですか？」

「あん？　ああ……自分が犯されたのかを気にしてるのか？　流石は聖女様だ。身持ちは硬いらしい。安心しろよ、まだ味見すらしてない」

女性を下に見るような発言に苛立ちを感じながらも、私は薄笑いをする男から目を逸らすことだけはしませんでした。

「あなたは……？」

「オレはシミット。この辺りの商人たちを仕切ってる。あんたも聞いてるだろ？」

自信たっぷりな表情を見せながら、男は私の質問に答えました。

「……私たちを攫ったのは、あなたの命令、ですか？」

「そうだ。オレは希少品が好きでな……欲しいと思った物はなんでも手に入れたくなる」

「ラビィを……虹兎を手に入れる為に、誘拐事件まで起こすなんて……」

「虹兎？　ああ……そんな報告もあったな」

その口振りは、大して興味もなさそうでした。

何か別の目的があったのでしょうか？

「オレの狙いはあんただよ。聖女サリア」

「わた、し……？」

「そうだ。現代では希少種となったダークエルフ。それも極上の雌ときた。それも、魔王を倒した英雄の一人なんて肩書まで持ってんだから、置いときゃ男が上がるってもんだろ？」

言いながら、シミットは下卑た笑みを浮かべていました。

「……私がこのままあなたの傍にいるとでも？」

「その強気な顔、いいねぇ～。そそるじゃないの。安心しなよ。オレは奴隷商人としても、それなりに有名でね」

一歩一歩、私の反応を楽しむように、シミットが近付いてきました。

「ちゃんと従順な、男様の言うことをちゃんと聞く従順な奴隷に仕上げてやるよ」

女を物としてしか見ていない。

シミットは最低な下卑た目を、私に向けました。

「ほ～んと、いい身体してるわなぁ。特にその胸……どんだけ揉ませたら、そんなデカくなんだよ？あぁ……見てるだけでたまらなくなる。今直ぐにむしゃぶりつきたいくらいだ」

興奮した雄の眼差しを向けられ、背筋がゾッとした。

同時に今になって気付く。

なんとかこの場から逃げなければ……と、身体を動かそうとしたのですが。

「っ……身体、が……」

「おっと無理はしないほうがいいぞ。まだ食事に仕込んだ薬の効果が切れてないだろ。あれは特別性でね。麻痺に眠り、それとお楽しみの効果が混ざってるんだ」

「本当に下種のようですね。全てがあなたの思い通りにいくとは思わないことです！」

身体は動かなくても、魔術の使うことはできるはず。

シミットを拘束する魔術を発動する為、呪文を唱えようとした時でした。

「くっ……魔術が、集まらない？」
魔術を発動する為に集まっていた魔力が、一瞬で霧散してしまいました。
「無駄だよ。あの聖女相手に、何も対策してないと思うか？」
「っ……そんな……神よ……」
「お前の右腕に付けさせてもらったのは、腕輪は魔力解除（ディスペル）の腕輪だ。それをしてる間は一切、魔力を使うことはできない」
「コレクターというだけあって、厄介な魔道具をお持ちなのですね」
「ふふっ……そうだ。だが、それだけじゃないぜ。お前の左腕に付けたのは服従の腕輪と言ってな。その腕輪を装着させた相手の命令には絶対服従になる」
「そんな魔道具があるわけ……」
「どうかな？　これは魔族が作ったと聞く。オレも使ったことはなかったが……試してみるか？」
これから起こることを楽しむような下種な顔で、シミットは笑った。
だが、この程度のことで屈するわけにはいかない。
女を玩具のようにしか思っていない男を、私は睨み返した。
すると苦笑するように私の怒りを受け止めて、シミットはふざけた命令を下した。
「命令だ……この場でオナニーしてみろ」
「そんなことするわけが……あっ……っ……ぅぅ……手が、勝手……に……」
私の意志を無視するように、局部に手が伸びていきました。
そして、うっすらと湿った蕾に手を添えて、優しく擦り始めたのです。

「ふはははははっ……どうやら効果は証明されたらしいな」

「ぐっ……そ、そん、な……っ……」

どう拒絶しようとも、花弁を弄る手を止めることはできませんでした。

湿った花弁からは徐々に蜜が漏れて、淫靡な音を奏でていきました。

「ひゃっははははっ……いい音を鳴らすじゃないか。聖女と言っても所詮は女――一皮剥けば、ただの雌ってわけだ」

「う……ぐぅ……っ～～……ぅっ……」

せめてのもの抵抗に、必死で唇を噛み締め、喘ぎ声を漏らすことだけは我慢する私を見て、男は見世物でも見るようにパチパチと拍手をします。

「どこまで堪えられるか、見せてもらおうか」

「こ、こんなの……全然、気持ちよく、なんて……」

私の拒絶したい想いとは裏腹に、クチュクチュクチュクチュクュ――花弁を擦っているだけなのに、指に絡んだ蜜がより甘美な音を立てていきました。

「気持ちよくないという割には、ベッドが濡れてきてるじゃないか。淫乱聖女様」

「だ、誰が……淫乱、ですか――んっ……」

「おっ、今甘い声が出たか？」

「そんな声、出てない。あなたに見られて、不快なだけ、です……」

本当に嫌悪感しかない。

裸を見られるだけでも最悪なのに、自慰行為まで見られてしまっている。

（……ああ、リオくん、ごめんなさい）

私はあなたのもの、なのに……こんな男に醜態を晒してしまうなんて……本当に許してください。

ですが、今を凌げれば……魔道具の効果もずっと続くわけじゃない。

その時こそ反撃の機会が――

「ん……？　おい、一度止めろ」

男が何かに気付いたように声を上げました。

そして、私は命令に従い、自慰行為を止めました。

「お前……結婚してないはずだな？」

「な、なぜそんなことを……？」

「その指輪はなんだ？」

シミットは、私の左手の薬指に嵌められた指輪に気付いたようでした。

「こ、これは……」

「ほう……強い動揺が見られる。よほど大切な物、ということか？」

「っ……」

「壊して、しまおうか？」

動揺する私の耳に、信じられない言葉が聞こえました。

一歩、また一歩と私に近付いて、手を伸ばせば触れられる距離まできました。

そしてシミットの手が私の指輪に伸びてきました。

「な、何をするのですか？」

「この指輪を外して、破壊してしまおうかと」
「や、やめてください！　そ、それだけは……」
「ほう……それほど大切な物なのか？」
「……お、お願いします。この指輪だけは……」
こんな男に懇願などしたくはない。
でも、これはリオくんが私の為だけに買ってくれた指輪なのです。
絶対に壊されたくなんてない。
私たち二人の絆なのですから。
「ふむ……そうか。なら、もっとオレに大して従順になると誓うか？」
「そ、それは……」
「そうか。イヤだと言うなら構わないぞ。その指輪を――」
「ま、待ってください……誓います。誓います、から……どうか」
心がぐしゃぐしゃになりながら、私は考える。
今に、自身にとっての最善を。
「なら答えろ。その指輪は誰から貰ったものだ？」
「……これは私が保護した……リオという少年から貰ったもので……」
「保護？　……ああ、一緒にいたガキのことか。報告は受けてる」
「り、リオくんは無事なのですか⁉　他の皆さんは⁉」
「安心しろ。今のところ手は出してない。あんたに対してのカードになると思ってたからな」

それを聞いて、心の中に安心感が広がっていく。

（……よかった。皆さんも無事なら、必ず活路は開ける）

同時に希望が広がっていきました。

「言っておくが、あんたの態度次第じゃ、どうなるかわからないぜ？」

安堵の表情が顔に出ていたのか、シミットは私の思考を読み取るような発言をしてきました。

「わ、わかって、います」

「いいね。さっきに比べて随分と素直になった。やっぱり腕輪で強制するんじゃ面白いくねえからな。そんな物使わなくても、従順な雌のほうが可愛いぜ？　だからそうなってもらう為にも、しっかりと調教してやらねえとな。まずは主である俺に、挨拶でもしてもらおうか」

「挨拶？　……何をすれば？」

「ご主人様への挨拶っつったらよぉ、三つ指ついて服従の土下座だろ」

シミットはニヤついた笑みを浮かべながら、想像よりも遥かに下賤な返答をしてきました。

「っ……そんなこと、あなたなんかに……」

「いいのか？　お前の仲間たちがどうなっても？　それに

こんな女性を蔑むことを当然とするような男を敬うような態度を、本来の私なら絶対にしたりはしません。

ですが、今私が逆らえばリオくんや、皆さんがどうなるかわからない。

「……わかり、ました。ですが、麻痺が残っていて身体がまだ動きづらいので……」

「言い訳は聞きたくねえ。さっさと床に跪け」

「……はい」

「はい、じゃねえだろ？　畏まりましたご主人様、だろ？」

「くっ……畏まり、ました。ご主人様……」

まだ痺れの残る身体で、ベッドを下りて私は立ち上がりました。

そして、ゆっくりと床に跪くと三つ指をついて、頭を下げました。

「……これで、よろしいでしょうか？」

「ははっ、聖女様の全裸土下座たぁ……いい物が見れた」

「くっ……な、ならもう……満足でしょう」

「なに言ってんだ。まだそのままでいろよ。動いたら……わかってるな？」

「……かしこまり、ました」

人質を取らているだけじゃなく、服従の腕輪と魔術解除の腕輪を装着。

さらに食事に混ぜられた薬の効果がまだ消えていない。

こんな絶体絶命の状態では逃げ出すこともできない。

（……でも、どこかでチャンスはあるはず。だから諦めてはダメ、です。リオくんのことは、私が必ず助けてあげますからね）

決して希望は捨てない。

土下座という情けない姿を見られていても、心だけは屈さない。

そう決心した時、カツカツと靴の音が聞こえた。

音の場所から、シミットが私の背後に回り込んでいくのがわかった。

「聖女さんよぉ～ケツの穴まで丸見えだぜ」
「っ……そ、そんなところ、見ないでください」
「あん？　今のオレに言ってんのか？　随分と反抗的な態度だな？」
「くっ……も、申し訳、ありません」
怒りから反抗心が出てしまいますが、今は従順なふりをしないと。
「さっきからケツ穴がひくっ、ひくっ、って動いてるぜ。見られて興奮してるのか？」
「ぅ……ご、ご主人様、お、お願いします。は、恥ずかしいことは、言わないで、ください」
「いいから聞けよ。しっかしダークエルフって言うと長寿のババアだと思ってたけどよ、随分と綺麗なマンコとケツじゃねえか」
自分でもまともに見たことのない場所を、最低の男に見られている。
そう思うだけで吐き気がしてしまいそうだった。
「マンコにも、ケツにも、毛が生えてねえんだな。パイパンって奴か。剃ってんのか？」
「……わ、私は、特にそういったことは……」
「へぇ……エルフ属は人間と比べると毛が生えねえのか……永遠に誓い時を生き、永遠の美を持つ……神や妖精に誓い存在」
エルフ族は確かに、年老いても見た目は大きく変わりません。
「それをオレ色に染められると思うとたまらないねぇ。どう汚していくかを考えただけで、はちきれそうなほど、勃起しちまうよ」
男がどれほど勃起をしているか。

土下座という最悪の態勢をしているけど、顔を伏せているので、それを見なくて済むのだけは幸運だと思ってしまいました。

「……マンコもケツも随分と綺麗だな。全然使われてる感じがねぇ」

性器に男の息が掛かって、気持ち悪さでお尻が震えてしまいました。

男の顔はどうやら、私の性器に近い位置にあるようです。

「おい、褒めてやってんだぜ」

「あ、ありがとう、ございます」

「……処女、ってわけじゃねえよな？　経験人数は？」

「……」

「ご主人様が聞いてんだぞ？」

「ひ、一人、です」

「ほぉ……それは、お前が保護してるっていうガキか？」

「……は、い」

「はははははっ、お前、自分が保護してるガキを抱いてんのか。変態聖女様じゃねえか！」

大笑いしながら、私の心を追い込むように、下卑た発言をしてきました。

「……あ、愛する者同士の行為を……変態などと……」

「口答えか？」

「っ……もうし、わけ……ありま、せん」

「ま、いいか。今日中にあんなガキのちんぽの味は忘れさせてやるよ」

言いながら、

「んっ……な、なにを……こ、この冷たい、ものは……？」

シミットが私に何かを掛けてきました。

ヌルっとして、ジメジメとしたそれは……まるでスライムのように肌に張り付いてきます。

「これは、ラフレシアって魔物から取れる花の蜜なんだが……」

「ら、ラフレシアの蜜⁉」

「お、流石は伝説のパーティーの聖女様。ラフレシアの蜜の媚薬効果を知ってるか」

ただ媚薬効果ではない。

魔物の中でも最も人を狂わせる媚薬。

身体――それももし性器にでもそれを塗られれば、理性が弾け飛び獣のように死ぬまで交尾を繰り返すことになるとまで言われています。

「や、やめてください。そ、そんな物を身体に塗られたら、わ、私は……」

「安心しろ。ギリギリ人間でいられるくらいには薄めてある。まぁ、それでも、セックスしたくてしたくて仕方なくなっちまうだろうけどな！」

可笑しくて仕方ないという声で、シミットはビチャピチャピチャとラフレシアの蜜を一気に身体に振りかけました。

「あっ……あぁ……あああっ……」

たったそれだけのことで、私の身体は一気に熱くなり、明らかに異常な昂りを感じてきてきまいました。

「はぁ……ああっ……ああっ……ぐっ……うううっ……」

ギリギリ理性を残っていても、私の腰はガクガクと動いてしまって、土下座したまま床にくっ付く胸をその場で擦り付けていました。その快感だけで軽イキして、おまんこから熱い愛液が滴っていくのを感じています。

「ははっ、すげえ効果だろ？　今にもまん擦りしたくて仕方ねえよな？」

話ながら、衣擦れの音が聞こえてきました。

そして、シミットの足音が聞こえてきたかと思うと、土下座したままの私の頭の前で立ち止まりました。

「な、なに、を……」

快感に堪えながら、私は必死に声を搾り出しました。

「顔をあげろ」

命令に従うと、下半身を丸出しにして、私の目の前で剛直を勃起させたシミットの姿がありました。

「……ぁ……ぅ……」

酷い雄臭が充満して、嗅ぎたくもないのに、その香りが鼻孔を満たしてきました。

「顔を背けるんじゃねえよ。よく観察しろ。俺のちんぽはどうなってる？」

「そ、それは……」

「ちゃんと見て答えろよ」

目を背けることを禁止され、私はまじまじとリオくん以外の男性のおちんちんを観察しました。

「怖いくらい、太く、硬く、なっていて……血管がビクビクしてます」
「他には？」
「亀頭の、先っぽの穴が、パクパクして……カウパーが出て、います」
「お前を見て、こんなに興奮しちまったんだぜ？」
言いながら、硬くなった物を私に擦り付けようとしてきました。
反射的にそれを避けましたが、ラフレシアの蜜と薬で可笑しくなった身体は、重く自由がききません。
「わ、私の、せい……じゃ……」
「ったく、本当に強情な女だな」
「はぁ……あぁぁ……ふぅ……」
「そんなに興奮してる癖によ。これが……欲しくはねえのか？」
自信たっぷりに、シミットはおちんちんを見せつけてきました。
こうやって媚薬漬けにして、今まで多くの女性の人生を壊してきたのでしょう。
ですが、こんな強力な薬を使われて、絶望的な状況に追い込まれては、いつ心が折れて屈してしまっても責められることではありません。
悪いのはその女性たちではなく、この状況を作っているこの男。
「あっ……んんっ……」
「欲しいんだろ？」
さらに太く逞しくなる剛直を誇るように、シミットは言いました。

「欲しいって言うのなら、お前を犯してやってもいいんだぜ。このオレ様のちんぽでよぉ……お前を天国に連れってやるからよ」

その囁きはまるで、悪魔の取引のように甘く雌を誘惑してくるのです。

「素直になれよ、淫乱聖女様」

だけど、そんな悪魔の声を聞いた瞬間、私の頭の中にはリオくんの顔が浮かんできました。

「っ……そんなもの、いりません。直ぐにどけな、さい」

限界ギリギリの砕けてしまいそうな私の心を、リオくんが繋ぎとめてくれました。

「あん？　テメェ、よっぽどぶっ壊れてみてぇだな。状態を保ったままコレクションに加えたかったんだが、仕方ねえ。永遠にマン擦りが止まらなくなるような、もっと強い薬を使ってやるよ。ま、雌豚に堕ちようと、唯一無二のお前の価値は変わらねえさ」

男が持っていたもう一つの薬を、私に向けました。

ですが、その瞬間――室内を眩い光が満たしました。

「――お姉ちゃん！」

幻聴でしょうか？

その光の中から、リオくんの声が聞こえてきたのです。

「な、なんだ⁉」

シミットが戸惑っているのを見るに、これは彼が起こしたことではないようです。

「やあああっ！」

眩い光が消えぬ中で、叫ぶようなリオくんの声が響いた後、ダンッ！　と、強烈な打撃が叩き込

まれた音が聞こえました。

「……ぐおっ!?」

鈍い衝撃音の直後、シミットが吹き飛び、ドガアアアアアン――と壁に激突。

部屋に大きな振動が響き渡ったかと思うと、バタン――と、その場にシミットは崩れ落ちました。

どうやら、強烈な一撃を受けたようで、ピクリとも動かず、完全に気絶してしまったようです。

そして、眩い光が治まっていきました。

「リオくん……？」

視線の先にはリオくんが立っていました。

さっきのシミットを吹き飛ばした一撃は、リオくんの攻撃だったようです。

「お姉ちゃん！」

「ど、どう、して……リオくん……が？」

「転移石を使ったんだ」

それは私がリオくんに渡していた魔道具だった。

帰りたい場所を登録することで、一瞬でその場に移動できる特殊なアイテム。

でも、

「転移石で、どうやって、ここへ？」

「ボク、いつでもお姉ちゃんの傍に戻れるようにって……お姉ちゃんを座標に登録してたんだ。それで……」

「ここに、一瞬で飛べた、と……？」

「うん！」

力強くリオくんが頷きました。

人を座標に飛ぶというのは、今まで考えたこともありませんでした。

こんな使い方も出来るのですね。

リオくんが、私のことをいつも考えてくれていたからこそ思い付いたのかもしれません。

本当は直ぐにでも抱き締めて、頭をいっぱい撫でてあげたいですが、今は身体が自由に動きませんでした。

「ウィスさんたちが今、衛兵を呼んで来てくれてるから！　それに、ルードさんがギルドにも連絡してくれるって！　もう大丈夫だからね、お姉ちゃん」

「リオくんは、皆さんは身体は大丈夫、なのですか？」

「平気！　ラビィが助けてくれたんだ！」

「ラビィが？」

「うん……今は疲れて眠っちゃってるだけど、魔術か何かで、身体に掛かった状態異常を治してくれたみたい」

虹兎の持つ力の一つ、なのでしょうか？

希少種故に、まだ知られていない力を持っているのかもしれませんが、もしラビィのお陰で助かったのなら、本当にあの子は幸運を運んでくれたと言っても過言ではないように思います。

「とにかく、よかっ……んんっ……」

「お、お姉ちゃん⁉　どうしたの⁉」

「シミットに……ラフレシアの蜜を……媚薬を、使われてしまって……んっ……」

もう我慢、できません。

こんなに可愛い天使が、私を救いに来て、くれたのですから。

愛情が、愛おしさが溢れて、発情していた身体がより強く昂ってしまいました。

「ああっ……り、リオくん……お、お願い、します❤　わ、私の身体を慰めて、くだ、さい❤　も、もう我慢できないんですぅ❤　リオくんが、リオくんが欲しいんですぅ❤」

発情しきった身体をリオくんに見せつけるように、私は懇願しました。

「おねえ、ちゃん……うん、わかったよ。ボクがお今から、いっぱい愛してあげるからね」

強く決意した眼差しと、少年から男になった顔をリオくんは私に見せてくれました。

そんな彼の顔を見て、私はさらに強く発情してしまって……彼に手を伸ばしました。

（……今はリオくんがいっぱい欲しい。

リオくんはそれに応えるように、私の腕の中に入って顔が近付いてきました。

そして、私たちは唇を重ね合いました。

「んっ……リオくん……ちゅっ……ちゅうっ……ちゅうっ❤　はぁ……リオ、くぅん……ちゅうっ……はぁ……あむっ……んっ……ちゅるっ❤」

優しキスをしながら、直ぐに彼がいっぱい欲しくなってしまって、私は激しくリオくんを求めるように、彼の唇を強く吸っていきました。

「ちゅうっ❤　ちゅうぅぅっ❤　ちゅるるるっ……んんっ❤　もっとぉ……リオくぅん、もっといっぱいキス、してぇ❤　舌絡めて、もっと甘くて、エッチなキス、したいですぅ❤」

「うん、するよ……サリアお姉ちゃんのこと、キスだけでイかせるくらい激しいのするから」

男らしくリオくんは言い切って、私の唇を貪るみたいに吸い付いてきました。

リオくんのヌルっと舌が入ってきて、私の舌に絡みついてきます。

「あっ❤　ちゅるっ❤　ちゅるるるぅぅぅうっ❤　ちゅゅうぅぅぅう❤　あっ、んああっ❤　ちゅるっ、ちゅうううぅぅぅ❤　んっ❤　ふぅ……うっ……ちゅるるるるっ❤　ちゅうううぅっ❤　んんんんっ、ふぅ……ちゅるるるうっ……んっ、んんんんっ❤」

私を味わい尽くすようなねっとりとしたキスをされて、私の全身に痺れるような電流が走り、ゾクゾクと身体が震えてしまいました。

その快感に私は簡単に絶頂してしまいました。

一糸まとわぬ姿の私はキスで絶頂する証を隠すこともできず、お漏らしするみたいに床を濡らしてしまいました。

「あぁ❤　ああっ……はぁ……んあっ❤　リオ……くん、に……キスだけで、イかされちゃいましたぁ❤　こんなにエッチなキスが、出来るんですね、リオくんは❤」

昂っていた身体は絶頂してしまったことで、さらに強く発情してしまっていました。

「お姉ちゃんが気持ちよくしてほしいなら、ボク……もっとがんばるから」

ああ、そんな可愛いことを言われたら、そんな嬉しいことを言われてしまったら。

（……私はもっとリオくんが、欲しくなってしまいますぅぅ〜〜〜〜〜）

熱い吐息が止まりません。

もっと、リオくんに気持ちよくしてもらいたい。

そんな淫らになってしまった私は、自然とリオくんのあそこに目を向けてしまいました。

服の上からでも驚くくらい膨らんで、苦しそうにしていました。

「リオくん……今からその苦しそうにしているおちんちんを、出して上げますからね」

彼のズボンに手を掛けて、丁寧に下ろしていきました。

下着という一枚の布の向こうから、膨らんだおちんちんの熱と、香りが私の鼻孔を揺らしました。

「あぁ……あ〜……リオくんのちんぽ❤　リオちんぽの匂い❤　あぁ、こんな雄の匂いいっぱいさせて、こんなの嗅いでしまったら、私のおまんこ、バカになってしまいますぅ❤」

「おちんちん……直ぐにでも欲しいんだね」

頷き、興奮しながら私は下着を脱がしていきました。

生のリオくんちんぽが見えた瞬間、むわっとした雄の匂いが私の雌の本能を刺激しました。

「あっ❤　んあああああっ❤　ふぅ〜〜〜ふぅ〜〜〜んんんんんんっ❤」

あまりにも強い雄の香りと、それがリオくんから発せられるものだという事実に、私は再び絶頂してしまいました。

おまんこからぷしゅっ、ぷしゅっ……と、だらしなく潮を噴く音が響いています。

「お姉ちゃん……おちんちんの匂い嗅いだだけで、イっちゃったんだ」

下品な私の姿を見て、リオくんは嬉しそうに微笑みました。

「あぁ……リオくん、リオくぅん❤　わ、私ぃ……今、ここが、おまんこがバカになっちゃってるんですぅ❤　こ、これはぁ、わ、私じゃないん、ですぅ❤　く、薬のせい、でぇ……んっ❤」

リオくんが軽く腰を突き出すと、勃起したおちんちんが私の頬を突きました。

「あぁ……り、リオ、くん❤　そ、そんな頬におちんちん、当てちゃ……ああっ❤」

「お姉ちゃん……これ、おまんこに、欲しい？」

圧倒的な雄の強さを見せつけるような、私を弄ぶような感じで、何度も頬におちんちんを押し当ててきます。でも、こんな強靭なおちんぽを見せつけられたら、私はもう欲しがることしかできません。

「はい❤　リオくんのおちんぽ、欲しいですぅ❤　ここに、この濡れそぼった私のおまんこに、おちんちんください❤」

「いいよ、お姉ちゃん……そこに四つん這いになって……後ろから、思いっきり犯してあげる」

言われるままに、私は四つん這いになりました。

お尻も丸みえで、全部リオくんに見られてしまっています。

「ああ、こんな獣みたいな格好で……私、今からリオくんに犯されてしまうんですね❤　リオくん❤　私のここに、おちんちんくださぁい❤　いっぱい気持ちよくしてぇ❤」

「いくよ――お姉ちゃん」

優しい声と共に、極太のおちんちんが一気に挿入され、膣内の襞を掻き乱しながら子宮口にまで到達して、コン――と、奥に当たった瞬間、

「んっぼおおおぉぉぉ❤　おおおおっ❤　やっべぇえええっ❤　リオちんぽきたぁああっ❤　ふぅ、んぐうううっ❤　こ、これぇ❤　ゴリゴリまんこ削れてぇ❤　死ぬぅ❤　マジ、死ぬほどイってるぅぅぅう❤　おっ、んおおおっ❤　おっ❤　おっ❤　んっほおおおぉぉぉお❤」

言葉では言い表せないほどの幸福感すら覚えるような絶頂に全身が満たされていました。

ですが最高の絶頂は終わることなく、リオくんが腰を激しく動かし抽送を繰り返す度に、意識が飛ぶほどの快感が送り込まれてきました。

「おっ❤　おっ❤　おっ❤　んっぐぅ❤　やっべぇ❤　このちんぽぉ❤　リオちんぽぉ、マジ凶器いぃぃ❤　こ、こんなので犯されたら、お、女はイキ狂っちゃうぅ❤　ただ、まんこで靡くしかない雌になっちゃ――おおっ❤　んっごおおおおぉぉぉ❤　すっげぇ❤　マジ、イってるぅぅぅ❤」

可愛らしい吐息を吐きながら、リオくんが一生懸命ピストンしているのがわかります。

でも、そんな可愛らしさが信じられないくらい、極太ちんぽは女を悦ばす兵器のようでした。

「お姉ちゃんのおまんこ、さっきからすごく濡れてるぅ❤　おしっこみたいの、いっぱい出てるよ」

絶頂する度に、潮が噴き上がり、止まらなくなっていました。

いっぱいリオくんを汚してしまっています。

「ご、ごめんなさい❤　イ、イクの止まらないバカまんこに、なっちゃってるんですぅ❤　んおおおおおっ❤　これぇ、エルフまんこ死ぬぅ❤　敏感まんこになりすぎてぇ、イキ殺されちゃうぅ❤」

「いっぱい、感じて、お姉ちゃん、お姉ちゃん！」

抽送がさらに加速して、たまにリズムを変えて、掻き回すように私を犯してきます。

「おっ❤　おおおっ❤　んっ――あああああっ、んっぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅ❤」

今、気持ちいいところを、リオくんのカリ高ちんぽが削っていきました。

私が感じたのを彼は見逃さなかったのでしょう。

「おっほぉ❤　んっぐぅ❤　やっぱっ❤　リオくん、そ、しょこぉ、らめえええぇぇっ❤」

何度も何度も集中的に、そこをカリで擦り削ってきました。

「おおおおっ❤　い、今のとこ、んっぐぅぅぅぅう❤　やばやばやばやばぁっ❤　そ、こぉ❤　削られる度に、まんこ、やべぇことになってるぅ❤　リオくんに弱点見つけられちゃったぁ❤」

私がどこを感じるのか、より感じられる場所はないのかを、リオくんは動きながら探っているようでした。

「ここが、お姉ちゃんの弱点なんだね。なら――」

私の耳元で「もっと気持ちよくしてあげる」とリオくんが囁いてきました。

そのゾクっとするような無声音に、私の脳がクラっと揺れてしまって、同時に彼は膣内を掻き回してきました。

「おっ、んっおおおおおおおおおぉぉぉぉお❤　すっげぇのきたあぁぁぁ❤　リオくんのちんぽでグリグリされながら、ピストンガン突きされたら――おっ❤　おっごおおおお❤　んっ❤　あああっ、ぐぅぅぅぅぅぅ、だ、ダメぇ……何か、何か出ちゃう❤　普段と違う何か、出ちゃうぅぅぅ❤」

潮を噴き上げるのとは違う感覚――でも、間違いない絶頂を覚えながら、私のおまんこから何かが噴き上がりました。

ぴゅ～～～～～～～っと、それが暫く出続ける中でも、リオくんの動きは止まりません。

「おっ❤　んおおおおおっ❤　だ、めぇ❤　リオくん、と、止まってぇ❤　今、やっべぇ絶頂きてるからぁ❤　死ぬぅぅぅう❤　マジ、イってるのぉ❤　ほんとにやばいですからぁ、だからぁ、一回止まっ――」

「ダメだよ。お姉ちゃんのおまんこ、もっと気持ちよくなりたいって、ボクを締め付けてきてるんだから。こっちに、してあげる」

言ってリオくんは、私を犯しながらさらに手を蕾の突起に伸ばしました。

「そ、そこは――んっ❤　おっごぉおおおおおおっ❤」

「お姉ちゃん、クリちゃんでイキ死んで❤」

リオくんからの絶頂死刑宣告を受けて、私は身も心もふわふわと浮かんでいくような感覚に浸ってしまいました。

「おっ、んおおおっ❤　クリだめぇえええっ❤　おまんこ犯されながら、クリ責めされて、堪えられる雌なんていな――おおおっ❤　狂うぅぅぅぅ❤　マジ狂ってるぅぅぅ❤　イくの止まらないバカまんこになっちゃいますからぁ、おっほおおおおおっ❤」

その幸福な感覚とは別に、確かに身体は絶望すらも感じさせる絶頂が襲ってきたのです。

「なっちゃって、いいよ。お姉ちゃんが、どんなバカまんこになっちゃっても、いきっぱなしのダメ聖女様になっても、ボクがちゃ～んと、可愛がってあげるから」

「あっ❤　ああっ❤　り、リオくん、ってば、そ、そんな嬉しいこと言われたら、わ、私……おおおおっ❤　た、ただでさえ、イキ癖付いちゃってるのに、またイク、まんこぉおおおイクぅぅぅぅぅ❤　おっ、んおおおおおおっ❤　おっほおおぉお❤　リオちんぽに、ぶっ壊れちゃうぅぅっ❤」

擦られながら、クリトリスが怖いくらい勃起しているのがわかりました。

完全に剥けてしまって花弁から開花していました。

これは快感が頂点に達した証です。

「お姉ちゃんのおまんこ、もっと壊してあげるね」

「んおおおっ❤　そ、そんな強く引っ張ったら、クリちゃん壊れちゃいますぅ❤　お、おまんこも

うぶっ壊れてるからぁ、リオくん、こ、これ以上、こわしちゃらめれすぅぅう、んっ、んっふぅう
うううううううぅぅぅ❤　おっ、ほっ、ほっ、ほっおおおおおっ❤」

脳に響いてきそうなほど強いガン突きピストンと、クリトリスが取れてしまうんじゃないかというほど指で引き上げる刺激に、私は視界が真っ白に飛んでしまいました。

でも、より強い快感がきた瞬間、飛び掛けた意識は再び戻って、私を快感で蹂躙していくのです。

「おっおっおっおっおっおっ❤　リオくんとのセックスやっべええ❤　え、エルフでも、知らない❤　こんなすごいテクニックぅぅ❤　雌堕ちさせられてるぅ❤　リオくんだけのおまんこ雌ぅぅぅ❤　いっぱい愛してもらえて幸せですぅ❤　おっ、おっほぉぉっ❤　おおおおぉぉぉんっ❤」

リオくんのおちんぽの味を、私のおまんこは完全に覚えていました。

だから、もうこれなしじゃ生きていけません。

他のおちんぽじゃ、絶対こんな快感を与えてくれない。

ううん、おちんぽだけじゃダメ。

リオくんへの愛情が、この大好きな気持ちもあるから、だからこのリオちんぽ、私はすごく気持ちよく感じちゃうんですから。

「おっ、んおおおおっ❤　り、リオ、くぅぅうん❤　あっ、な、膣内で、リオくんのちんぽが膨らんできてるぅぅぅ❤　い、イクん、ですか？　おちんぽ、イっちゃうんですかぁ？」

「んっ……ふぅ……お姉ちゃん、射精す、よ」

どうやら、リオくんもそろそろ限界のようです。

高速ピストンがさらに加速して、私のまんこを完全に蹂躙していきます。

「おっおおおおっ❤　リオちんぽが、わたしのまんこ屈服させにきたあぁぁぁっ❤　おっ、んおおおおおおぉぉおっ❤　やっべぇ❤　これぇ❤　服従しちゃうぅ❤　リオくんちんぽに、完全に雌にされて、んんっ❤　り、リオくんのちんぽでぇ、孕みたい、孕みたいって子宮が叫んじゃってるのぉ❤　おっおおおおおおおっ❤　おちんぽ汁ぅ❤　赤ちゃんの孕み汁、私にくださぁい❤」

膣内に射精してほしいと、心も身体も私の全部が懇願してしまました。

膣内の襞全部が、リオくんのおちんぽに絡みついていくのがわかります。

一滴でも多くの精液を搾り取って、確実に孕もうとしているのでしょう。

雌の本能が、強い雄の子を孕みたいと言っているのです。

「お姉ちゃん、膣内に、出すよ」

「は、はい❤　ください❤　いっぱいください❤　さっきから、まんこきゅんきゅんして、孕みたいって想いが止まらないんですぅ❤　り、リオちんぽの子種で、私を孕ませてぇ❤」

リオくんの言葉を聞いて、おまんこがさらにぎゅうううぅぅぅっと、おちんぽ締め付けました。

「おっおっおっおっおっおっ❤　イクぅ❤　イクイクイクイク❤　これぇぇぇマジで、ぶっ飛ぶようなやっべぇぇぇぇのおおおおきちゃってるぅぅぅぅっ❤　んっぐぅぅぅぅぅぅぅぅっおおおおおおおおおおおっ❤　イクイクイクイクイク、イッグウウウウウウウウウウウウッ❤」

セックスの獣と化したような淫乱な咆哮を上げ、私は死を感じさせるほどの限界ギリギリの絶頂を味わっていました。

イきすぎて、全身が性感帯になってしまったような錯覚。

絶頂と絶頂が重なり合う強烈な快感を身に受けながら、私はリオくんの熱い射精を確かに膣内で

感じていました。

「ぁ……ぁ……ぁぁ……ぁ……」

楽園に辿り着いた錯覚するほどの最高の快楽を味わって、今はただ震えることしかできません。

（……ああ、これぇ❤　絶対、孕み、ましたぁ❤）

エルフ族は孕みづらいと言いますが、今もドクドクと流れ込む大量の精液が、私の卵子に着床したのを感じました。

まだまだ子供だと思っていたリオくんが、こんなに雌を狂わせる立派な雄になっていた。

（……もう絶対に子供扱いはできませんね）

少なくとも、雌としておまんこはリオくんに完全に服従してしまいました。

「おねえ、ちゃん……だいじょう、ぶ？」

こんなに射精しているのに、リオくんの勃起はまだ治まっていません。

まだしたい。まだしたい。と、私の膣内で震えて訴えているようでした。

「ぁ……ああっ❤　リオ、くぅん❤　まだ、出したいの、ですかぁ？」

「ぇ……そ、それ、は……」

「い、いいです、よ❤　もっと私の膣内に、出して、ください❤　私を、お姉ちゃんを完全に孕ませて、ママにして❤」

「おねえ、ちゃん……んっ……」

おちんちんは抜かずに体位を変えて、正常位で私はリオくんと愛し合いました。

「ちゅっ❤　ちゅううっ❤」

絶頂を繰り返したことで、互いに少し落ち着いたのか、優しいキスを繰り返しました。

「ちゅうっ❤　ちゅ❤　ちゅうっ❤　……リオくん、動いて、いいですよ❤」

私はリオくんを抱き締めて、耳元で囁きました。

すると雄としての本能が刺激されたのか、

「おっ❤　おおおっ❤　んおおっ❤　お、おちんちん、全然衰えない❤　さっきよりも、硬くなってて、おっ、ほおおぉぉ❤　敏感まんこに、熱いおちんぽ、きっくううううぅぅぅぅ❤」

リオくんの勃起していたおちんちんは膣内でさらに膨らみ、私の膣内を突きました。

火傷しそうなほどの熱を帯びて、私の膣内を掻き乱してきます。

「おっ❤　おっ❤　んおおおおおおっ❤　まんこにきっくぅ❤　リオちんぽ、私に効きすぎて、クリティカルヒット止まんなぁい❤　イクぅ❤　やっぱり、またイっちゃうぅぅぅ❤　おちんぽクリティカルで、まんこ死ぬぅぅぅ❤」

ガンガンガン――勢いを増しながら、リオくんはピストンを加速させていきました。

さっき射精したばかりで、彼も敏感になっているはずなのに、それを全く感じさせません。

また私をイキ狂わせ、そして何度でも孕ませようとしている。

それは怖いほどに伝わりました。

「んおおおおっ❤　こ、こんな雌殺しちんぽ持ってるなんてぇ❤　リオ、くんがぁぁ、こんなおちんぽモンスターだったなんてぇ❤　し、しらにゃかったぁ❤　んおおおっ❤　わ、私の弱点突きまくってくるぅ❤　わ、私の知らない気持ちいとこ、いっぱい犯して、おっほおおおぉぉ❤」

ああ、知らない。

こんな快感、知らなかった。

リオくんとじゃないと、こんな気持ちのいいセックスは、絶対にできない。

「ああっ❤　リオちんぽ大好きぃ❤　こんなやっべぇ快感知っちゃったら、もう離れられない❤　んっ、おっおおぉぉおおお❤　こんなの喰らっちゃったら、まんこ壊れて、普通のセックスじゃいけなくなっちゃうぅぅぅ❤」

「大丈夫、だよ。お姉ちゃんのバカまんこが壊れちゃっても、ボクが、何度でも、何度でも、イかせてあげるか、らぁ」

グリグリと子宮口を押し広げるように、リオくんがおちんちんの先っぽを擦り付けてきました。

「んおおおおおっ❤　グリグリ、マジ、だめぇ❤　子宮、開いちゃうぅぅぅ❤　も、求めちゃうからぁ❤　リオちんぽの子種、求めちゃってるから、開かせないでぇええ❤　んおおおおっ❤」

ズン、ズンズン、グリグリッ、グイッ❤

「おっごおおぉぉぉ❤」

子宮口を推し開いて、おちんちんが、本来は入らない場所まで、入ってしまいました。

「おおおっ❤　は、入っちゃったぁ❤　子宮にぃ、お、おちんちんの先っぽがぁ❤　んおおおおおっ❤　ら、らめぇ❤　い、今動いちゃらめぇ❤　お、おまんこだけじゃなくて、子宮もバカにされるぅ❤　リオちんぽ確実に孕んじゃう苗床になっちゃうぅ❤　おっほおおおぉぉおおお❤」

私を確実に孕ませる為、リオくんはさらに奥へ、奥へとおちんぽを押し込み、さらに快感を与える為に、グリグリと擦り、引き抜き、さらに激しく突き掻き回して、私の膣内で犯していない場所なんてないというくらい、ぐちゃぐちゃにされてしていきます。

「おっ❤　おっごおおおおっ❤　子宮、犯されてるぅぅぅぅ❤　おまんこもぉぉお、もう完全に狂っちゃっててぇ、おっおっおっおっおっおっ❤　も、もうイきまくってるぅ❤　あっ、む、無理ぃ❤　これぇ、もう無理ぃ、絶対意識飛ぶぅ❤　これはガチやべぇやつだからぁ❤」

「いいよ。意識飛んじゃえ。気絶したままでも、お姉ちゃんのこと、犯しまくっちゃう、からぁ、確実に孕むまで、射精しまくっちゃう、からぁ」

一歩間違えれば婦女暴行でもおかしくない。

でも、そんなリオくんの言葉に、私の子宮はきゅんきゅんと興奮していました。

愛する人だからこそ、許される言葉。

雄に犯される幸せ。

雌であることの幸せを、リオくんは私にいっぱい感じさせてくれるのです。

「おっおっおっおっおっおっ❤　い、いいですよぉ❤　リオくん、絶対、孕ませてぇ、くださぁい❤　わ、わたしぃもぉ、リオくんをおおおっ、き、気持ちよく、いっぱい射精してもらえるように、おまんこぎゅっぎゅって、締め付けます、からぁ❤　おおおっ❤　やべ、やべぇ❤　おちんぽ、また熱くぅぅぅ速くなってえええっ、んっほおおおおおおおっ❤」

再びリオくんの射精が近付いてきたのでしょう。

今度はより奥に、子宮に直接、ぶっ掛けて、完全に私を自分のものにしようとしています。

雄として雌を独占する為のおまんこマーキング❤

ああ、リオくんの赤ちゃんを孕めると思うだけで、子宮が疼いてしまいますぅ❤

「おっ、おおおっ❤　おっほぉおお❤　ああっ❤　あたまぁぁ、バカになっれ、きっちゃったぁ❤

おおおおっ❤　か、快感、やっべぇ❤　やっべぇ❤　おっおっおっおっおっおっ、死ぬぅ❤　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬぅ、き、気持ちよくてぇえええマジ、ぶっ飛ぶぅぅぅぅぅっ❤」

「イクよ、お姉ちゃん、イク、よ」

「んっおおおっ、イグウウウウウ、リオきゅん、わらひもぉぉぉお、イッグ――イグイグイグギウギグイグ、んんんんんんんんんんんんっ❤　あ、あああっ、熱いのぉぉぉ子宮にぶっかかってぇぇ、おっ❤　おっごおおおおおおおおおおおっ❤」

意識が完全に真っ白になっていく。

絶頂は確かに感じているのに、鋭い快感が全身を貫くみたいに襲っているのに、それでも、もう目を明けていられない。

意識を保っていられない。

それほど、リオくんとのセックスがすごすぎて、私は……

（……ああ、リオくん❤　あなたとの赤ちゃん、孕みたい❤　わたしぃ、女で、雌に生まれてこれてぇ……しあわ、せぇ❤）

これまでに感じたことのないような、最高の幸せを感じながら意識を落としていくのでした。

※

そして……次に目を覚ました時には、私は宿屋のベッドの上でした。

「サリア様……大丈夫でしたか？」

「あ……ウィス、さん……」

目の前には心配そうな顔をしたウィスさん。

そして同じベッドの中では安らかな顔をしたリオくんが眠っています。

「ああ、全部……終わったのです」

「はい。もう大丈夫です。シミットは捕まりました。これでもうシミット商会はおしまいです」

ウィスさんの話では、シミットとその取り巻きは既に牢屋の中ということでした。

地下室には闇市に流されるはずだった奴隷候補の子供たちもいたということで、町は大騒ぎになっているということでした。

この証拠も有り、冒険者ギルド連合や、商会に反感を持っていた町長を始めとする町の人々の協力も得られたようです。

今後は多くの被害者が救済されていくことでしょう。

「これもリオのお陰ですね」

「ええ……今回はリオくんに助けられました」

「この若さでこれほどの力を秘めているのですから、将来が本当に楽しみですね」

「本当に……」

隣で安らかな顔をして眠る少年の頭を、私は優しく撫でました。

眠っている顔はこんなに可愛いのに、セックスはあんなにも凶悪なんて。

頭の中にはこれでもかというほどイかされた記憶が、今もこびり付いています。

ウィスさんの前なのに、考えているとまた発情してしまいそうです。

「……私はそろそろ行きますね。今日はゆっくりお休みください」

「ぁ……はい。ありがとう、ウィスさん」

私の感謝の言葉に再び一礼して、ウィスさんは部屋を出て行った。

それを見届けて、私はベッドへ倒れる。

身体はかなり疲弊していた。

主にリオくんとのセックスでの心地よい疲弊だ。

（……今日はこのまま……リオくんと一緒に眠ってしまおう）

いつもよりも安らかな気持ちで眠れる気がする。

いや、間違いなく眠れるはずだ。

「リオくん、おやすみなさい。それと、助けてくれてありがとう。本当に立派になりましたね」

ちゅっ――と、眠る彼の額にキスをする。

私の声は聞こえていないはずですが、満足そうな小さな戦士は優しい微笑みを浮かべて眠っていた。

そんな彼を暫く見つめながら、私もゆっくりと眠りについたのでした。

第四章　平穏な日常の幸せ

あれから一週間が過ぎて、私たちはすっかり日常の生活に戻っていました。
いつもと変わらず静かで安らぎに溢れた日常。
そして今日も、そんな朝を迎えていました。
「リオくん……起きてください」
こうして、寝坊助さんを起こすのも、いつもと変わらぬ平常運転です。
あ、いえ……変わったことと言えば、寝坊助さんが一匹増えたということでしょうか。
気持ちよさそうに眠っているのは、リオくんだけじゃなくて、ラビィもでした。
「もう……二人とも本当に朝が弱いのですね」
「ぁ……ぅ～……おねえ、ちゃん……」
「もう朝ですよ？　リオくん、おっきできますか？」
「起きる、よ……」
それでも前に比べれば、自立できているような気がします。
朝も起きるまでの時間が随分と早くなっていますからね。
そして、私たちは朝食を食べてから、それぞれの日課に移りました。
私は祈りを捧げながら、村人たちのから相談を受ける。
リオくんはお勉強をしたり、運動をしたり、日々の勉強に努める。
こんな日々を過ごしていると、平穏な何もない日常こそ素晴らしいと、改めて感じるのです。

※

夕飯を終えて日も暮れて。

私は読書をしながら夜の静寂を楽しんでいると、木の軋む音と共に、部屋の扉が開きました。

扉の隙間から姿を見せたのは私の可愛いリオくんでした。

「……どうしたのですか？」

「入ってもいい？」

「勿論ですよ、こちらへ」

甘えるように尋ねてくるリオくんに、私は手招きしました。

するとリオくんは嬉しそうに走ってきて、私の胸の中に飛び混んできて、ギギィとベッドが揺らしました。

「ふふっ、なんだか今日は甘えん坊さんですね」

「……今日はお姉ちゃんに甘えたい日なの」

「そんな日が定期的にやってくるのですか？　リオくんはまだまだ子供なんですね」

「こ、子供じゃないもん！　お、お姉ちゃんも寂しいかなって……」

照れながら必死に否定するリオくんが愛おしくなって、私は彼をぎゅっと抱き締めました。

「そうですね。少し寂しかったかもしれません。だからこうやって……リオくんを抱き枕にしちゃいます❤」

柔らかくて、温かいリオくんの感触に癒されていると、落ち着かないようにリオくんがもじもじし始めました。

「ふふっ……リオくん……勃起しちゃったんですね❤」

「ぅ……お、お姉ちゃんのおっぱいの感触が、気持ちよくて……」

「素直で可愛いですよ❤」

「それじゃあ、硬くなっちゃったおちんちん……い～っぱい、癒してあげますからね」

私はリオくんの服を脱がして、局部を露出させました。

「あぁ～～～……逞しいおちんちんですね❤」

雄の匂いを撒き散らしながら、はちきれそうなほど膨らんだ彼のものを見ると、私は怖いくらい興奮してしまいます。

「これぇ……こんなの見ちゃったら、女は雌に変わってしまいますぅ❤」

勃起ちんぽをシコシコと愛撫しながら、私は熱い吐息が漏れていました。

おまんこが発情して、熟した果実のように蜜が溢れてしまいます。

「っ……うぅ……お、お姉ちゃん、もっと強くして」

手コキの快感がもどかしいのか、リオくんは腰を突き出してきました。

「わかっています❤　これからも～っと気持ちよくしてあげますからね❤」

私は手コキをしながら、唇を真っ赤になった亀頭に近付けていきました。

「ちゅっ❤　ちゅっちゅっ❤」

「ぁ……ぅ～～～」

「愛しいリオくんへのご奉仕前に、おちんぽキスでご挨拶です❤」

「お、おねえ、ちゃん……ああっ、エッチ、だよぉ……」

「殿方の性器にキスをするのは、唇を重ねること以上の愛情表現なのですよ❤」

悶えるリオくんを身ながら、私は「だから……」と耳元で囁きました。

「もっとおちんぽキス、させてください❤」

ちゅっ❤　ちゅう❤　ちゅちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅうぅぅぅ❤

亀頭にも、竿にも、リオくんのおちんぽの中で、キスしていない場所はないと言えるくらい全ての場所に、私はおちんぽキスを繰り返しました。

その度にリオくんのおちんちんが、ビクン、ビクンと、ビクビクビクっと、快感で震えました。

「可愛いリオちんぽ❤　ちゅうっちゅっ❤　キスで、イっちゃえ❤　イっちゃえ❤　イ〜〜けっ❤　ちゅうぅぅぅぅぅっ❤」

最後は鈴口に吸い付くように長めのキスをすると、リオくんのおちんちんが脈打って、彼の切ない声と共に熱い精が噴き出しました。

「あっ❤　んあああっ❤　リオちんぽ、精液噴いたぁ❤　ああっ❤　すっごい量、出てるぅ❤　いっぱい、顔に掛かって、あああぁんっ❤　はぁ……ああっ、リオくんに、真っ白に染められちゃい、ましたぁ❤」

顔射され、雌を発情させる香りが鼻孔を支配していきます。

その雄臭さに、私は壊れるほどに発情していくのを感じました。

「ちんぽ、キスでイっちゃいましたね、リオくぅん❤　そんなに強い快感を与えているわけじゃな

いのに、本当に敏感おちんぽなんですねぇ❤」

「だ、だってぇ……お、お姉ちゃんが、ぼ、ボクのここに、キスしてくれてるって思うだけで……おちんちん、おかしくなっちゃって……」

恥ずかしそうに顔を顰めるリオくん。

「いっぱい、私で発情してくれた証拠……ですね❤　でも、おちんちんはもっとも～っと気持ちよくなりたいみたいです❤」

射精したはずなのに、リオくんのおちんぽは全く衰えることはありませんでした。

それどころか一度出したことで、さらに硬く太く熱く、反り立つように勃起しています。

「リオくんはそのまま楽にしていてください❤　今度はこれ❤」

修道服を脱ぎ、私は見せつけるように、胸部を揺らしました。

「おっぱいで、おちんぽ壊れちゃうくらい気持ちよくしてあげますからね❤」

胸に視線が釘付けになって、リオくんは期待に目を輝かせていました。

私はそれに応えるように、直ぐに極太ちんぽを大きな二つの果実で挟み込みました。

「ぁ……はぁ……」

「気持ちいい、ですか？」

女の子みたいな高い喘ぎ声を漏らすリオくんを見ながら、私はゆ～っくりとおっぱいを動かし始めました。

「さっき射精した、リオ、くんの真っ白いのがぁ……潤滑油になってぇ……おちんぽ、い～っぱい滑っちゃいますね❤　ほら、擦り❤擦り❤擦り❤擦～り❤擦り❤　もっと、もっと感じちゃ、え❤」

グチュ、くちゅん、ぐちゅぐちゅ、クチュン❤

胸の中で扱く度に、ねちゃねちゃした精液がおっぱいとおちんちんと絡み合う音が響きました。

先程よりも雄臭い匂いが部屋に充満して、私の身体はさらに昂っていきました。

「ほぉら❤　ほぉらぁ～❤　いっぱい気持ちよく、なっちゃえ❤　敏感リオちんぽ❤　いっぱいビュッビュッてし・ちゃ・え❤」

ゆっくりと動かしていたおっぱいを、私は加速させました。

さっきよりも、もっとリオくんを感じさせて、その精を搾り取る為に。

すると切なそうな顔で、甘い声をリオくんは奏でました。

「あぁ～可愛いですよぉリオくん❤　もっといっぱい、鳴いちゃえ❤　鳴いちゃえ❤　雌を発情させるエッチな声、いっぱい出しながら、おちんぽ射精も、いっぱいしちゃえ❤」

でも、リオくんにも男として意地があるのか、イかないように必死に堪えているようでした。

今にも爆発してしまいそうなくらい、おちんぽを熱く膨らませているのに、です。

でも、男性にとってはこんな風に意地を張ることも、きっと必要なことなんですよね。

だけどそんなに我慢しても、身体が辛いだけです。

「パイズリ射精を必死に堪えてるリオくんにご褒美をあげますね❤」

私は一度、パイズリを止めました。

するとリオくんはもどかしそうに唇を噛んで、「なんで止めちゃうの？」という顔で私を見ました。

そんなリオくんを見て私は――リオくんの胸に手を伸ばして、クリクリッ❤　と、乳首責めをし

てあげました。

それはきっと、リオくんにとっては予想もしない不意打ちの快感だったのでしょう。

乳首責めを受けた瞬間、暴発するみたいにリオくんのおちんぽが射精していました。

腰をブルブル震わせながら、おちんぽを痙攣させました。

止まらない射精の快感にリオくんは目を見開き、お魚みたいに口をパクパクさせながら、必死に呼吸を求めています。

「乳首、思っていたよりも弱いみたいですね❤　クリクリ❤　く～りくり❤　残ってる精子も、ぜ～んぶ、出しちゃえ❤」

乳首を掻き毟るように爪で擦って上げると、残っていた精子がピュッとおちんぽから漏れ出しました。

「ふふっ❤　リオくん、こ～んなに雌を狂わせる凶悪なおちんぽを持ってるのに、本当に敏感なんですね❤　乳首で簡単にイっちゃうなんて❤」

「こ、これはぁ……お姉ちゃんが、急におっぱい、触る……からぁ」

「そうですね❤　お姉ちゃんがぜ～んぶ悪いんですよ。でも、どんなにリオくんのおちんぽが敏感になっちゃっても、ず～っとあなたのことが大好きですから❤　だからリオくんの感じる場所、もっといっぱい見つけてあげますね❤」

少し落ち着いてきたおちんぽが、私に囁かれるだけで、再び硬さを取り戻していきました。

「まだまだ、したいみたいですね❤　じゃあ次は……パイズリフェラ、しちゃいましょうか❤」

もう一度、私はおっぱいでリオくんのおちんぽをぎゅ～～～～っと、挟み込みました。

ゴシゴシ❤　ゴシゴシ❤　と、精子の絡んだおっぱいで、おちんちんを磨くように抽送しながら、

「ぺろっ……れろっ❤　あんっ、リオくん、大人しくして、ください」

先っぽを舐めると、鋭い快感が走ったのかリオくんがおちんちんを暴れさせました。

おっぱいから零れ落ちてしまいそうになる極太の肉棒に、私はぎゅう〜〜〜っと乳圧を掛けていきます。

「これでもう逃がしませんよ。んっ……ぺろぺろっ❤　ぺろれろっ❤　はぁ……れろっ❤」

パイズリフェラの再開です。

胸で扱かれる快感に痺れながら、舌で亀頭を舐められる刺激。

二つの攻撃を一斉に局部に浴びせられて、リオくんは辛そうに目を強く閉じていました。

「我慢強いですね、リオくん❤　ぺろっ❤　ぺろっ❤　れろっ……んっ……ちゅろっ……はぁ……んんっ❤　ぺろれろっ❤　射精……れろっ❤　我慢できて、偉いですね❤　くちゅっ……よし、よし❤　ぺろっ、れろぺろっ❤」

この快感をもっと味わいたいと、リオくんはきっと思っているのでしょう。

だから、そんな彼の要望に応えて、もっと激しくパイズリフェラで感じさせちゃいます。

ベッドが、ガタガタギシギシと激しく揺れ軋むほど、私はリオくんの逞しく雄臭いおちんぽに奉仕を始めました。

「れろっ❤　ぺろぺろっ❤　くちゅっ、くちゅくちゅっ❤　ちろちろっちゅろっ❤　はぁ……ああっ❤　まだぁ、リオくんのおちんちん、大きくなってくぅ❤　おっぱい間から、先っぽ完全に顔を出しちゃってますね❤」

こんな凶暴な女殺しの武器のような物が、私の中に入っている。

その事実に私は身体の昂りが抑えきれなくなって、自然とその凶悪なおちんぽを求めるように舐めしゃぶってしまいます。

「れろっ……あぁ……リオくぅん❤　出してぇ❤　ぺろぺろっ❤　ちろれろっ❤　ぴしゃぴちゅ……私の顔にいっぱい発情止まんなくなっちゃうくらい、雄臭いの出してぇ❤」

血管が熱く脈打ち、おちんぽが射精しそうになっているのを、私は感じていました。

リオくん自身も、自分が限界なのがわかっているのでしょう。

自分からも腰を動かして、さらに強い快楽を求めてきました。

私もそれに応えるように、おっぱいをさらに強く挟んで、真っ赤になった先っぽを舐め回しました。リオくんの精子と私の唾液で谷間はもうぐちゃぐちゃになっています。

「んっ❤　んんっ❤　ぺろぺろっ❤　れろっ、んっ❤　ふぅ……ぴちゃ、ぴちゃれろっ❤　リオくん、ここまでいっぱい我慢できましたね❤　もう、イっていいんですよ❤　イっけ❤　イっけ❤　ぺろぺろれろっ❤　ぺろぺろっちろっ――んっ、んあっ、ふっ、んんんんっ❤」

おちんちんが私の口元に押し付けられた瞬間、ビュウウウウウウウウウウぅぅぅぅぅ――と、溺れてしまいそうなほどの精が迸りました。

「あっ❤　んっ、ごくっ❤　ごくっ❤　んんっ❤　はぁ……リオくんの精子、すっごく濃いのぉ❤　ああっ❤　美味しい、です❤　いっぱい零れちゃって、もったいない、ですぅ❤　んっ❤」

顔に掛かってしまった分も全部、舐めてしまいたいくらいですが、あまりにもいっぱい溢れ出ていて、とてもじゃありませんが飲みきれなさそうです。

だからせめて、お口の中に入った精子だけは全部飲み干しました。

「あ～ん……みれくらはい、りほくぅ～ん❤」

お口をあ～んと開いて、全部飲みましたよ❤　という証拠を彼に見せつけました。

すると、大量の射精で萎え掛けていたリオくんのおちんちんが、また大きく膨らんできました。

まるで不死鳥のようにこのおちんちんは無限の精に溢れているのかもしれません。

「リオくん❤　今度は私のことを、気持ちよくしてもらっても、いいですか？」

私が尋ねると、小さく、でも確かにリオくんは頷きました。

「なら今日は騎乗位で――私が上になってい～っぱいご奉仕してあげますから、リオくんもがんばって、おちんちんで私を突いてくださいね❤」

そして、リオくんをベッドに寝かせたまま私は彼の身体の上に跨りました。

「いきます、よ❤　ゆっくり、ゆ～っくり……」

おちんちんを掴んで、しっかり狙いを定めてから、私は腰を落としていきました。

でも、

「んおっ❤　ちょ、り、リオく――んおおおおおおおおっ❤」

ゆっくと自分のペースで挿入するはずが、リオくんは私のお尻を掴んで一気に挿入してきました。

完全にペースを乱されて、予定外の快感に私は堪えきれるはずもなく、挿れられた瞬間、頭が真っ白になるような絶頂を味わったのです。

でも、そんな強烈な絶頂を感じている私のことなどお構いないように、リオくんは腰をグラインドさせて、私の気持ちいい場所を抉るように掻き回しながら、奥を突いてきました。

「おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっほぉ❤　り、リオくん、まっれぇ❤　イってる、わ、わらひ、もうイっちゃってるんですぅ❤　おっ❤　ほおおおおおおおおおおおおっ❤」

リオくんのお腹に潮を振り掛けながらも、私は自分の腰の動きを止めることができませんでした。

より強い快感を、壊れてしまいそうなほどの絶頂を。

味わったことのない興奮と昂奮を感じたい❤

そんな雌としての本能のままに、私は腰を振り続けました。

自分がどれほど下品に喘ごうとも、どんな淫乱な顔を見せたとしても、愛しいリオくんなら受け入れてくれる。そんな安心感が雌としての私の欲求をどこまでも引き出してくれるのです。

「んっごおおっ❤　やっべぇ❤　イきまくってるのに、潮とまんなぁい❤　リオくんのお腹に、水溜まり作っちゃってるぅ❤　おっ、んっほぉ❤　おおおおぉぉぉっ❤」

子宮がきゅんきゅんとちんぽを求めている。

私は、もうリオくんの赤ちゃんを孕んでいるのだろうか？

身体にまだ変化はない。

でも、セックスする度に、リオくんに孕まされたいって子宮が疼いちゃってる。

「響くぅ❤　リオちんぽぉ❤　子宮に響いちゃってるぅ❤　ガンガン子宮突かれて、その度に女の幸せ感じまくっちゃってのぉ❤　おっ、おっほおぉぉっ❤　んっぐうううううううっ❤　やっべぇ❤　マジ、たまんねぇ❤　このちんぽで犯されるのぉぉぉ、幸せしゅぎるのぉぉぉ❤」

女でよかったと全身が悦んでいる。

男性だったら、こんな快感、絶対に知らないままで終わっていた。

愛する人のおちんぽで愛される快楽。

心が多幸感で満たさていく。

これほどの充足を、リオくんが、おちんちんが与えてくれる。

媚びまんこがクチュクチュと嬉しい悲鳴を上げる中で、リオくんの手が私の胸に伸びてた。

そして、

「おおおおおおっ❤　んんっ❤　おおおっ❤　り、リオくん、急に乳首しちゃ、らめぇ❤　んおおおおっ❤　それ、マジやっべぇの❤　子宮犯されながらの乳首責め、女はそれされたらぁ、理性ぶっ飛んじゃう、からぁ❤　んおおおっ、ぉおおっ❤　おっごおおおおおおぉぉっ❤」

硬く勃起した乳首を、リオくんの手できゅっと抓られながら、コリコリされる度に、私は簡単にイってしまう。

愛液で、ぐちゅぐちゅになったおまんこから、潮噴きが止まらなくなっていた。

雄と雌の交った匂いが部屋に充満している。

その匂いがさらに私たちを狂わせていく。

もっとセックスを、身体を重ね合わせたい。

互いを貪り合って、溶け合ってしまいたい。

「おっ❤　おおおっ❤　乳首ぃ❤　き、きくうううぅぅう❤　ああっ❤　何度も、イってるのに、イくの止まんな――んおおっ❤　子宮口グリグリしちゃらめぇ❤　そ、そこぉ❤　こ、こじ開けようとしないでぇ❤」

リオくんの極太ちんぽが、あの時のシミット邸で私を犯した時みたいに、子宮口を抉ってきまし

た。

「はい、っちゃう❤　おちんちん、入っちゃうぅぅぅ❤　おっ❤　おおおっ❤　またぁ、リオちんぽがぁ、私を孕まそうとしてるぅぅぅ❤　んっ、ぐうううぅぅぅ❤」

子宮がリオくんのおちんちんを求めている。

きゅんきゅんとちんぽに媚びながら、早く入ってきてと嬌声を響かせていた。

おまんこが狂ってしまいそうな、いえ――もう狂ってしまっている中で、リオくんのもう片方の手が、私の花弁の肉芽に伸びてきました。

瞬間、

「んっ❤　おおっ――おっごおおおおおおおおおおおぉぉぉぉ❤　んっぐうううううううぅぅぅ❤」

ぷっくり膨らんだ肉芽を指で押し込まれ、さらに指で掻き毟られたのです。

その快感に全身が弛緩した私は子宮口が全開きになって、おちんちんの侵入を受け入れていました。その時の雌の悦びは歓喜という言葉では足りないほどの最大限の幸福でした。

「おっほぉ❤　んおおおっ❤　入ったぁ❤　子宮におちんぽきたぁ❤　これぇしゅきぃ❤　好きな人のちんぽでぇ❤　子宮まで犯されるの、マジやっべぇ❤　これ幸せしゅぎるのぉぉぉっ❤」

子宮を犯されながら、乳首を責められ、さらにクリトリスまで蹂躙される。

雌の弱点全てを責められながら、快感を受け入れることしかできない。

愛しい人にこんな愛情表現されたら、全ての雌は完堕ち確定に決まってます。

私も当然、リオくんへの想いが強く膨らんで、爆発してしまいそうでした。

「おっおっおっおっおぉぉぉぉぉ❤　ぶっ壊れるぅ❤　快感で死ぬぅ❤　心臓、ドキドキ爆発しちゃ

いそうで、おっおおおっ❤　おっごおおおおおぉぉぉぉぉ❤　おまんこ狂いながら、死ぬぅぅぅぅ❤快感でぶっ壊れて、死ぬイキするぅぅぅぅぅぅ❤」

幸せが止まらない。

こんな幸福が本当に合っていいのか。

（……ああ、女神ルティアよ、私は感謝します）

リオくんと、私を出会わせてくれた運命に。

もし彼がいなければ、これほどの快楽を、そして幸福を知ることなく、永遠に近い時を生きることになったでしょう。

だから、

「んおおっ❤　リオくぅん❤　もっとしてぇ❤　私が永遠に忘れられなくなるくらい、やっべぇセックスでぇ❤　まんこにリオくんを刻んでぇ❤　おおっ❤　おっごおおおぉぉぉぉっ❤」

逞しく奮い立つリオくんのおちんちんが、さらに私を犯していく。

どこまでも私を味わうように、雌の本性を完全に晒し出せと言うみたいに、腰の動きが加速していく。

「んっほおおおぉぉぉっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっおっおっ❤　そ、そんな激しく動かれたら、子宮壊れちゃうぅ❤　リオくぅん❤　壊しちゃだめぇ❤　おまんこはバカになっちゃってもいいけどぉ❤　子宮は、ダメぇ❤　リオくんの赤ちゃん孕む場所だからぁ❤」

おまんこを蹂躙されながら、おちんぽで子宮を犯されることの恐怖――同時に全身が悦び震えるほどの快感を覚えてしまった。

もし赤ちゃんが孕めなくなったとしても、リオくんとより快楽に狂っていくことができるなら、私は……もっと快感が欲しくなる。

「大丈夫、だよ、お姉ちゃん。このくらいで、壊れたり、しない、から」

言いながらリオくんは子宮口をさらに広げるみたいにグルグルと掻き回した。

リオくんの全部を受け入れる態勢が出来てしまった子宮に、私のおまんこは完全に服従してしまっている。

「おっ❤　おおおっ❤　んっぐうぅう❤　リオくん、出してぇ❤　いっぱい射精してぇ❤　エルフまんこ孕ませるくらい、濃いのビュッビュッって、欲しいのぉ❤」

互いにもう限界が近い。

体力的にも、精神的にも、いつ倒れてもおかしくなかった。

それほどのセックスを繰り返しているのに、リオくんのおちんちんはさらに熱くなって、私のおまんこは彼の精を貪り搾ろうと、吸いつくみたいに締め付けていく。

私に応えるように、リオくんもラストスパートと腰を加速させた。

「んっぐぅ❤　おっ❤　おっ❤　おっおっおっ❤　きてるぅ❤　やっべぇのきてるぅ❤　も、もうダメぇ❤　イっちゃう、からぁ❤　リオくん、私いぃいさっきから痙攣止まんないのぉ❤　おっ、おおおっ❤　んっごっ❤　おおおっ、んっほおおおおおおおおおおおおっ❤」

私の絶頂に合わせて、リオくんが射精した。

熱く迸る精液を受けて、快感の奔流が私の全身に駆け巡る。

その熱に翻弄されながら、私は死ぬほどの絶頂を感じていた。

「ぁ……ああっ❤　リオくんの精子で、子宮の中、いっぱぁい❤」

力が抜けて、私はリオくんに倒れ込んでしまう。

そして、身体が重なり合った。

互いに汗塗れで、疲れた身体は指一本動く気がしない。

「おねえ、ちゃん……ちゅっ❤」

そんな中で、リオくんは私を求めるように、優しいキスをしてくれた。

ぼんやりした意識の中で、本能的に唇を重ねたくなったのだろう。

「リオくん❤　ちゅっ❤」

愛おしさが止まらなくなる。

朦朧とした意識の中でも、私たちには互いが必要であるとわかる。

「大好きですよ、リオくん」

「ボク、も……」

かろうじて返事をしてから、彼はゆっくりと眠りに落ちた。

優しい寝息が聞こえて、その音は私のことも眠りに誘っていく。

「エッチな香りいっぱいで、汗まみれですけど……今日はもう、このまま眠ってしまいましょうか」

そのほうが、幸せな気持ちに包まれたまま眠ることができそうだ。

明日起きてからのお片付けが大変そうですね。

そんな小さな悩みを抱えながらも、私はたっぷりの満足感を胸に、私は瞳を閉じたのでした。

エピローグ　これからも続く幸せな日々

それからどれほどの時が流れたでしょう。

「リオくん、起きてください❤」

「う〜……」

今日も寝坊助さんのリオくんを、起こす朝。

でも、これまでとはもう違います。

だって、

「もう、パパになるんですから、もっとしっかりしてくれないとダメですよ？」

私のお腹は大きく膨らんでいました。

そうです。

リオくんとの赤ちゃんを孕んだのです。

エルフは孕みづらいと言われていましたが、あれほどたっぷりと濃い精液を何度も注ぎ込まれては、妊娠してしまうのも当然でしょう。

でも、リオくんとの間に赤ちゃんが出来たその時から、私の毎日はこれまでにないほどの幸せに溢れていました。

（……母になるというのはこういう感覚なのですね）

私も初めてのことで多くの戸惑いはありますが、それでもこれから生まれてくるこの子に会うことができるのが、本当に楽しみでした。

「……あ、おねえ、ちゃん……」

「おはようございます、リオくん❤」

母に――いえ、リオくんの妻になってからというもの、彼への愛情も今まで以上に強く深くなっていました。

彼の為ならなんでもしてあげたい。

そんな気持ちが日々、強くなっていきます。

無償の愛情こそが、本当の愛なのだと実感していました。

「ぁ……また、お腹……ちょっと大きくなった？」

「そう、ですね。なったかも、しれません。出産予定日はもう少し先だと思いますが」

「そっか……ボク、パパになるんだよね」

「はい。そして私はママになるんですよ。これからはリオくんではなくて、リオパパですね❤」

「じゃあ、ボクはお姉ちゃんじゃなくて、サリアママって呼べばいいの？」

「う～ん？　私はリオくんのママではなくて妻ですから……サリアと呼び捨てで、いい気もしますが……でも、リオくんが呼びたいように呼んでください❤」

どんな呼ばれ方でも、リオくんが愛情を持って呼んでくれるなら、私は嬉しいのですから。

「じゃあ……ママ❤」

「はい❤」

ママと呼ばれて、不思議と笑みが零れてしまいました。

「じゃあリオパパ、そろそろ起きられますか？」

「う〜ん……でも、まだ眠いよ」
「もう……パパになってもリオくんは甘えん坊さんですね」
仕方ありませんね……と、私は小さく息を吐くと、リオくんは甘えるような微笑を浮かべてきました。
「ママ……ボク、今日も欲しいなぁ」
「もう……またですか？」
ここ最近、リオくんには癖になってしまったことがありました。
それは、
「仕方ありませんね。いいですよ……おっぱい、あげます❤」
母となり母乳が出るようになった私のおっぱいを飲むこと。
私は服を脱いでから、彼の身体を支えるようにして起こして、膝枕をしてあげました。
そのまま胸を近付けると、リオくんが私のおっぱいに吸い付いてきました。
「んっ❤　リオくん、一生懸命、ちゅうっ❤　ちゅうっ❤　吸って、可愛いですね❤」
可愛い彼を見て母性本能が刺激されてしまって、私は自然とリオくんの頭を撫でていました。
ただ、目の前のおっぱいを夢中で吸っています。
「本当に赤ちゃんみたい、ですね❤　甘えん坊リオくんは、このまま赤ちゃんになっちゃうんですか？」
と、私がからかうように言うと、リオくんはおっぱいを吸いながらも少しムッとしたのか、むしゃぶり付いてきました。

「んあああっ❤　そんなわざとらしく、音出しちゃ❤　んんっ❤　あ、赤ちゃんは、そんなエッチな吸い方、しません、よ？」

「ちゅっ、んっ……ボク、ちゅううっ、赤ちゃんじゃ、ない、から、ちゅううっ」

「あんっ❤　も、もう赤ちゃん扱いされて、怒ったのですか？　でも、そんなところも可愛いですよ❤」

「可愛いく、ない！　ボク、お姉ちゃんの旦那様だよ？」

「あら？」

まさか、リオくんがそんなことを言うなんて。

でも亭主として一家を支えたいという気持ちの現れでしょうか？

「そうでしたね。旦那様❤　からかってしまってごめんなさい❤　お詫びに、い～っぱいおっぱい吸っていいですからね❤」

「うん。……ちゅううっ」

リオくんは、おっぱいを揉みながら、ちゅうっ❤　ちゅうっ❤　と、おっぱいを吸い上げていきます。どれだけ飲んでも、満足などしないみたいに。

そしてたまに、舌で転がしたり、軽く齧ったりして、私の乳房を弄びました。

「あっ❤　んんっ❤　ふぅ……んっ❤　あああっ❤」

母乳を搾るように吸われて、びゅ～びゅ～っとミルクがいっぱい出てしまいます。

「り、リオくん、いっぱい飲んでいいと言いましたが――そ、そんなに飲んだら、赤ちゃんの分が出なくなってしまいます❤」

「大丈夫。そしたら、またママのおっぱいいっぱい揉んで、たくさんミルク出るようにしてあげるから」

言ってさらに強く、リオくんは私のおっぱいを揉みしだき吸いました。

「ああっ❤　はあぁ❤　ああっ❤」

徐々に快感が強くなり、熱い吐息と甘い喘ぎ声が漏れてしまいます。

「ママ、おっぱい吸われるの、気持ちいい？」

「んっ❤　そ、そんなこと、ない……ですよ❤　こ、これは、本来……赤ちゃんに食事をさせる為の行為なのですから」

「お姉ちゃんは……赤ちゃんにおっぱい吸われても、感じちゃうのかな？」

乳首を舐めしゃぶるようにしながら、おっぱいを吸うリオくんは明らかに私に快感を与えようとしていました。

「んああっ❤　はぁ……ああっ❤　もう、リオくんってばパパになって少しイジワルになってしまったんですか？」

「ママが魅力的だから、いっぱいイジメたくなっちゃうの」

「も、もう……リオくんってば、いつかそんな、女をときめかすような言葉を覚えたのですか？　んあああっ❤」

乳首責めで軽イキしてしまう。

愛液が花弁から漏れ出して、雌の匂いが溢れてくる。

このままじゃ、発情してるってリオくんにバレちゃいます。

でも、私のおっぱいを吸いながら、リオくんも明らかに昂奮していました。
「リオくん勃起しちゃってますね❤」
私はズボンの上から、彼の勃起したものを撫でました。
熱いモノの感触が、私の昂りをさらに強くしてくれます。
「……ママのおっぱいがエッチすぎるからだよ？」
「ママのせいですか？」
「そう。……だから、責任取って鎮めてくれる？」
今日のリオくんは、とても積極的で甘え上手でした。
「わかりました。旦那様のお願いですからね。い～っぱい、気持ちよくしてあげます」
私はズボンの上から愛撫を重ねていきました。
直接刺激はせず、あくまで布越しの愛撫です。
でも、それだけでもリオくんはかなり気持ちがいいのか、呼吸を荒くしていました。
同時におっぱいを弄んでいたリオくんの手も、先程より激しくなっていきます。
快感に呼応して、私のこともより感じさせようとしているみたいでした。
「んっ❤　あっ❤　ああっ❤　リオくん、そんなに強く揉んでは、んああっ❤」
揉まれることで、お乳の中でミルクができているのか、胸が熱く滾ってきます。
「はぁ……ああっ❤　んっ❤　んあっ❤　ふぅ……んんっ❤」
ズボンを脱がして下着の中から、熱く滾った股間を取り出して、私は手コキを始めました。
「し～こ❤　し～こ❤　シコシコシコ❤　し～こ、し～こ❤」

声に合わせて、手コキにリズムを付けて、リオくんに快感を与えていきました。

するとリオくんも負けじと、両手で私のおっぱいを持って、思い切りぎゅううっ――と、搾ってきたのです。

不意打ちのようなその快感に、

「んおっ❤　んっおおおおおおっ❤」

私の両方の乳首から母乳が噴き上げました。

「わっ……あっ……」

おっぱいが射精するような光景に、リオくんが驚いたような声を上げました。

吸ってもいないのに、母乳が噴き出すとは思ってもいなかったのでしょう。

「はぁ……ああっ……リオ、くん……女性のおっぱいを、牛さんのお乳を搾るみたいに触っては、ダメです❤　乳房はとても繊細なのですよ？」

「ぁ……ご、ごめんなさい。おっぱい、こんな風になるって思わなかったから……ママ、今のはおっぱい……イっちゃったの？」

「い、イったと言えば……そう、なのですが……」

私も今までお乳を噴いてしまったことなどなかったので、正直戸惑っています。

でも、滾っていくおっぱいからお乳が出ていく感覚は、潮吹き絶頂と同じくらいの快感だったように思います。

「じゃあ、気持ちよかったんだね」

「そ、それは、そうですが……でも、あまり乱暴には扱わないでくださいね。おっぱいはリオくん

の為のものでもありますが、これから生まれてくる赤ちゃんのものでもあるんですから❤」

「でも、今はまだボクが独占してもいいよね？」

「あら？　独占欲が強い旦那様、ですね❤」

でも、そんなリオくん可愛らしく、同時に強く愛されているのだと感じられました。

「お姉ちゃん……このおっぱいで、おちんちん……気持ちよくして❤」

「わかりました。旦那様にご奉仕させていただきます❤」

私は態勢を入れ替えて、リオくんにパイズリを始めました。

長いストロークで、おちんぽを扱きあげていきます。

ギシギシと二人分の体重でベッドが軋んでいく。

「んっ、んんっ❤　どう、ですか❤」

「うん。すっごく、きもち、いいよぉ」

快感に表情を歪ませるリオくん。

そんな顔を見せられては、さらに奉仕をしてあげたくなってしまいます。

「旦那様のおちんちん、い～っぱいおっぱいで、ごしごし❤　ってしちゃいますからね❤　ほぉら❤　ほぉら❤　ご～し❤　ご～し❤　んっ❤　んんっ❤　どうですか？　リオくん、私のおっぱい柔らかい、ですか？　ごしごし❤　ごしごし❤　ごしごしされて、イっちゃえ❤」

熱く昂った肉棒をおっぱいでしっかりと包み込みながら、私はリオくんをた～っぷり癒してあげるみたいに、おちんちんを扱いていきます。

「リオくんはおっぱい大好きですよね❤　触るのも、揉むのも、吸うのも、こうしておちんちんを

扱かれるのも、大好きですよね❤」

「あっ……ふぅ……おっぱい、すきぃ……」

「素直ですね❤　いい子なリオくんには、も～っとおっぱいで癒しご奉仕してあげますからね❤　んっしょ❤　ふぅ……んんっ❤　感じちゃえ❤　パイズリで、感じちゃえ❤　ほぉら❤　ほぉら❤　ごしごしされて、おちんぽ、おっぱいで洗われるみたいにゴシゴシされて、ビュッビュッてしちゃえ❤」

長いストロークでおちんちんを扱く度に、リオくんのお腹の上で、おっぱいがぷるんと揺れていきます。

「おねえ、ちゃん……」

「はい？」

「お尻、こっちに向けて……」

「まぁ……本当にエッチな旦那様ですね❤」

少し恥ずかしいですが、私は拒絶はせずにリオくんにお尻を向けました。

シックスナインというのは、男性の性器を女性の顔に、女性の性器を男性の顔に来るような態勢で互いに奉仕を行う行為です。

「ああっ❤　こんな近くでリオくんにおまんこも……お尻も見られちゃってますぅ❤」

興奮が止まらなくなってしまう。

発情した蕾から、今にも彼の顔に愛液が零れてしまうんじゃないか。

そんなことを思うと、堪らなく身体が熱くなってしまいました。

「あっ❤　んおっ❤　リオくん、ま、待って❤　おまんこ、急に舐めちゃ❤」

「お姉ちゃんのここ……エッチな蜜が、いっぱい出てきちゃってる、よ」

リオくんに直接言われると、羞恥心に頬が赤くなっていくのを感じました。

「い、言わないで、ください❤　んっ……ふぅ……んんっ❤」

せめてもの抵抗に私はパイズリを再開しました。

でも、リオくんにクンニされる快感が想像以上に強くて、思うように身体が動かなくなってしまいました。

「はぁ……んああっ❤　あっ❤　んんっ❤」

ペロペロと、リオくんが襞の一枚一枚を丁寧に舐めるように、私に優しい奉仕をする。

その丁寧な行為が気持ちよくて、私は彼への奉仕が疎かになって、喘ぐことしかできなくなっていました。

「んっ❤　ふぅ❤　あっ❤　ああっ❤　リオ、くぅん❤　おまんこ、舐めるの上手、すぎますよぉ❤　んおっ❤　おおぉっ❤　ふぅ……ふぅぅぅ……んぐっ❤」

なんとか堪えようとしたのですが、ぷしゃあああぁぁぁ――と、リオくんの顔に潮を吹きかけてしまいました。

「ああっ❤　リオくん、ごめん、なさい❤　んおおっ❤　で、でもぉ❤　リオくんの舌が気持ちよくて、クンニ上手すぎてぇ❤　おっ、んおおおおっ❤」

「いいよ、もっと感じて」

止めることなく、蜜で満たされた花弁をリオくんは舐め続けた。

ご奉仕を頑張ってくれるリオくんに、私もなんとか応えたくて、必死に乳房を動かす。

でも拙い動きになってしまって、あまり彼を気持ちよくできていないかもしれない。

「んおっ❤　おおっ❤　おっほぉ❤　んごっ❤　おおっ❤　ふぅ❤　ふぅ❤　んんっ❤　リオくんにおまんこ舐められてぇ❤　こんな中でパイズリ、できなっんっ❤　ご、めん、なさい、リオくぅん❤　上手にご奉仕できなく、てぇ……んおおおおぉぉぉっ❤」

再び絶頂がきて、奉仕が止まってしまう。

イかされればイかされるほど、蕾は熟れて敏感になっていく。

「はぁ……ああっ❤　んっ❤　あああっ❤　ああっ❤　んっ❤　リオくぅん❤　んおおおおっ❤　ちょ、ちょっと待って、くだ――く、クリぃ……今、クリトリス触られたら、わ、私ぃ、ご、ご奉仕なんて絶対できなくなっちゃ……んっぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ❤」

ぷしゃあああああああっ❤

ぷしゃあああああああっ❤

花弁が二度、潮を噴き上げた。

リオくんを汚してしまうとわかっていても、あまりの気持ち良さに堪えることができない。

「おっ❤　おっ❤　んおおおっ❤　クリ責めやっべぇ❤　クリ責めされながらのクンニぃぃぃぃ❤　クッソきくぅぅぅう❤　これぇ堕ちるぅ❤　雌ならこれされて、イかないわけないですぅ❤　のおおっ❤　おっほおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉっ❤」

リオくんが、あまりにも奉仕上手過ぎて、もう私は何度イかされたのかもわからなくなっていました。

腕の力が抜けて、身体を支えられなくなって、私はその場で崩れ落ちてしまいました。

「んっ……」

リオくんの顔に思い切りあそこを押し付けてしまっています。

「あぁ……ご、ごめん、なさいリオくん……」

「んっ……平気だよ。サリアママ、つらいならもう少し休んでて……」

優しいリオくんの言葉に、私は余計に昂りを感じてしまいました。

もっと強い快感が欲しくなってしまう。

おまんこがうずいて、うずいて、仕方ないのです。

「あぁ……リオくぅん……熟れた蕾はもう、食べ頃ですよぉ❤　私のおまんこ、おちんちんで味わってみませんか？」

私は彼に向き合って、発情顔を晒しながら、そんな淫らなことを口にしていました。

でも、正直な感情を、雌の本能をもう抑えられません❤

「リオくん……ママになったおまんこ、犯してください❤」

「うん。今日もいっぱい愛してあげるね」

私をベッドに横たわらせて、リオくんがおちんちんを花弁の中心に当てました。

「いくよ、サリアママ――」

「んっ――」

濡れそぼった花弁を熱い肉棒が押し開いて、ゆっくりと入ってきました。

「はぁ……ああっ❤　リオちんぽ入ってくるぅ❤」

いつもよりも優しい挿入で、リオくんの形に蕾が変わっていきます。

そして奥に――赤ちゃんの部屋にコツンとちんちんが当たりました。

「んああっ❤　ああっ❤　コンコンって、リオパパがノックしてるぅ❤　んんっ❤　赤ちゃん、びっくりしちゃう、かもぉ❤　んっごおおおぉぉぉぉぉっ❤」

優しい子宮ノックにも関わらず、私は荒々しく激しくされている時と同じくらい、おまんこが痺れていきます。

赤ちゃんを孕んでから本番セックスを我慢していたからでしょうか？

自分でも驚くくらい子宮がきゅんきゅんして、リオくんのちんぽに吸いつこうとしちゃってるみたいです。

リオくんは一定のリズムでコンコンと子宮をノックをしながら、時折おちんぽをグラインドさせて、全体を掻き回すように私を感じさせてきました。

「おっほぉ❤　おおっ❤　んごっ❤　おおおぉぉぉっ❤　すっげぇ❤　リオくん、動き優しいのにぃ……私の弱い場所、適確に突いてきて……おっほぉぉぉお❤　イくぅ❤　妊娠まんこイかされまくってるぅ❤」

おまんこが軽イキと本イキを交互に繰り返していると、今度はおっぱいが熱く滾ってきました。

「おっ❤　おおおっ❤　なんかキてるぅ❤　おっぱいに、なんかキちゃってるぅ❤　やっべぇ❤　おっぱい、出るぅ❤　パンパンに張って出ちゃうぅぅぅぅぅっ❤　んっほおおおおぉぉっ❤」

絶頂した瞬間、おまんこが潮を噴き上げました。

そして同時に、その絶頂に呼応するようにおっぱいも母乳を噴き上げたのです。

おまんことおっぱいが同時に白いものを噴き上げて、リオくんも流石にびっくりしたのか腰の動きを止めました。

「ああっ❤　あああぁぁぁっ❤　リオくん、見ちゃ、ダメぇ❤」

「……サリアママ、おっぱいまでイっちゃたんだね。母乳まだ出てる。勿体ないから吸ってあげる❤　ちゅうっ、ちゅうううぅぅぅぅ」

「おおおっ❤　んっおおおおっ❤　まんこ敏感になってる時に乳首吸われたら、おおおおっ❤」

ちゅうっ❤　ちゅうっ❤　と、交互の母乳を味わうように吸われました。

イきたてのおっぱいをしゃぶられていると、グチュグチュのおまんこから、さらに熱い蜜が溢れてきてしまいます。どれだけ溢れても愛液は止まらず、花弁から垂れて零れていきます。

「おっおっおっ❤　リオくん、おまんこぉ、おまんこもっとください❤　リオちんぽで、もっとぐちゃぐちゃにしてぇ❤　赤ちゃんびっくりするくらい、めちゃくちゃに犯してぇ❤　おおおおっ❤　んっほおおおおおおおおおおおっ❤」

優しいコンコン子宮ノックから、懇願する私の頼みを聞いてガン付き子宮ノックに変わりました。

赤ちゃんがびっくりしちゃうくらいの激しい子宮責めに、私の身体は喜びが止まらなくなってしまいました。

「おっ❤　おっ❤　おっほおおおおっ❤　子宮責めやっべぇ❤　本気出してリオくんに、私の妊娠まんこ完全に服従しちゃってるうううぅぅっ❤　おおおおおぉぉぉぉぉっ❤　し、死ぬぅ❤　狂うぅぅぅ❤　イき狂ってるぅぅぅぅっ❤　エルフまんこガン責めされて、理性ぶっ飛んじゃうぅぅぅぅ❤　ママじゃなくて、雌になっちゃいますぅぅぅうっ❤　おっごおおおぉんぐうううっ❤」

赤ちゃんに絶対に聞かせられないような淫乱雌の矯正を上げて、私のおまんこは完全に旦那様のおちんぽに敗北してしまいました。

「おおっ❤　おおっ❤　おおっおおっおおっ❤　ああっ、だ、だいしゅきなリオちんぽにぃぃぃ夢中になっちゃってるぅ❤　幸せぇ❤　おまんこめっちゃイけて、やっべぇのぉ❤　んおおおっ❤　また、イくぅ❤　イってるぅぅぅぅうっ❤」

何度も何度も絶頂していると、またおっぱいが熱くなってきてしまいました。

「これぇ❤　また噴くぅ❤　母乳出ちゃうぅ❤　赤ちゃんが子宮ガン責めで悦んでるから、おっぱい欲しいって言ってるみたいで、妊娠おっぱいが反応しちゃってるんですぅ❤　おっ、おっごおおおおおおおおぉぉぉおっ❤　んっ❤　んっぐうううううううっ❤　イグウウウウウ、おっぱいまたぁイッグぅぅぅぅウウウウウウウウウウウぅぅぅぅ❤」

びゅうううううううう――ぴしゃあああああああっ❤

二つの大きな果実から天井に届くほどの真っ白なシャワーが吹き荒れました。

それが雨のように部屋に飛び散って私たちを濡らしていきます。

でも、そんなことは気にすることなく、リオくんは私のおまんこを責め続けていました。

「んっぐぅ❤　おまんこ責めぇ❤　止まんなぁい❤　リオくんのちんぽぉ❤　全然、萎える機会ない❤　こんな強い雄ちんぽで犯され続けたらぁ、体力持たない、ですぅ❤　おっ❤　んごおおおおっ❤　エルフまんこぉぉぉ完熟しちゃうぅぅっ❤　おっ❤　おっ❤　おおっ❤　んっほおぉぉ❤」

完全に熟れたおまんこの蜜が、旦那様の極太ちんぽに絡みついて、おちんちんを扱き精子を搾り取ろうとぎゅうぎゅうと締め付けています。

でも、リオくんの抽送は全く勢いを失うことなく、それどころか私を喘ぐ姿をもっと楽しもうとするみたいに、強烈ピストンを続けてきた。

私はその快感に流されることしかできなくて、下品に喘ぎながら快感を享楽していく。

「んっぐぅぅぅう❤　ふぅふぅふぅんぐぅぅぅっ❤　だめぇイクの止まらない❤　やっべえぇ❤　マジでこの凶悪ちんぽに殺されるぅ❤　イキ殺されるぅ❤　エルフまんこ殺されちゃうぅ❤　リオちんぽぉぉぉぉぉぉっ、すっげぇ❤　おっ❤　おおおっ❤　雌にされるぅ❤　快感で何も考えられない獣にされちゃっぅぅぅう❤　理性、ぶっ壊れてくぅぅう❤　んっぐおおおおおっ❤」

頭が真っ白になって、もう限界が近いことがわかりました。

これイかされたらもう気絶しちゃう❤

絶頂させられすぎてぇ、意識保ってられないのぉ❤

「おっ❤　おおっ❤　んおおっ❤　お、お願い、しますぅ❤　リオくぅん❤　リオ、くぅん❤　わ、わたしぃぃぃぃこれ以上、持ちません、からぁ❤　わ、私が意識、保ててる間にぃ、おまんこにくださぁい❤　リオちんぽの熱いの、膣内にいっぱい出してぇ❤　んっごっ、んっふぅぅぅぅぅっ❤」

「出すよぉ！　サリアママのまんこに、いっぱい出しちゃうから、ね」

「はい❤　はいぃぃぃっ❤　ください❤　リオちんぽ射精してぇ❤　おまんこをいっぱいにしてぇ❤　幸せで溢れさせてくださぁい❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おおっ❤　んっごおおおおっ❤　やべっやべっ、やっべぇのおおおおっ、ま、まだ腰、速くなってぇえんっぐぅぅぅぅっ❤」

留まることを知らないリオくんおちんぽが、ここに来てさらに勢いを増してきました。

私をイかしまくって殺そうとするみたいに子宮ガン責めおまんこガン突きの、雌の弱点を全部知

り尽くした快楽責めで、雌を狂わせる強烈なおまんこを味わわせてきました。

「おっ❤　おっほぉ❤　んっぐぅぅぅう❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おっ❤　おおおおっ❤」

リオくんのおちんぽが膨らんで、膣内で脈打っているのがわかります。

射精がもう近付いている証拠です。

何度も何度も味わわせらた射精の感触。

女が一番、幸せを感じられる瞬間がもう少しで訪れます。

「おっ❤　おお❤　きてぇ❤　リオくんきてぇ❤　おまんこ待ってますからぁ❤　リオちんぽザーメンで、おまんこ狂わせてくれるの、待ってますからぁ❤」

ラストスパートの高速抽送で、ガンガン子宮が突かれて――強烈な一突きと共に、子宮口におちんぽが押し当てられました。

「んおおおっ❤　子宮におちんぽキスされてるぅ❤　おちんぽキスでイってるぅぅぅう❤　わ、わらひいいいいっ、イかされちゃってるうううううううっ、んっぐうううううううううぅぅぅう❤　まんこ幸せぇぇ、ですぅ❤　おっ、んっふおおおおおおおおおおおおおおおおっ❤」

子宮口に亀頭を擦り付けながら、リオくんの熱いのが膣内に噴き出てきました。

ドロっとしたものがおまんこに流れ込んでくる幸せな感触に溺れながら、私の妊娠まんこは限界を超えるほどの絶頂を味わって、私はそのまま意識を深い沼の中へ落としていったのです。

※

「ぁ……ああ……あれ？　リオ、くん？」

「あ、お姉ちゃん……起きたんだね。身体、大丈夫？」

目を開くと、見えたのは可愛らしい天使の顔でした。

「あぁ……私、は……」

「ボクがお姉ちゃんをいっぱいイかせちゃったから……それで……」

どうやら私はセックスの快感でそのまま気絶してしまったようです。

「お姉ちゃん、身体つらくない？」

「ええ、大丈夫ですよ。リオくんがいっぱい愛してくれたから、幸せすぎて元気になっちゃったくらいです❤」

そう言って、私は彼の期待にキスしました。

「なら、よかったけど……ごめんね。ボク、お姉ちゃんの膣内が気持ちよすぎて、それで……おちんちん、我慢できなくなっちゃって」

「私が望んだことだからいいのですよ❤　本当にとっても気持ちよかったです」

リオくんが愛おしくて、自然とぎゅっとしていました。

頭をナデナデして、また抱き締めて、これからもずっとリオくんの傍にいたいです。

「あっ……赤ちゃん、お腹の中で動いたみたいです」

「ほんと？」

「……はい。触ってみてください」

リオくんが私のお腹に触れました。

すると、赤ちゃんが元気にお腹の中で動きました。
「あ……ほんとだ」
「パパに、元気だよって伝えてるんですよ、きっと」
「ボク……本当にパパになるんだよね」
「はい❤　リオパパ、ですよ？」
「ちゃんとしたお父さんに、なれるかな？」
少し自信がなさそうに、リオくんは顔を伏せました。
初めてのことで、きっと色々な不安があるのだと思います。
でもそれは私も同じです。
だからこそ、
「二人で支え合って、この子を立派に育てましょう。しっかり、リオくんみたいな強くて逞しい、立派な大人になりますようにって」
「ボク……立派な大人になれてる、のかな？」
まだまだリオくんも成長途中ですが、
「なれていますよ。私のことを守ってくれたではないですか。これからも、守ってくださるのですよね？」
リオくんを抱き締めながら、彼の顔を見つめました。
するとリオくんの目は、しっかりと私の瞳を捉えました。
「うん。……何があっても、きっとボクがお姉ちゃんを守るからね。それに……この子のことも」

お腹に触れながら、リオくんが力強い顔で誓ってくれたのです。

「嬉しいです、リオくん。でも、私だってリオくんのことを守りますから。二人で――いえ、この子が生まれたら、三人で力を合わせて、生きていきましょう」

「うん！」

私の宝物が優しく笑いました。

そんな彼の笑顔を見ているだけで、私の胸は幸せな気持ちでいっぱいになっていくのです。

「リオくん……ちゅっ❤　ちゅううっ❤　ちゅうううぅぅっ❤」

愛情をたっぷり伝えるキスを交わしました。

「あっ……お、お姉ちゃん、ダメ、だよ……そんなキスしたら、また……」

リオくんが戸惑うように声を上げた理由は直ぐにわかりました。

「あら？　また……勃起してしまったのですね」

「うぅぅぅぅ……ぼ、ボク、なんで直ぐにこうなっちゃうんだろう」

羞恥心にリオくんが顔を赤く染めます。

でも、私は全くそんなことは気になりません。

むしろ私でこうなってくれたことを、嬉しく思っていました。

「いいのですよ❤　私が、リオくんが満足するまで、何度だって慰めてあげますから❤」

「おねえ、ちゃん……」

「リオくん、キス、しましょう❤」

そして、私たちは快感を求め合う激しいキスを繰り返しました。

「ちゅっ❤　ちゅうううっ❤　ちゅるるるっ❤　ちゅうううっ❤　んっ❤　ちゅうううっ❤」

互いにいっぱい愛情を伝え合うように、何度も何度も。

そしてキスを終えた後、私たちは再び身体を重ね合いました。

愛し合う男女が一番幸せを感じられる、愛情を確かめ合う為の行為を。

これから先、どれほど時間が過ぎて、きっと私たちの愛は変わらない。

リオくんがいて、私がいて、そして……この先、生まれる新しい命と共に、平穏な日々を守りながら、幸せな毎日を生きていく。

そんな日々を、私たちはずっと過ごしていくのでした。

完

ダウナー褐色エルフ聖女様と、甘々性教育からのドスケベセックス❤ＡＳＭＲ特典用小説

発行日：２０２４年３月３０日

発行サークル：黒くまさんち。

Ｘ（Ｔｗｉｔｔｅｒ）：@ｋｕｒｏｋｕｍａｓａｎｃｈｉ

本作品を無断で複写、転載、配布などの行為を禁じます。